

西行寺さんちのフランドール

cascades

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もしも、フランドールが西行寺幽々子に育てられたら、というIFの物語。

物語は495年前の白玉楼からスタートします。

幽々子に育てられるという話の性質上、フランドールと幽々子の性格が改変されています。

#付きの話には挿絵があります。

目次

1	1	出会い#	1
1	2	思惑	11
1	4	成長と絆	21
1	5	管理者	31
1	6	妹	41
1	7	幽霊移民計画	52
1	8	誕生日	71
1	9	ルビコン計画#	90
1	10	監査#	109
1	11	取引#	126
1	12	日常	146
1	13	水鬼鬼神長#	166

1 | 1 | 出会い

出会い

殺しても殺しても、満たされない。

いつも、なにかが足りないと思っていた。

まるで完成目前のパズルのピースが見つからないような、出来上がるはずのものが、自分のせいで出来上がらない歯がゆさのような、そんな虚しさを私は抱えている。

私の能力、『死を操る程度の能力』では、この欠けたパズルのピースは見つけられないのだろうか？

では何が必要なのだろうか？

そんな満たされない毎日を送っていた私、さいぎょうじゆゆこ西行寺幽々子とフラン
ドールの出会いは唐突だった。

——今から495年前の春

白玉楼の寝所で寝ていると、不思議な夢を見た。

真っ暗で何も見えなかったけれど、声だけは聞こえた。

「お願いです……あの子の事、宜しくお願いします……」

ひとつ、腹に響くような音ともに少し揺れた気がして目を覚ました。

私の寝所は12畳あり、布団は中央に敷かれている。

昔から、広い部屋でないと寝られない、という妙なところが私にはあった。

誰かはそんな私を変った娘だと笑っていた。

その誰かとは父だったのだろうか？

もうよく覚えていない。

月明かりで床の間の掛け軸を見ると、かすかに揺れていた。

幽霊の絵の書いてある掛け軸が、まるで本物の霊のようにゆらゆらと。

どうやら、屋敷が揺れた様だ。

「地震かしら」

しかし、地震、にしては妙な感覚だった。

まるで、この世界の魔法使いと呼ばれる者たちが使う魔法、その大規模なものに似ていた。

魔法は使えないが感覚としての理解はある、魔力の残滓の様なものが漂っている事を私は知覚する。

なんだろう、と考えてみる。

例えばこの白玉楼への何者かの襲撃、というものが一番ありそうな気がした。

この世界の乙女達は、とかく、抗争が好きだ。

己がその標的となっても不思議ではない。

廊下から誰かの足音が聞こえてきた、誰かというのはわかってはいるのだが。

「幽々子様、失礼致します」

障子越しに声をかけてきたのは、最近になってこの白玉楼に住み込みで働いてもらっている中年、護衛として迎え入れた魂魄妖忌こんぱくようきの声だった。

彼は是非曲直ぜひきよくちよくちようからの派遣ではなく、私が個人的に雇ったのだ。

剣術の腕を買われて護衛役にした半人半霊である。

半人半霊というのは人間と幽霊の混血で、寿命が人間よりもはるかに永く、私を知る限り500年は生きている。

だが見た目が人間でいうところの50代ぐらいだった。

見た目に関しては自分も人のことは言えないけれど。

彼の人外としての特徴的な外見は、人間と大きめの白玉の様な幽霊がいつもそのそばに浮いているところ。

「今しがた、地震の様なものがあり、屋敷が揺れました。お怪我等はなさっておりますでしょうか？」

「私は大丈夫よ。まず屋敷の状態を確認してちょうだい」

「承知しました」

彼が下がっていくのを見届け、私は妖忌の気配が消えるのを待つ。なぜならば、これから探索するなどと言ったら、朝までお説教コー

スは確実だから。

妖忌は腕も立つし、普段はいたって温厚なのだが、口うるさいところが、少しだけ苦手である。

とりあえず、白玉楼に無断で侵入してくる輩だ、まずは主が出迎えないといけない。

気になっていた魔力の残滓を探していざ、と気合をいれ白玉楼の庭へと降り立つ。

音もなく、亡霊としての嗜みは忘れずに。

すぐさま探索を始めましょう。

魔力の残滓をたどっていくと、桜並木の方に強く感じるものがある。

それを追いかけていくと、奇妙なことに赤子の泣き声の様なものが見えてきた。

「この方向は……」

——終点は西^{さいぎ}行^{よう}妖^{あやかし}の根本だった。

魔力の残滓を大きく感じ取れた。

ここまで大規模なものは転移魔法でも使ったのだろうか？

「オギャー！・オギャー！」

籠が置いてあり、かすかに揺れていた。

中を覗き込むと赤子が泣いていた。

赤子のような声ではなく、本物の赤子だったのだ。

私は赤子をそつと抱き上げる。

首の座り具合からして、生後4〜5ヶ月といったところか。

綺麗な金髪が生え始めている。

抱き上げて分かった事だが、この子には歪な羽根が生えていた。

枯れ木にクリスタルをぶら下げた様な奇妙で綺麗な羽根だった。

「いーいーいーいーいー」

こんなところに赤子がいるという、奇妙な状況にも関わらず、その愛らしさに思わず抱きしめて、優しくゆっくり揺すってやる。

すると、どうやら満足したのか、泣き止んでくれた様だ。

「うー！ うー！」

「あら、かわいいく」

とても母性本能をくすぐる、良い笑顔である。

ああ、自分の娘にしたい……。

揺れの前に見ていた夢を思い出す。

「この子をお願いします」とは、つまりこの赤子を任せるといふ事なのだろうか。

無理難題である。

白玉楼のある冥界は、半人半霊などの適正が無いと、留まるだけで死んでしまう。

また、冥界に留まる場合にも、是非曲直^{せひきよくちよくちよう}の許可を取る必要がある。

問題は山積みだがあの声に応えてあげよう、という気持ちになつていた。

あの声の為、というわけでなく、この愛らしい赤子のために。

「だあ！ だあ！」

顔をペチペチと叩かれて我に返る。

とにかくこんなところに居続ける理由もない。

屋敷へ戻ろうと、籠を拾い上げる。

「さ、籠を持って、帰りますよ〜って、あら？」

籠の中には紙切れが入っていた。

不思議な文字で、読むことができなかったが、名を記したものだろうか？

とりあえず、帰路に就く事にした。

頭をかしげながら歩いていると桜並木の影から妖忌が現れた。

多分、私が部屋に居ない事に気が付いてしまったのだろう。

屋敷の異常確認をやらせたのにこの速さ。

「妖忌？ 屋敷の異常確認は終わったの？」

「はい、滞りなく」

よし、業務連絡終わり。

部屋に戻るべし。

「騙されませんぞ！ 幽々子様、その赤子は一体どうなされたのですか!？」

折角寝かしつけたのに、大きな声で、喋る妖忌。

「せっかく静かになったのだから、大きな声は出さないでちょうだい、妖忌」

私は妖忌を窘めるのと同時に、彼の問いにも答えることにした。

「どうした、と言われても……。養育を誰かに頼まれたのよ」

「それはどんな人物なのですか!」

「姿は見えなかったわ」

「私には捨て子を拾ったとしか、聞こえませんぞ!」

妖忌は捲くし立ててきて、赤子が泣き始めてしまった。

「ほら、言わんこつちやない」

私は籠を妖忌に渡すと、両手で赤子をあやし始めた。

すると、赤子はピタリと泣き止んだ。

「さあ、屋敷に戻るわよ、妖忌」

「……仰せのままに、幽々子様」

屋敷に戻ると、客間に誰かがいる事に気が付いた。

敵意はなく、こんな時間に訪れる客など、十中八九、スキマ妖怪だろう。

妖忌も気配を感じ取ったらしく、一礼すると彼は土間の方に向かってしまった。

お茶の準備をしてくれるのだろう。

口うるさいのは少し苦手だが、妖忌のちよつとした気遣いが私は好きだ。

従者を見送りつつ、客間に入ると案の定、スキマ妖怪が不法侵入していた。

「お邪魔しているわよ、幽々子。あら、子供でも産んだの?」

「なんで紫がいるのよ」

こいつは八雲紫。

あらゆる境界を弄る事ができる、スキマ妖怪である。

例えば、湖に映った月と本物の月の境界を弄って、月面まで瞬間移動する事ぐらい簡単にできる、危険な奴である。

自分の住処から白玉楼の移動など朝飯前なのだろう。

私が亡霊になる前からの友達らしく、一緒にお茶をしたり、歌を詠んだりと、自分としては親友のつもりでいる。

私は紫が来ている事に少し驚いている。何か用事でもあるのだろうか。

「私が数年前に張った結界を覚えているかしら？」

「ええ、覚えているわ。『幻と実体の境界』だったかしら」

確か、今私たちがいる幻想郷の中を幻の世界として、外の世界を実体の世界としたものだった気がする。

妖怪拡張計画がどうの、とのたまっていた気がする。

「そう、その結界の効果は全世界に及んでいるわ。だから海外からも妖怪を招き入れる事が可能なの」

一旦紫が話を切って、赤子の方を見る。なんとなく、今日来た理由を察した。

「ちようにど強力な妖怪が、海外から入って来たみたいだから、挨拶しようと思つて」

でもこんなに小さいんじゃないかと、赤子の手を指でつついてきた。

ひとしきり赤子と戯れた後、紫は私の目を見つめてきた。

「ところで幽々子、その赤子、どうする気？」

「育てるつもりだけど」

紫はとたんに難色を示す表情となった。

「子供を育てるのは本当に大変よ、ぬか漬けを漬けるのと訳が違うの」
痛い所をついてきた。

私はよく興味を持つては、すぐに飽きる性格なのだ。

興味を失つたぬか漬けの壺は、どこに行ってしまったのだろうか。
旗色が悪い、このままでは赤子を取られそうだ。

紫のことだ。力をつけるため、と理由をつけて本当の意味で食べてしまうかもしれない。

「この愛らしい赤子のために、寝ている時に頼まれた話をする。

「頼まれたのよ」

「誰に？」

紫が眉をひそめて聞いてくる。

「さあ？ 夢の中でこの子を宜しくお願いしますって頼まれちゃって」

「頼まれたって……送り込んだ者に悪意があったらどうするのよ」

「悪意があったら、紫が気付くでしょ」

「確かにさつき戯れた時に調べたけど、悪意ある結界や魔法、呪いの類はかかってなかったわ」

「やっぱり調べていたのね。それを聞いて安心したわ」

「もう幽々子ったら……」

紫は頭が痛いという、額に手を当てるしぐさをしながら言った。

「それなら、ちゃんと面倒を見ますって宣誓してくれないかしら？」

宣誓といっても、どうしたら良いものか。

紫が宣誓を求めるほど、赤子を育てるのは大変なのだろうか。

とりあえず、右手を挙げて敬礼する事にした。

「白玉楼の主、西行寺幽々子の名において、この赤子が元服するまで面倒を見ることを誓います。これでいいわね？」

紫は久しぶりにカリスマある幽々子を見た、なんて漏らす。

失礼な話だ。

私にだって、野心はある。

今後、外の人間はどんどん増えるだろうし、転生待ちとなる幽霊が多くなる筈である。

それによつて、冥界を拡張する必要が出てくるだろうし、人手不足になる事は目に見えている。

適当な人材を是非曲直庁から宛がわれるより、自分の息のかかった娘が働き手として欲しい。

敵しいのは妖怪だけで十分である。

私は樂をして、領土を拡張したいのだ。

私が考えている冥界の拡張計画に、この赤子を盛り込む形で、何とか養育する権利を是非曲直庁から得たい。

問題点としては2つある。

まず、1つ目が是非曲直庁の欲しい人材であるか、2つ目が冥界に適應できるのか。

この2つを達成する必要がある。

物知りの紫が居るうちに、聞かなければならない事を聞いてしまわなければ。

まず、この赤子がどの様な種族なのか、わからないのである。

「この子だけど、種族が何かわかる?」

私は赤子を紫に抱かせて確認させる。

「吸血鬼ね。既に牙と、歪だけど羽が生えている」

紫は吸血鬼の概要を語り始めた。

「吸血鬼は鬼の膂力や天狗の速度に並ぶと言われているわ。だけど弱点が結構多いの。流水が渡れないから、雨の中の移動は不可能だし、日光に弱いから日中は外出できないのよ」

他の弱点として、柊の枝や鱒の頭も駄目、炒った豆をぶつけるのも駄目らしい。

養育する時には気を付けないといけない。

一応、広義の意味で鬼ということなので、是非曲直庁の欲しがりそうな人材ではある。

1つ目の問題は達成ということにする。

まだ情報不足だ。

「紫、もう少し種族の情報ってないかしら」

「そうねえ、吸血鬼はほぼ不老不死ね」

「ほぼ不老不死? ほぼ死なない、という事かしら」

「その通りよ」

ほぼ死なない状態、冥界に適應できる条件に一致しそうだ。

最後の2つ目の問題も達成。

あとは是非曲直庁を説得できれば、赤子を養育する舞台が整うだろ

う。

次は生きることには欠かせない食料が何かを聞く。

「食料は何かしら」

「その名の通り、人間の血液ね」

「人間ね……妖忌でもいいのかしら？」

「やめておきなさい、血液はこちらで用意するわ」

「どうやら紫に大きな借りを作ってしまう様だ。」

「ありがとう、紫。お礼は何がいいかしら？」

紫は考える仕草をわざとらしくしながら答えた。

「今は特にないわね。1つ貸しつて事で」

紫から赤子を返してもらいながら、私は言葉ではなく、微笑みで答えた。

ふと思う事がある。

私と紫の間に友情はあるのだろうか、と。

私の能力、『死を操る程度の能力』は暗殺にはもってこいだ。

生きてさえいれば、どんなに強い敵でも私の前では赤子同然、即座に死をくれてやれる。

そんな危険な能力を持った奴を親友だと言われれば、頭のいい敵対者なら交渉の席に座るだろう。

紫はこの幻想郷で、妖怪の賢者というものをやっている。

その関係で敵対者も多い。

だから紫は私にとってもよくしてくれているのだろうか……。

「うー！ うー！」

また顔をペチペチと叩かれて我に返る。

考え事をする顔にでてしまうのだろうか？ いや、でない自信はある。

私は話題を変える事にした。

「その血液はどうやって手に入れるの？」

「それは……私の仕事よ、ビジネス幽々子……あなたは知らない方がいい」

これ以上聞いても答えは返ってこないだろう。

今度は紫の方から話を振ってきた

「ねえ幽々子、いつまでも名が無いのは不便じゃないかしら」
紫から言われて、ふと気がつく。

不思議な文字で、読むことができなかった紙切れを思い出したのだ。

「そういえば、拾った籠の中に紙切れが入っていたのだけれど、読めなくて。多分、名だと思うのだけど。紫、読んでくれないかしら」

私は紫に紙の切れ端を渡す。

「Fr and re . S」

「フランドール・エス？」

流暢な外国語を聞き返してしまった。

「多分、名ね。フランドールが名でエスが姓の頭文字かしら」

姓が付いているという事は、良い所のお嬢様の可能性がある。

流石に血筋はわからないが、今後の成長に期待が持てそうだ。

一体どんな能力が発現するのが、楽しみだ。

「それじゃ、この子の幼名はフランドールで決定！」

私は赤子改めフランドールを抱き上げた。

「元服するまでしっかり育ててあげるからね」

そのまま頬ずりし、フランドールがウフフと唸っている。とてもかわい。

私は最後のパズルのピースを手に入れた気がした。

1 | 2 | 思惑

思惑

夜、フランドールを寝かしつける。

3時間後……「ギャオー！」

さらに3時間後……「ギャオー！」

夜泣きの到来である。

私、西行寺幽々子は子育てを舐めていた。

——赤子は24時間営業だった。

幻想郷担当閻魔、四季映姫・ヤマザナドゥ様宛てに手紙をしたためた。

フランドールを養育する許可が得られる様にやや誇張した理由と面談のお願いを記載した。

これで四季様もフランドールに興味を持つだろうし、面談に応じてくれる筈である。

手紙を妖忌に持たせ、面談の約束日時を知らせに使いの死神、小野塚小町が翌日には現れた。

面談の日は2週間後だったのだが、驚いたことに場所は白玉楼で行われることとなった。

正直、今のフランドールをあまり動かしたくなかったので、ありがたいご配慮だった。

ただ、面談までの2週間が地獄だった。

最初はおしめの取り換え方すら知らなかったのだが、紫が1から教えてくれた。

「ねえ紫、おしめはこう巻く、でいいのかしら？」

「違う、そうじゃない」

紫が血液を革袋で提供をしてくれるのだが、血液を飲ませた後、適度にゲップを吐かさなければならず、四苦八苦した。

「えーと、縦抱きにして、フランドールの顎を私の肩にかけるようにして、軽くトントンと背中をたたくと」

「げぶう」

「上出来よ、幽々子」

紫は私が心配らしく、毎日会いに来てくれて、優しく励ましてくれたり、子育てを手伝ってくれたりした。

部下の家事手伝いの幽霊に、おしめの洗濯や必要になる手ぬぐいの洗濯などの雑務を任せていたので、私にはある程度の精神的余裕ができた。

紫や部下の支えがあるからこそ、この子育てがうまくいっていると思う。

親友の紫には感謝してもきれない。

しかし、こんなにも赤子とは手がかかるものなのか。

私の交友関係と部下をフル活用して、ようやく子育てができている状態である。

2度目になるが、私、西行寺幽々子は子育てを舐めていた。

でも後悔はない。

地獄の様だが、この充実した日々を、手に入れられたのである。

私の欠けたパズルのピースは、やはりランドールだったのかも知れない。

2週間はあつという間に経過し、四季様との面談日は、すぐにやってきた。

約束の時間が迫ったので、ランドールを抱っこして玄関で待っていると、2人の人影がうつった。

1人は背が低めの四季映姫・ヤマザナドゥ様で、もう1人は背が高めの小野塚小町だった。

四季様はこの幻想郷の担当閻魔で、『白黒はつきり付ける程度の能力』を有し、この力で裁判を行い、死者をどこへ送るか決めている。

小町は四季様の部下で、三途の河の船頭をしている死神であり、『距離を操る程度の能力』を持っている。

私は笑顔でお二方をお迎えた。

「お久しぶりです、四季様。ようこそいらっしゃいました、それに小町

も」

「お久しぶりです、幽々子。私が幻想郷の担当閻魔になったときの挨拶以来ですか」

「ちわー、西行寺様」

挨拶もそこそこに、小町がフランドールに反応し、私に近寄ってきた。

「かわいいねー。あたかも抱っこしたいんだけど、いいかい?」

「どうぞ〜」

私は快く引き受けた。

フランドールを抱えて、小町が抱っこしやすくする。

小町は笑顔でフランドールを受け取った。

「ところで、この子の名前は何だい?」

「幼名でフランドールと名付けましたわ」

「そうかく、あんたの名前はフランちゃんっていうんだ」

小町はフランドールを抱きしめて頬ずりするなどして楽しんだ後、上司の四季様に声をかけた。

「四季様も如何ですか?」

「私も抱っこがしたいですね」

小町は上司の態度に驚いた表情をしていた。

私もてつきり赤子や子供は苦手です、などと理由をつけて抱かないかと思っていた。

四季様は悔悟棒かいごぼうを置き、手慣れた手つきで小町からフランドールを受け取った。

「どれどれ…… 白、ですね、赤子に罪はありません」

「うー!・うー!」

「あらあら、かわいいわねー」

四季様はフランドールを気に入った様で、数分は抱っこしてあやしていた。

あやし終わったところで、フランドールを返してもらい、小声でそばに控えていた、妖忌にお願いをする。

「妖忌、フランドールを少しの間、預かって貰えるかしら」

「承知しました」

妖忌はフランドールを抱っこして、別室へ消えていく。

私はお二方を客間へ案内することにした。

「それでは、客間にご案内させて頂きますね、小町は別室にてお待ちください」

白玉楼の客間はいくつかあるが、重要人物がいらつしやった場合、渡り廊下先の離れの客間を使っている。

小町には屋敷途中の客間で待つてもらい、四季様には一緒に離れの客間へいらつしやって頂いた。

離れの客間は6畳2間あり、2人で使うには十分な広さがあった。

四季様には客間の上座に座って頂き、私はその対面に座った。

お互い正視したところで、私は挨拶を切り出した。

「本日は遠いところ、ご足労頂き、誠にありがとうございます」

「堅苦しい挨拶は抜きです。時間も限られていますし、手紙の内容に對する報告をお願いします」

「はい、ご興味を持って頂いた様で何よりです。それでは、説明させて頂きますね」

いきなり切って捨てられてしまったので、私は説明を開始した。

時間が押している様なので、説明は多少巻いて質疑応答に時間を割く方法をとる。

「今は戦乱の世ですが、いずれ泰平の世が訪れます。そうすると人口が増え、幽霊の数も増えていきます。これにより、冥界を拡張する必要が出てくると考えます」

まずは今後の日ノ本の情勢報告、泰平の世が訪れたら人口増加が容易に予想される。

「現在、自分の業務は回せておりますが、冥界が拡張されるなどしたら、一気に業務内容が増え、いずれ破綻してしまうでしょう」

私は現状の業務はこなせているが、これ以上増えたら、さすがに無理がある、なんて……。

もちろん、これは嘘だ。

「私は幽霊の管理のほか、業務報告書作成などの雑務も行っております。今後幽霊の数が増えた場合、自分は幽霊の管理に注力したいと考えております」

私は主たる業務である幽霊の管理に注力したい旨を伝える。
書をしたためるのは好きだが、業務報告書の作成はまっぴらごめんである。

「雑務を行う人材を割いて欲しいのですが、是非曲直庁は現在人材不足です。そこで、今回、何者かによって冥界に送り込まれてきた、吸血鬼の登場となるわけです」

数年前、是非曲直庁設立時に地獄の民である鬼や死神を大量採用したのだが、組織に属さず、自由を愛する地獄の民も多いので、求人はあるが人が来ない状態が続いている。

私は四季様の目をじつと見ながら提案を開始する。

「吸血鬼は、ほぼ不老不死なので、冥界に適応できる事と、“鬼”である事から是非曲直庁の手駒としても適しています」

肩を引き、姿勢を正して、本題であるこちらの要求を四季様に突きつける。

「ですが、吸血鬼はまだ赤子ですので、養育及び冥界に留まる許可を得たいと、考えている次第です」

興奮していたようで体中が熱くなっている事に気が付く。

「以上で報告を終了させて頂きます。ご質問はありますでしょうか？」

四季様は少し眠そうだった。これで質問が無ければ万々歳なのが……。

「質問を何点かよろしいでしょうか」

やはり四季様からの質問が飛んできた。

「ここからが正念場である。

「お願いします」

「人口が増えると思いますが、どの程度を想定していますか？」

以前、八雲紫に聞いていた数字を並べて回答していく。

「現在、日ノ本の国では1000万人程度ですが、その3倍の3000

万人程度になるかと想定しています」

「その試算は誰が出したのですか？」

「友人の八雲紫です」

四季様の気分を害したのか、眉をひそめられた。

「八雲紫ですか……数字は信用できそうですね」

信用できる、という言葉の割に、四季様は納得がいかない様子だった。

「もう1点質問をよろしいでしょうか」

「はい」

「何者かによって送り込まれた、とありましたが、その何者かは、わかっていのでしょうか？」

「いいえ、わかっておりません」

「悪意あるものが、送り込んだ可能性がありませんか？」

これもつい先日聞いたばかりなので、そのまま回答する。

「結界や魔術的な呪いの類は発見できなかったと、友人の八雲紫から報告を受けております」

「また八雲紫ですか……。もう少し交友関係を見直す事はしないのですか？ ……失礼、話がそれました。見落としている可能性は？」

四季様は疑念があるのか硬い表情だった。

私は八雲紫を信じているので、はつきりとした口調で回答した。

「ありません」

質疑はどうやら終了した様だった。

四季様は総括に入られた。

「それでは、報告は了承しました。確かに、是非曲直の人材不足は悩みみ種です。ですが……少し感情的なお話をしてもよろしいですか？」

閻魔様の感情的なお話……。本当の正念場はここからか。

私は恐る恐る回答した。

「お願いします」

「あなたは悪魔を育てるつもりなのですか？」

「悪魔かどうかは育ててみなければわかりません」

「吸血鬼は悪魔です」

四季様はフランドールを悪魔と決めつけてきた。

確かに吸血鬼は悪魔だが、私は教育次第だと思っている。

教育に関する持論を展開した。

「私は教育次第だと考えております。教育とは恐ろしいものです。人間を聖人にも悪魔にもできません」

「それは人間の話であって悪魔は悪魔にかなりえません。妖怪の子が妖怪にしかならない様に」

「しっかりと教養を身につけさせ、秩序を重んじる様に教育すればよろしいかと」

「教養ならまだしも、吸血鬼としての秩序をあなたは教えられるのですか？」

「吸血鬼と限定せず、妖怪としての秩序なら教えられます」

私は四季様相手に一歩も引かなかった。

こんなところで、かわいいフランドールを取られてたまるか。

「あなたは少し強引すぎる」

「……」

正論すぎて、私には何も言えなかった。

四季様の目と自分の目が合った状態で数分が過ぎる。

この時間が私には数時間にも感じられた。

しばらくすると、四季様が口を開いた。

「不本意ですが、貴方の意見に賛同し、養育する許可を与えます。但し、仮の許可です」

「仮の、許可ですか」

「はい。私にはあなたが悪魔の子供を育て、教育できるとは、とても思えません。石の上にも3年という言葉があります。300年たっても養育していたら、正式な許可を与えましょう」

「300年……結構な年月ですね」

「それぐらいでないか、あなたが本気であるか測れません」
「承知しました」

「冥界の拡張に関しては、すぐに実行できるので、人口が増えてから再度考えさせて頂きます。まずは時間にかかる、人材育成を行ってください」

「どうやらフランドールの養育許可は条件付きだったが下りた様だった。」

「冥界の拡張はお預けとなってしまうたが、成果を上げる事はできなかった。」

私は素直にお礼を言った。

「はい、ありがとうございます。四季様」

——スキマより

私、八雲紫は親友に嘘を付いている。

嘘、とは語弊がある。情報の全てを公開していない、というべきか。確かに悪意のある結界や魔術的な呪いの類は発見できなかったと報告したが、悪意がないものに関しては報告をしていない。

実のところ、“魅了の魔眼”が常時発動中なのである。

亡霊に“魅了の魔眼”が通じてしまった様で、フランドールを見つけてからというもの、彼女中心の生活となってしまうた。

私としては、赤子を与える事で、親友の心のスキマを埋められれば、それだけでよかったのだ。

だが、どうやら私はフランドールに親友の幽々子を取られて嫉妬している様なのだ。

まるで母を妹に取られた姉のような気持ちを味わうとは思っても見なかった。

しかし、フランドールは無垢な赤子、罪はない。

私は今の気持ちを表に出さないよう接して、親友の為に子育てを支えていこうと思っている。

もちろん、無償のつもりはなく、あとで利子をつけて返してもらおうつもりでいる。

この幻想郷の為、強力な妖怪である吸血鬼を私の手駒として保有するの悪くはない。

そう、この幻想郷を愛する“愛郷者”は多ければ多いほどいい。子育てを手伝う名目で、そのように教育してしまえばいい。

本日は四季映姫が来ているので、姿を現すわけにはいかない。

万が一、姿を見られれば、口うるさい説教が始まってしまうだろうし、そんなもの聞く筋合いはない。

スキマに隠れて、別室の小町に出されたお団子をつまみながら、四季映姫と幽々子の対談に聞き耳を立てる。

以前から気になっていたことが1つある。

幽々子が雑務をこなしている時に聞いてきた、今後の人口推移である。

その時は白玉楼の管理者、幽々子ならではの質問だったのだろうと考えていた。

泰平の世が来たら、外の人間も増えるだろうし、冥界を拡張する必要が出てくると考えたのだろう。

だからか具体的な数字が欲しいといわれた時は冥界の拡張計画を立てる為だと思っていた。

実際そうだったのだが、その拡張計画にフランドール養育の件を絡めて四季映姫に要求した時は驚いた。

拡張計画を四季映姫に説明するにはあまりにも時期尚早だし、フランドール養育の件はごり押しに近いものがあった。

私は幽々子に焦りのようなものを感じていた。

今まで綿密に立案した計画が廃案に追い込まれようとも、フランドールの養育権をどうしても欲しいという感情が表に出ている。

確かに、彼女は場当たり的なところもある。

だが、あまりに急ぎすぎている。彼女らしくない。

やはり、フランドールの魔眼の作用なのか。

対談が終わった様だ。

どうやら、冥界拡張計画は廃案にならず、一時保留となったが、幽々子は念願のフランドール養育の許可を受けられた。

この許可は是非曲直庁の正式な許可となるので、フランドールは吸血鬼でありながら、冥界に住み、是非曲直庁配下の妖怪となった。やれやれ、と思いつつ、小町に出されていた最後のお団子に手を伸ばす。

その瞬間、腕をつかまれ、スキマから引きずり出されてしまった。

どうやら、私と小町の間『距離』を弄られてしまったようだ。

「お久しぶりです、八雲紫サマ」

「あら、どこかでお会いしたこと、ありましたっけ？」

私はすぐにスキマに潜り込むのであった。

1 | 4 | 成長と絆

成長と絆

「お母さま〜」

日傘を差したフランドールがとてとと小走りで追いかけてくる。私たちはお稽古の時間と時間の合間を縫って、追いかけてっここを歩いている。

フランドールが白玉楼に来てからというもの、あつという間に時間が過ぎていった。

あれから200年程過ぎて、妖忌が我が西行寺家の初代専属庭師になった頃である。

何もかもが順調であった。

私、西行寺幽々子はこの幸せがずっと続くものだと思っていた。

——運命とは常に残酷であった。

フランドールはとても従順だった。

今後、冥界の一般業務をやってもらう為、読み書きは特に力を入れて教えてきた。

おかげで楷書、行書はもちろん、草書も出来るようになっていた。

「できたよ、お母さま」

「どれどれ……よくできているじゃない」

フランドールは少し恥ずかしそうな仕草をした。

「お母さまのお手本が上手だからだよ」

おべっかの使い方まで取得していて、お母さんは感激だ。

「日も落ちた事だし、読み書きの時間はここまでにして、今日はフランドールの大好きな裏山に登りましょうか！」

「裏山に？ やったー!!」

「その前に硯、墨、筆を片付けるのですよ」

「はい」

フランドールは後片付けを始めた。

さて、裏山で何をするか。

それは全力のじゃれ合いである。

フランドールは一直線に膂力勝負に出てくるが、私は舞う形をとりながら、蝶の弾幕を放っていく。

「どうしたのフランドール、あなたの持ち味は膂力だけではない筈よ！」

「速度を上げようにもこの蝶の数じゃあ無理だよ！」

「相手の弾幕に規則性があるはずよ。それぞれ」

要領を得たのか、一気に間合いを詰めてくるフランドール。

両掌を掴んでの膂力勝負！日増しに強くなっている気がする。

「フンツ!!」

まだ体格差の優位性があるので一気にフランドールを投げ飛ばす。

フランドールは制御が効かず、地面に叩きつけられてしまった。

「うわあっ！ 参りました」

「お疲れ様、フランドール。いつもながら凄い膂力ね」

「お母さま程じゃないよ」

「フランドールも能力が発現したら強くなるんじゃないかしら」

「能力はまだよくわからない……」

「それは残念ね、早く発現すると良いのだけど」

戦った後はお風呂に入って汗を流し、遅めの夕食を摂って睡眠。

私はこんな毎日が続くのだと思っていた。

異変は少し前から始まった。

突然、墨や硯が割れ始めたのである。

墨が割れるのはわかるが、硯が割れるのは初めて見た。

あれは何だろうかと思っていると、屋敷が大きく揺れたのである。

「幽々子様！ 失礼します！」

妖忌が慌てた様子で私に報告してきた。

「妖忌、何事なの？」

「先ほどフランドール様のお部屋が崩壊しました！」

私は妖忌からの報告に肩を震わせた。

「何ですって？」

私はすぐさまフランドールの部屋へ向かった。

部屋に到着すると、障子戸から先の部屋の中へ、屋根が落ちていた。
「フランドール！」

私が障子戸に手をかけるとフランドールがそれを制止した。

「お母さま！ 入っちゃ駄目!!」

「フランドール、何があったの？」

「能力が……能力が暴走しちやってる！」

「あなた、能力なんてわからないって言っていたじゃない」

「それが……『目』が見えるんだ」

「目？」

「そうなの。手のひらに『目』が寄ってきて、それを握ると物が壊れるの……」

なんと強力な能力！

私は目を見開いた。

フランドールを拾ったとき、姓付だったので、血筋は良いだろうと思っていたが、まさかこれほどの能力を発現させるとは思わなかった。

「このままじゃ、お母さまも壊してしまう……だから来ないで！」

このやり取りに既視感があった。

私も能力が扱えきれず、暴走させた事がある。

その時、誰が何と言ってくれたのか？

思い出せ！ 今すぐ！

……紫だ。

あの頃の記憶が鮮明に蘇る。

ちやうど亡霊として目覚めたばかりで、自身の能力、『死を操る程度の能力』が暴走した時であった。

「紫！ 来ないで……。 貴方まで殺したくない！」

私は西行妖の下でうづくまる。

もうこれ以上、『死を操る程度の能力』で殺したくない。

「私は大丈夫よ」

紫は両手を広げて近寄ってきた。

「いや……来ないでえ……来ては駄目!」

「大丈夫よ、幽々子。大丈夫、私たち『親友』でしょ?」

紫はやさしく抱きしめてくれた。

どんな仕掛けをしたのか、わからなかったけど、彼女は私の能力では死なず、抱きしめてくれた。

「さあ、泣き虫の『親友』、存分に泣きなさい」

「ああああ!! うわーうわー!!」

私はうずくまりながら、紫の腹の上で泣いた。

あの時と同じだ。

あの時、紫は勇気を出して私を温かく包み込んでくれた。

今はフランドールが能力を暴走させて泣いている。

私は誰だ? フランドールの母親、西行寺幽々子!

勇気を出して部屋の障子戸を開けた。

12畳の部屋は半分近くが瓦礫で埋まっていた。

私は急いでフランドールを探した。

「やだあ……来ないでえ」

か細い声が瓦礫の横に引いてあった布団の上から聞こえた。

背をこちらに向け、フランドールが丸まっていた。

私はゆっくりとフランドールに近づいた。

「大丈夫よ、フランドール。大丈夫、私たち『親子』でしょ?」

私はある賭けをしていた。

フランドールの能力範囲は全視界で、今のところ壊れているものを見る限り、対象は物理法則が効く相手と直接本体がある幽霊だけの様だ。

では、本体が別にある亡霊の私はフランドールの能力範囲外に行けるのではないか?

とても分の悪い賭けだったが、フランドールが待っている。

こんなところで立ち止まっているつもりはない。

私は『運命』に対して、自分の命を掛け金に乗せした。

「来ないでー！」

より一層強くフランドールは拒絶した。

その瞬間、破裂音が頭の上で聞こえてきた。

お気に入りの帽子が吹き飛んでしまった様だった。

それでも私は立ち止まらない。

私は泣いているフランドールを優しく抱きしめてあげた。

「さあ、泣き虫の『我が娘』、存分に泣きなさい」

「ううう、うわーうーん!!」

「よしよし」

賭けは私の勝利だった。

私はフランドールを優しく撫でてあげた。

「私の可愛いフランドール」

私はフランドールが泣き止むまで離さなかった。

フランドールが泣き疲れて、そのまま布団で寝てしまった。

私は髪を撫でながら、フランドールの手を見つめた。

こんなに可愛い小さい手で、世界を破壊できるものなのか。

この子はその重圧に耐えられるだろうか。

それが心配でたまらない。

「お母さま」

「なーに？ フランドール」

フランドールが起きてしまった様だ。

「私たちって親子、だよな？」

「そうよ、フランドールは私の大事な大事な娘よ」

そう、大事な娘。私の娘。

でもフランドールは不安そうだ。

「でも種族が違うよ？ 私は吸血鬼でお母さまは亡霊。それに西行寺の姓も貰ってない」

いつかは聞かれるだろうとは思っていたが、このタイミングとは。私は一つ一つ回答した。

「まず種族が違う事から答えるわ」
「うん」

「フランドールは約200歳だが、真実をしつかり受け止められるかわからない。」

「だが言わねばならない。」

「フランドール、よく聞きなさい。確かにあなたは私が産んだわけではありません。それでも私は今まであなたを育ててきて、本当の親子だと私は思っています」

「うんっ」

「あなたはどこからともなく、西行妖の根本に転送されてきました。転送した人物はわかりませんし、どんな意図があつてあなたを転送する事になったのかもわかりません」

「うん……」

「それでも本当の家族がこの世界のどこかにいるのなら、会えるかもしれない。私はそう考えました」

「うん」

「西行寺の姓を与えないのは、いつか大きくなって自分の判断がしつかりできるようになった時に、選んで欲しいからよ。西行寺家を選ぶか、元の家族に戻るかを」

「うんっ」

「私としては、西行寺家を選んで欲しいんだけどね……」

急にフランドールが凄まじい膂力で押し倒してきた。

「お母さまく、大好きく」

「私も大好きよ、フランドール」

「私達は抱き合つて眠りに就いた。」

「眠りながら考える。」

「賭けにあつた『運命』からの払い戻し金は『親子の絆』というパズルのピースなのだろうと思う。」

「探し求めていたパズルのピース。長い道のりだったが、ようやく見つける事が出来た。」

「パズルの裏面にはきつと、笑顔のフランドールの絵が描かれている」

と思う。

私はそんな気がした。

あくる日、私は崩壊したフランドールの部屋で起床した。

日光が入ってきていたが、フランドールは布団を被っていたので、焦げずに済んだ様だ。

私に抱き着いて布団の中にいる、フランドールの寝顔が愛おしく感じる。

『運命』には打ち勝ったが、問題が山積みだ。

山積みだが、一つ一つ対処すれば、全て解決する筈である。

まず私はぼっかりと空いてしまった部屋の状況を見て、一言つぶやいた。

「今日は大工を呼ぶことにしましょう」

「ん……」

フランドールも起床した様だ。

「フランドール、おはようございます」

「お母さま、おはようございます」

「まずは部屋の移動をしましょうか、いつまでも崩壊している部屋では危険です。私の書斎でもいいかしら？」

「はい、お母さま」

私達はくつつきながら部屋を移動し、私の書斎へ到着した。

私の書斎は6畳1間で、お世辞にも広い部屋ではなかった。

しかし、ここは密室にもなるので、重要な話題の場合はここを使っている。

置いてあるものは、机と硯などの書道用具一式が揃っている。

私が上座に座り、フランドールが下座に着席した。

「フランドール、あなたの能力、仮に『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』だったとしましょう。今は安定しているのよね」

「うん、今は大丈夫だと思う」

「それでどうですか？ 亡霊の私に破壊の『目』は見えるかしら」

「いいえ、見えない」

「だったら、出来るだけくつついていきましょうね」
「はいっ」

フランドールはとてもいい笑顔になった。

「ですが、私には私の仕事があり、少しの間だけ、一緒に居られない可能性があります」

「はい……」

「そんなに心配しないの、常時とまではいかないけれど、出来る限り一緒にいてあげるから」

「うん」

フランドールはいまいち吹っ切れない顔をしていた。

「フランドール、一緒に行動できない時は、剣術をやりなさい」

「なんで？ 剣術なんて脆弱な人間が考えだしたものなんて」

「あなたの能力で物体を破壊する過程としては、その物体の一番弱い部分を手のひらに持ってきて破壊するのよね？」

「うん、そうだよ」

「だったら、最初から木刀なり両手のひらが塞がるものを持っていけば、むやみやたらに壊さなくて済むんじゃないかしら？」

「そうかもしれない」

「ねえ、良い考えでしょ」

「うん、だったら剣術、やってみる」

フランドールは羽を揺らして決意に満ちていた。

私はさらに言葉を続けた。

「能力の件で一つ言っておく事があります」

「うん」

「良いですかフランドール、今日の出来事や自分の能力を、他人に知られてはいけません。屋敷で働く幽霊たちにも箝口令を敷くことにします」

「どうして？」

フランドールは不思議そうな顔をした。

私は真剣な顔つきで答えた。

「もしもこの情報が洩れたら、生きている限り、フランドールの能力を

利用したい輩や、倒して武勲を上げたい輩などが、羽虫の様に群がってくるのよ」

「そんなのは、いや」

フランドールの顔が曇ってしまったが、これだけは釘を刺しておかねばならない。

「だから決して口外してはいけません」

「わかりました」

「私はフランドールには不幸になって欲しくないと常々思っているのよ。私の時と違って」

「お母さまの時はどうしたの？」

「群がってくる奴らは、全員現世とおさらばしたわ」

私は不敵な笑みを浮かべた。

「怖いよ、お母さま」

「ごめんなさい、ちよつと色々思い出しちゃってね」

私は話題を変える事にした。

「フランドール、私もそうだったのだけれど、衝動的に何か破壊したって気分にならないかしら」

「今はないけど、能力が暴走した時に少しあったかな」

「やっぱり、破壊衝動はあるみたいね」

「何か解決策でもあるの？」

「ちよつと思いついた事があってね。それに能力も使わないと、暴走して振り回せばかりになるから。だから練習をしましょう練習！」

「はいっ！」

翌日、屋敷を直す大工の幽霊に混じって、私も大工の真似事をしていた。

フランドールも日傘をもって、何ができるか楽しみに待っていた。作っていたものは、射的の的である。

台の上を工夫して、お皿が台から直立になる様にしたものを5枚置いてみた。

早速裏庭に設置してフランドールに説明を開始した。

「破壊衝動が起きそうになったら、これ！」

私はフランドールに胸を張った。

「さあフランドール、お皿を1枚1枚正確に狙うのよ」
「うん、やってみる！」

大きな破砕音とともに、私の作った射的台が木っ端みじんになった。

私の力作があゝ。

こんな事で挫けては、いられない。

「ごめんなさい」

フランドールはしよんぼりしてしまった。

「フランドール、次回は成功させましょうね」

「うん！」

「これは週1の鍛錬にしましょう」

「はいっ！」

フランドールは元気よく返事をしてきた。

1 | 5 | 管理者

管理者

「フランドール、座り心地はどうかしら？」

「うん、最高！」

幽々子はフランドールを膝の上に乗せて、娘の反応を楽しんでいる。

今日は親友の幽々子に会いに来たのに、疎外感を感じる。

なんだこれは。

確かに幽々子とフランドールの親子関係は良好だったとは言え、ここまでべったりという事はなかった。

私、八雲紫は困惑している。

——スキマより

私とフランドールの関係としては、一か月に一度、簡単な算術の四則演算などを教えている師弟関係だ。

冥界の管理を任せられる様にと、幽々子が頼んでの事だった。

算術の他に、妖怪としての在り方や幻想郷の勢力図などを教え込んだ。

フランドールはどちらかというと、私を怖がっている節があり、私が見れると対応は母親の幽々子に任せて、自分は自室に引きこもる事が多かった。

それが今では私が居るのに、母親の膝の上に乗って楽しんでいる。

これは何かあったに違いない。

不可思議な事はまだある。

いつもは居ない、大工の幽霊たちが大勢いる事だ。

現に金槌の叩く音や、鉦をかける音などが聞こえてくるし、新築木造建築特有の木の香りがしている。

雨降って地固まるではないが、二人は大喧嘩をして屋敷に被害を出したのだろうか？

色々考えてみても満足のいく答えが見つからないので、私は幽々子

に話しかける事にした。

「ねえ幽々子、今までこんなにフレンドールとべったりだったかしら」

「あら、何をいうのかしら紫。私達は昔からこうよ」

とぼけられてしまった。

「それでも幻想郷の為に、紫には報告しておくべきかもね」

たかが喧嘩だったのなら、ここまで話が大きくはなるまい。

幽々子とはつうかあの仲だと思っていたが、最近どうにも会話が噛み合わない。

「紫、ちよつと私の書齋まで来てくれるかしら。さ、フレンドール、降りて頂戴」

「はい」

フレンドールは返事をする、膝の上から降りて、とととと幽々子の後を追った。

書齋に呼ぶという事は、何か重要な話でもあるのだろうか。

私も二人の後を追った。

幽々子の書齋では幽々子とフレンドールが上座に座り、私は下座に座った。

何だろうと首をかしげていると、幽々子が話し始めた。

「紫、フレンドールの能力が発現したのよ」

「へえ。どんな能力かしら」

私は素直に驚いた。

きつと私を自分の書齋に呼ぶほどの能力なのだろう。

「それについては、フレンドールから話します」

「話しちゃっていいの?」

「良いんです」

「でもお……」

「フレンドール、紫は幻想郷の管理者なのです。総合的に考えて動いてくれる筈です。もしもの時は私が守るから、安心して頂戴」

「……紫さま、私の能力は『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』です」

私は表情を悟られない様に、扇を広げて口元を隠した。

今何と言った？ 『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』？
これまた強力で難儀な能力である。

「扱いきれているのかしら？」

「まだ練習中ってところかしらね」

「練習？」

「そう、裏庭に射的台を置いたの。それで能力の練習をしているのよ」
「是非、練習風景を見学したいのだけど」

「今の時間帯は目立つからあまりやりたくないんだけどね。でもいいわ。紫の頼み事って珍しいし」

幽々子の書斎から、私、幽々子、フランドールの順で裏庭まで3人そろって移動した。

確かに裏庭には目測で約50間（約90m）の位置に射的台が置いてある。

いかにも余った木材で素人が作りました、と言わんばかりの出来である。

「あの射的台、もうちよつとなんとならなかつたの？」

「あら、私の力作よ。でもすぐわかると思うわ」

幽々子は幽霊を操って、射的台の上に皿を5枚並べさせた。

準備が整ったところで、幽々子がフランドールに話しかけた。

「フランドール、破壊に至る過程を説明してあげてね」

「わかりましたお母さま。それでは紫さま、右の端から壊していきませぬ」

「ええ」

私は頷いた。

「右端のお皿の壊れやすい部分、私は『目』と呼んでいます、この『目』を手のひらに移動させます」

んん？

「移動させたら、この『目』を握ります」

フランドールが右手で何かを握る仕草を見ると、皿が碎ける音が聞こえた。

つまり、フランドールの破壊の能力は全視認範囲で、壊れるもので

あれば、壊れると。

なんという、強力な能力なのだ。

私はさらに踏み込んだお願いをした。

「今度は順番に残りの4つ、全て壊してくれないかしら」

「最善を尽くします」

フランドールがいつになく気合が入っている。

結果は順調に2皿割れたが、3枚目が壊れる前に射的台が大きな破砕音と共に壊れてしまった。

どうやら、まだ細かな制御ができないのかもしれない。

幽々子の力作が壊されてしまった。

「ごめんなさい、お母さま。やっぱりうまくいかないよ」

「とにかく練習あるのみよ、フランドール。私も普段できない日曜大工ができて嬉しいわ」

二人は固く抱き合っていた。

仲睦まじくしている2人に対して、私は『嫉妬』の感情が沸き起こってきた。

私はここで爆弾を投下してみる事にした。

「是非曲直庁にフランドールの能力の件は報告済みなのかしら？」

「ここは幽々子が回答した。」

「報告していないわ。報告したら大変な事になるでしょうね」

幽々子は一旦話を区切って、フランドールを撫でながら、私を見つめた。

「特に鬼神長たちが黙っていないなさそうですが、その前に手を打ちます」

「わかったわ、適当な能力で誤魔化すつもりでしょ」

「正解。申告する能力を、『剣術を扱う程度の能力』とするのよ」

私は難色を示した。

「なぜ『剣術を扱う程度の能力』なの？ フランドールは脆弱な人間が考え出した、云々言っただけだったかしら？」

「言っていたわね、あなたの教育のおかげかしらね」

皮肉を言われてしまった。

「なぜ剣術なのかを話す前に、あなたからの最初の質問。私とフラン

ドールがなぜべつたりなのかを、話さないといけないわね」

幽々子は私から顔を背けると、遠い目をした。

「フランドールは能力が発現した時に、能力を暴走させちゃってね。屋敷をあちこち壊したのだけど、亡霊の私は本体が別にあつたから、フランドールの能力から外れる事ができたのよ」

「性質もまだよくわからない能力なのに、よく命を投げ捨てる様な真似ができたわね」

「子供の親というものは、強いものなのよ」

幽々子は強いと思う。

私だったら、確実にフランドールを結界の中に縛り付けてしまおうと思う。

伊達に200年もフランドールを育てているわけではなかったのだ。

「能力から外れる事がわかって、いつ能力が暴走しても大丈夫な様に見えるだけ一緒に居ましようって事になったのよ」

これでいつもべつたりな理由が理解できた。

私はなぜ剣術なのかも、なんとなく理解してきた。

ヒントは先ほどのフランドールからの能力説明。

「フランドールの破壊する能力の過程としては、その物体の一番弱い部分を手のひらに持ってきて破壊する事なの。だから両手のひらが塞がるものを持っていけば、能力も発動しないと考えたの」

幽々子は私の目をじっと見つめてきた。

「だから剣術なのよ。妖忌もいる事だし、条件がぴつたりなのよね」

この冥界では好条件がそろっている。

「それに能力を使うには両手が必要だし、守る必要があつたから、近接戦闘の技術は遅かれ早かれ教える必要があつたのよ」

私は幽々子がそこまで考えていたとは、思いもしなかった。

フランドールの能力の場合、弱点が手のひらに集中してしまっている。

剣術は弱点を守りながら、能力の暴走を止めるという二つの意味があつたのか。

「納得のいく説明をありがとう、幽々子」

私は素直にお礼を言った。

「わかっているとは思うけど、フランドールの能力については他言無用よ。部下の藍には教えてもいいけど、他は駄目よ」

「わかっているわ、幽々子」

そう、わかっている事だ。釘を刺さなくても、こんな事は誰にも言えない。

幽々子は隠し通せるだろうか？

いや、大丈夫か。閻魔の前でも平気で嘘をつく女だ。問題はないだろう。

私は話題を変える事にした。

「それにしても、能力の暴走があつたなんてとんだ災難だったわね」

「最初は暴走しちやつて、もうどうしようもなかったんだから」

「それじゃ、今屋敷を修理しているのも」

「能力が暴走した時に、屋根が落ちちやつてね。修理するついでに改装しようかと思つて」

「改装を？」

「ええ。フランドールの部屋を改装して、12畳のうち6畳は寝室、残りの6畳は書齋にしようと考えています」

それはついにフランドールが、白玉楼の仕事に従事するという事を意味している。

「書齋が出来上がり次第、フランドールには私の仕事を手伝ってもらう事になります」

「ええ!? じゃあー!」

フランドールは歓喜の声を上げた。

「そうです、フランドール。私達は『親子』という関係の他に、『上司と部下』という関係にもなるのです」

「嬉しいー! お母さまー!」

「よしよし」

幽々子はフランドールを愛おしそうに髪の毛を撫でてあげた。

やはりなんだか疎外感を感じる。

私は幽々子のところで夕食を摂り、自分の屋敷に帰宅した。

「お帰りなさいませ、紫様」

「ただいま、藍」

「随分とお疲れの様子で。何かお飲みになられますか？」

「ウヰスキーを」

「かしこまりました」

私は自室に戻ると、どこか別の宇宙にスキマを開いた。

知らない星々が輝き、とても美しい。

ぼーっと眺めていると、藍の声が響いた。

「紫様、ウヰスキーをお持ちしました」

「どうぞ入って頂戴」

「失礼します」

藍が入室すると、私はウヰスキーを受け取りながら、世間話をする
ことにした。

「フランドールの能力が発現したの」

「それはめでたいですね、どんな能力なのですか？」

「『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』」

「はい？」

藍は言われた事を処理できない、という顔をしていた。

私はウヰスキーを一口つけると話を続けた。

「だから、『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』なのよ」

「……恐ろしいですね。紫様はどうされるおつもりですか？」

「別にどうもしないわ、今は強力な手札が手に入ったと考えるだけよ」

「それだけ強力な能力ですと、幽々子様は何か策を講じられているの
ではないですか？」

藍が聡明な従者で私は嬉しい。

「ええ、なんでも剣術を教えて、『剣術を扱う程度の能力』という事に
するそうよ」

「無難な判断だと思いますね」

「そうかしら？」

「それに、鬼の膂力と天狗並みの速度を持った、吸血鬼が剣術を修める。これほど楽しそうな事はないでしょうね」

そういえば、藍って結構、戦闘狂だった気がした。

藍は少し考える仕草をして、ある提案を私にしてきた。

「鬼の膂力に耐えられる程の武器を与えてみてはいかがでしょうか？」

「そんなものが作れるものかしら」

「少しお時間を頂くかと思えます。今の紫様からの仕事量から換算すると、100年程欲しいですかね」

「それぐらいだったら、別に良いわよ」

「運用試験が楽しみです」

藍は不敵に笑った。

それから100年が経過し、幻想郷担当閻魔の四季映姫との約束であった、300年の月日が流れた。

幽々子はフランドールを立派に育て上げていた。

白玉楼の玄関に四季映姫と小野塚小町が現れた。

私は見つからない様に、スキマに隠れて様子をうかがっていた。

「お久しぶりです、幽々子。300年ぶりですか」

「お久しぶりです、四季様。私にとってはあつという間でしたわ。さ、フランドール、挨拶なさい」

幽々子がフランドールに挨拶するよう促す。

「初めまして、四季様。フランドールと申します」

「初めまして、フランドール。あなたの事は、一度抱っこしたことがあるのですよ」

「ごめんなさい、覚えておりません」

「確かに当時、0歳でしたからね」

挨拶もそこそこに、四季映姫はフランドールに用件を伝えた。

「それではフランドール、業務報告書の提出をお願いします」

「宜しく願います」

フランドールは緊張しているせいか、少しぎこちない手つきで、業

務報告書を四季映姫に渡した。

四季映姫は巻物を広げ、内容を確認し始めた。

「問題ありませんね。幽々子、よくここまで育て上げました」

幽々子とフランドールはほっと一息ついた。

「あの時、私は悪魔の子供を育て、教育できないと断言していましたね。これは間違いでした。心よりお詫び致します」

「そんなお詫びだなんて……私は宣言通り、教育しただけです」

幽々子はわざとらしく謙遜した。

「それでは小町、書類をここへ」

「はい」

四季映姫はフランドールに一枚の書類を渡した。

「入庁承諾書です。フランドール、今ならまだ後戻りできます。これを書いてしまうと、あなたは是非曲直庁の管理下に置かれることになります。どうしますか？ 普通の妖怪として、自由に生きたいと思いませんか？」

「書きます！ 私はこの日この時のために母から教育を受けました！」

フランドールははっきりと四季映姫に自分の意向を伝えた。

「わかりました。それでは能力と名前を記入して下さい」

フランドールは少し考える仕草をしてから、入庁承諾書に記入を始めた。

記入が終わると、四季映姫に書類を渡した。

「どれどれ……能力は『剣術を扱う程度の能力』ですか。相違ないですね？」

「ありません」

「名前は……『Fr andre. S』？」

幽々子のはつとした顔をした。

私も覚えている、フランドールを拾った時の籠に入っていた、紙切れの綴りと同じだったのだ。

「このSとは一体なんなのですか？」

四季映姫はフランドールに問いただした。

「唯一、自分が『母』と呼んだ女の姓の頭文字です」

幽々子は四季映姫や小野塚小町がいるのにも関わらず、感極まって嗚咽を漏らした。

「お母さま……」

一言漏らすと、フレンドールは母親に抱きついた。

その絵があまりにも美しすぎて、私は涙を流していた。

1 | 6 | 妹

妹

拝啓お母さま。

私、フランドールは疲労困憊ですが、妖夢という妹分を手に入れました。

——1980年代 白玉楼

私は自分の書齋で、是非曲直庁へ提出する業務報告書の作成に追われていた。

何度確認してみても出ていく幽霊の数よりも、入ってくる幽霊の数の方が多いのだ。

計算してみると、あと半年で冥界は面積が足りず、幽霊で一杯になるだろう。

是非曲直庁の幻想郷担当閻魔、四季映姫様に冥界の拡張を頼んでいるのだが、いまだに良い返事が返ってこない。

この間、大量の返信が書面で返ってきたので、ついに冥界拡張計画を実行するのかもしれないや、文章を斜め読みしてわかったのだが……。

「一杯になったら考えます」

私の中で四季映姫様へのヘイト値が溜まっていく。

返信の文章は1項目につき3行以内でって、お願いしてたのに。

四季映姫様の面倒な事を先送りにする性格にも困ったものだ。

こんな時こそ、ご自身の『白黒はつきりつける程度の能力』で、ズバツと決めてもらいたいものだ。

ご自分では『迷わない』と仰っているのに、この先送りはなんだろうか？

ありえない事なのだが、閻魔様を惑わせるほど、冥界を拡張する事に問題があるのだろうか？

確かにお母さまの領地が広がり、権力が強化されるのは確かなのだが、それが不都合なのだろうか？

まったく進展が見られないこの状況を、お母さまの書齋で相談したところ、奇妙な回答が返ってきた。

「四季様が冥界拡張計画を、実行に移さざる負えない状況に仕組むのよ」

「でもどうやって」

正直、今のごり押しを続けるのは、手間がかかるし、精神衛生上よろしくない。

お母さまには、何か方策がおありの様だ。

「題して、幽霊移民計画」

「移民計画？」

「顕界の廃校や、廃病院、廃ビルといった、誰も寄り付けなさそうな場所に、転生待ちの幽霊をいったん移民させるのよ」

なるほど、器が無いのなら、別の器を用意すればいい事か。

場当たりの対応であるが、冥界が一杯になるのは避けられそう
だ。

だが、本題の冥界拡張計画がどの様に幽霊移民計画につながるのだろうか。

いまいちピンとこない。

「確かに冥界が転生待ちの幽霊で一杯になるのは避けられそうですね。ですが、それが冥界拡張計画とどの様なつながりがあるのですか？」

私はお母さまに質問をしてみた。

「そうねえ、いくらフランドールの質問でも、これだけは答えられないわ」

「なぜですか？」

私は歯ぎしりをして、拳を握った。

「フランドール、あなたは私の後継者になるのです。今後、冥界には数限りなく問題が持ち込まれるでしょう。それらを一人で問題解決をする必要があります。今は私が居ますが、いずれ別の冥界に置かれた時、一人で解決せねばなりません」

現に問題解決のため、是非曲直へごり押しをしているのだが、そ

れでは不十分なのだろうか。

「あなたは『報告』『連絡』『相談』が出来るようになってきました。だから次の段階に移りましょう」

「はい」

元気よく答えたものの、全くもって、見当もつかなかった。

当面の仕事は是非曲直庁への警告文と、幽霊移民計画の計画書作成だ。

私は自分の書齋へ戻る事にした。

「それではお母さま、仕事に戻らせて頂きますね」

「フランドール、ちよつといいかしら」

「何でしょうか？」

「私への敬語はお仕事の時だけで良いですからね」

「わかっておりますが、敬語で話すとカリスマっぽく聞こえるじゃないですか」

そういう年頃なのかしら、というお母さまの独り言が聞こえたような気がしたが、私はお母さまの書齋を後にした。

自分の書齋に戻ると、白髪のおかっぱ頭の小さな子が、書齋を荒らしていた。

有ろう事か、大事に隠しておいた、紫さまから頂いた『外』のお菓子を食べ散らかしていた。

「何をしているのっ!!」

私の声に驚いたのか、その子は奥の方に隠れてしまった。

楽しみにしていた『外』のお菓子を食べられたのは悔しいが、相手は幼子である。

これ以上、怒っても怖がらせるだけだろう。

私は深呼吸をした。

是非曲直庁への対応や、お母さまの対応で少しカリカリしていた様だ。

私は女の子に話しかけた。

「私の書齋に勝手に入り込んだ事と、お菓子を食べた事は不問にしま

す。まずは出てきて、挨拶をしなさい」

「……いじめない？」

か細い声で返事が返ってきた。

「いじめないよ」

女の子は安心したのか、私の前まで出てきてくれた。

「わたしは、ようむ」

まだ日本語が片言だ。とても若いのだろう。

一見すると彼女の近くに白玉の様な霊があるので、半人半霊の冥界の住人らしき人物ではある。

よく見かける人物に、似ている気がするのだが、まずは自分の自己紹介が先だ。

「私はここ白玉楼の主、西行寺幽々子様の娘で、幼名はフランドール」

「ふらんろーるおねえたん」

「最初は難しいか」

「フランおねえたん！」

「もう、それで良いよ」

何故か頬がゆるむ。

凄く可愛い。

「フランおねえたんの翼、きれい」

『ようむ』と名乗る幼子はそういうと、私の翼を引っ張り始めた。

「こらこら、痛い痛い」

「ほしー」

「あげられないよ」

私は翼を羽ばたかせた。

シャランシャランという軽快な音が聞こえてくる。

「フランおねえたんの翼、なないろ！ にじみたい」

虹か。雨では動けない私にとって、とんと縁がない。

「虹を見た事があるの？」

「うん！ すごく大きいわっかが、いっぱいあるの」

「機会があれば、見てみたいものね」

「フランおねえたん、また翼ふって」

私はもう一度、翼を羽ばたかせた。

「すごい、すごいー！」

喜んでくれている様である。

私の前でも出した笑顔がとてもあどけなくて、庇護欲を掻き立てられる。

もしも、妹がいたのなら、こんな感じなのかもしれない。

私は『ようむ』にある提案をした。

「かくれんぼでもやろうか」

「かくれんぼ？　するするー！」

私達は書斎の後片付けそっちのけで、かくれんぼを楽しみ始めた。

時間があつという間に数刻過ぎた。

私はすぐに見つかってしまう。

やはり虹色の翼が目立つ様だ。

こんどデコイでも作るか。

そう考えていると、お師匠様の魂魄妖忌が通りかかった。

「これ、妖夢！」

「おじいさま……」

「こんなに散らかして……お前はフランドール様の部屋で何をしている」

妖忌は少しムツとした表情をし、『ようむ』は私の後ろに隠れてしまった。

「お師匠様、横から口を挟んで申し訳ないのですが、この子は私とかくれんぼをしていて、こんなに散らかしたのです。ですから、この部屋の惨状には責任の一端が私にもあります」

「そうでしたか。それは失礼しました。てっきり妖夢が汚したのかと思いました」

だいたいあってはいるが、ここは可愛い妹分をかばってやろう。

話題を変えて矛先をずらす方法をとる。

「この子はお孫さんなのですか？」

「はい、孫でございます。本日はどうしても、ついて来たいと申しまし

て」

「それはしょうがないですね」

お師匠様の妖忌は厳格な祖父の様に思えたのだが、甘い所もある様だ。

確かにちよつと甘いな、という場面はいくつかあった。

技は見て盗め、が基本の妖忌のだが、私が見切れる速度まで落とすしてくれていたりする。

最速の妖忌？ 試合は放棄するね。早速『死合』になってしまう。

妖忌が甘くなつたのは、私に対するお母さまの教育方針が影響したのだろうか？

いや、そうに違いない。今までの厳格な妖忌だったのなら、孫をつれてはこないだろう。

そういえば、私は孫の名、『ようむ』の漢字を知らない。

妖忌がいるうちに聞いておこう。

「ねえ、お師匠様。この子の『ようむ』とは、漢字ではどのように書くのですか？」

「妖怪の『妖』に、『夢』で妖夢と書きます」

「『妖夢』、いい名ね」

妖怪の夢、私達の夢、私の夢。

私の夢って何だろうか。

お母さまから領地を分けて頂いて、新たな冥王となる事だろうか？
それはお母さまの夢であって、私の夢でない気がする。

私はなんとなく妖夢に聞いてみた。

「ねえ、妖夢。私の夢ってなんだろうか？」

「えー、わかんない」

「そうよね、自分でもわかってないんだから」

「じゃあフランおねえたん、わたしがさがしてあげる！」

「あなたが？」

「うん！」

妖夢は元気よく答えてくれた。

嬉しい事を言ってくれる。

こんな妹分に何かをしてあげたくなつた。

私は後ろに隠れていた妖夢を抱き上げた。

妖夢は少し驚いたのか、落ち着かない様子だった。

「妖夢、私の夢、一人前になるまで守ってあげるからね」

「まもるのは、わたしのおやくめ……」

「いいのよ、そういうのは一人前になってから言つてちょうだい」

そう言いながら、私は妖夢を下ろした。

ここで、妖夢にやり残していた仕事の提案をした。

「さあ、後片付け！ 後片付け！ 掃除用具は隣の部屋よ！」

「フランおねえたん、まってえ！」

私の後をちよこちよこことついてくる。

妹分というものは、結構いいものなのかもしれない。

後片付けが済んだ時点で、仕事をするには時間が大幅に押ししていたので、そのまま夕食となつた。

その席で妖夢は、私の寝室で一緒に寝ると言い出したのだ。

結果は家主である、お母さまの一声で決まってしまった。

「別にいいじゃない。従者と親睦を深めるのも重要よ」

妖忌の苦悩もわかる気がする。

本当は一人前になつた妖夢を、皆の前でお披露目をするつもりだったのだろう。

しかし、実際はまだこんな幼子の状態で、一緒に来たいとせがまれて連れてきてしまった。

そんな子が、あろう事か、ご主人様の娘である私と、一緒に寝たいと申しいるのだ。

私は妖忌の胃の心配をしていた。

「お師匠様、私は大丈夫です。私も心得ておりますので。」

「妖夢は幼いゆえ、ご迷惑をおかけする可能性が……」

「大丈夫です、何もない筈ですから」

「それならば良いのですが」

妖忌の心配をよそに、私達はそそくさと私の寝室へ向かった。

最初は枕投げをして遊んでいたのだが、夜も更けてきたので、私達は布団に入る事にした。

「フランおねえたん、何かお話して！」

「ねんねん　ころりよ　おころりよ」

「もう！　こもりうたじゃなくて！」

私は疲れているので、さっさと寝たいのだが、妖夢はまだまだ元気一杯だ。

何をすれば満足するのか、聞いてみる事にした。

「要望とかある？」

「何かあつくなるお話がいい！」

「熱くなるのは良いけど、眠れなくなるよ？」

「いいの！」

何が良いだろうか。

とりあえず、紫さまから聞いた『英雄』の話でもするか。

「それじゃあ、紫さまから聞いた、『竜の血族』の物語を語りましょう」

「りゅうのけつぞく？」

「竜神に祝福された者？　人間に竜の血が混じっている？　そうね、

妖夢みたいな感じの者の事だよ。全然違うけど」

私は自分のおとぎ話に興味を持たせるため、少し嘘をついた。

「わたしみたいなの？　きかせて！　きかせて！」

『『竜の血族』の者よ、『竜の血族』の者よ。永遠に邪悪を封じ、栄誉を賜いし者よ！　凶悪な敵を打ち負かし、勝利の雄叫びをあげる時、『竜の血族』の者よ、汝の祝福を祈ろう！』

「よくわからないけど、あつくなれた！」

「熱くなれたのなら、話して良かったよ。元々は古代竜語なんだけけどね。色々な訳があるみたいなのよ」

「りゅうご？　えーどんなのー、きかせて！　きかせて！」

「あなたが寝たら、教えてあげる」

「わかったー。それじゃ、おやすみなさいー」

「おやすみなさい、妖夢」
子供は素直でよろしい。
私も寝よう……。

でもその前にやる事をやっちゃおう。

この時間でしかできない事。

それは能力の練習である。

私はお皿を5枚持って、お母さま手作りの射的台のある裏庭までやってきました。

あれから180年程練習したおかげか、能力が暴走する事なく安定した状態になった。

昔は感情の起伏なんかで暴走したりと、能力に振り回されていたが、今では落ち着いて制御できる様になっていた。

これもお母さまのいう、「練習」のおかげだろう。

私は射的台の前まで来た。

それを私の膂力でぐいぐいと押していく。

傷んできた射的台を見て思う。

最後にお母さまが日曜大工をしたのはいつだっただろうか？ も

う覚えていない。

そんなことを思いながら押していったら、裏庭の端まで来てしまった。

距離にして約300m。問題はないだろう。

射的台に1枚1枚お皿を置くと、翼を羽ばたかせ、飛んで屋敷まで戻った。

私は目を見開き、点にも見えない射的台のお皿に集中する。

あたかも近くにお皿がある様に見えてきたら、お皿の『目』を手のひらに移動させる。

それを握るとお皿が割れる音が遠くから聞こえてくる。成功だ。

次は連射の練習だ。

残り4枚のお皿の『目』を一気に手のひらに移動させる。

順番に握っていくと、4枚のお皿は右から順番に割れていった。

「ん。絶好調」

独り言をいうと、真横から声が聞こえた。

「フランおねえたん、今のはなに？」

お皿に集中しすぎて、周りに気を配るのを怠っていた！ 不覚！

「妖夢？ どこから見てたの？」

「すごかった！ ねーねー今のはなに？」

会話が成立しない。

しかし、見られたからには釘を刺しておかなければ。

「誰にも言わないって約束できるなら、教えてあげる」

「いわないよー」

「本当かしら？」

「ほんとほんと」

怪しい所だが、教えてしまおう。

人という種族は、真実が隠されていると、口がすべって根も葉もな
い事を喋ってしまうのだ。

それが噂になってしまう。

だがある程度、真実を伝えておくことで、それが抑止力となり、喋ら
なくなる。

でも妖夢はそれが理解できるほどの年齢に達していない気がする。

「今のは、私の隠された能力なの」

「かくされた!? どんなの？ どんなの？」

『『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』』

「なんでもこわせるんだ！ すごい！ すごい！」

妖夢は『秘密兵器』程度だと思っているに違いない。

この問題には『火消』が必要かもしれない。

「さ、こんなところに居ても仕方がないから、私の寝室に向かいましょ
う」

「うん！」

翌日、妖夢は妖忌に連れられ、家に帰っていった。

妖忌と同じく、住み込みで働く様になるには、もう少し年月がかか

るだろう。

週一で遊びに来てくれる約束を取り付けたのは、良い判断だったと思う。

このままガス抜きをしないと、ストレスでどうにかなりそうだった。

だが、妖夢という妹分は、私の秘密を喋ってしまうのではないかと、一抹の不安を覚えた。

事後報告になってしまったが、その事でお母さまに相談をした。

「どうせお子様なんだから、大丈夫よ。言っている事なんて、でたらめばっかりという感じで、大人は信じないわよ」

「では、妖夢の周辺での火消作業はやらなくて大丈夫だよ」

「ええ、そうよ」

「わかりました」

よし、懸念事項もなくなった事だし、幽霊移民計画でも立て始めますか。

1 | 7 | 幽霊移民計画

幽霊移民計画

「なんですつて?」

私、四季映姫は思わず声を荒げてしまった。

——1980年代 地獄

閻魔という職業は交代制である。

本日も自分の勤務時間を終え、帰り支度をしている所に、同じ勤務時間だった部下の小野塚小町が世間話をしてきた。

小町は私の持っている部下の中で、分け隔てなく接してくれる数少ない部類の死神だ。

そのせいか、冥界の業務報告書受領業務などの雑務を頼んでしまうのだが、特に文句を言わずこなしてくれる、私にとってはありがたい部下だ。

それでも旧地獄を知っている、古参の死神で年齢も私より上だったりする。

最初は取り留めの無い地獄の噂話だったのだが、最近冥界に現れた庭師の孫の話になったとたん、私は耳を疑った。

庭師の孫の話によると、冥界に住んでいる吸血鬼、フランドールに隠された能力があるという事なのだ。

その能力とは『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』という、聞いたことも無いような強力な能力だったのだ。

「いやあ、何分子供が言っている事なんで、嘘・大げさ・紛らわしいを多分に含んでいると思いますよ」

小町は顔をポリポリとかきながら回答した。

子供の言っていることだが、もしも、それが本当なら冥界の戦力が凄まじい事になる。

私としては、是非曲直庁の置かれる地獄と白玉楼のある冥界との力のバランスは均衡がとれている状態になるのが望ましいと考えてい

る。

幽々子一人でも、神をも超えてしまうのではないかという能力、『死を操る程度の能力』を有している。

以前、上司の十王様たちに問い合わせた事がある。

幽々子の力は、いち冥界の管理者にしては強すぎるのではないかと。

返ってきた回答は、現状円滑に幽霊を扱えるものがおらず、是非曲直庁からの命令にも従順で、叛意などの兆候も無いので問題はない、というものだった。

回答は正論で、人手不足という問題の前では、私に反論の余地などなかった。

どうする？ このタイミングで冥界へ赴くか？

いや、子供の噂話の真実を確かめに行く程度の理由で、休暇が取れるはずがない。

それならば、フランドールに召喚状を送るか？

これも駄目だろう。幽々子が一枚噛んでいるとなると、理由をつけて断るはずだ。

フランドールが入庁承諾書にサインする際に浄玻璃じょうはりの鏡を使って確かめるべきだった。

感情があるのかわからないのか、わからない幽々子が泣いていたので、そちらに気を取られて確認を怠っていた。

まさか、あれは演技の涙だったのか。

私としたことが、些細な不注意で真実を隠されてしまうとは。

これは作戦を立てて、真実を白日の下にさらさねばなるまい。

私は小町に話しかけた。

「小町、あなたから見て、幽々子はどう映りますか？」

「西行寺様ですか？ 冥界でのほほんと暮らす亡霊にしか見えませんが」

「私には……。西行寺幽々子は毒蛇に見えます」

「毒蛇ですか？」

「ええ、虎視眈々とこちらに噛みつこうとしている毒蛇です。私は彼

女の野心を確認し、必要であれば潰さないといけません」

「またまた。決めつけるのは四季様の悪い癖ですよ」

部下に私の癖を指摘されてしまった。

確かに以前、フランドールを悪魔と決めつけて、教育できるはずがないと断言していたが、結局幽々子は立派に育て上げていた。

悪い癖、か。それでも今回ばかりは、白黒はつきりつけなければいけない気がする。

「小町、これから話す事は命令ではなくお願いです」

「お願いですか？ あたいで出来る範囲でなら」

「顔の広いあなたにしかできない事です」

「はあ」

小町は少し表情を曇らせた。

「良いですか。少しずつで結構です。冥界に住んでいる吸血鬼、フランドールの能力が『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』であるという情報を地獄中に流していつて欲しいのです」

「はあ、ですが噂も75日といえます。すぐに消えてしまいますよ？」

「それは私がさせません。冥界の業務報告書受領業務を別の閻魔の死神にやってもらおうのです」

「あたいではなく、別の死神にやらせるのですか？」

「そうです、仰々しく是非曲直庁の会議室に呼び出し、フランドールの能力をそれとなく探ってこいというのです」

「なるほど、それを毎月やれば噂も消える事なくどんどん広まると。それでも噂止まりだと思えますよ？」

「そこは大丈夫です」

私は目を細め、小町を見た。

「あと半年で冥界は面積が足りず、幽霊で満杯になります。満杯になる前に、幽々子が動くはずですよ。どう動くかはわかりませんが、私は手を振って冥界に乗り込む事が出来るでしょう」

「それなら、噂を流す必要がないのでは？」

「万が一、浄玻璃の鏡が使えなかった場合の為に有効です。私の能力、『白黒はつきりつける程度の能力』で噂に白黒はつきりつけます」

但し、その場合はフランドールが同席していないとダメだ。

『フランドール』の能力が『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』であるという『噂』に白黒はつきりつけるのだ。

パズルに例えるなら、『フランドール』というピースと『噂』というピース、2つのピースが必要になる。

同席する様、幽々子に指示を飛ばす必要がある。

今回の件で小町には、色々お手助けしてもらわなければならない。

「わかりました。あたいの出来る範囲内で噂を流してきます」

小町は観念したのか、肩を落とした。

そんなに落ち込まなくてもいいのに。

私は小町の賞与査定を上方修正する事にした。

「ありがとうございます、小町。賞与査定は期待していて下さい」

「賞与ですか？ やった！ 俄然やる気が出てきましたよ！」

「是非曲直庁は常に公明正大であるべきです。あなたの貢献は賞与という対価で払われます」

そう、是非曲直庁は常に公明正大であるべきだ。

待っていなさい、幽々子。あなたの野心を、私が確かめてやる！

拝啓お母さま。

私に何か隠し事をしていませんか？

白玉楼の地下に建設中の施設は何なのでしょう？

もう一度言います。

私、フランドールに隠している事とは、一体何なのでしょう？

——1980年代 白玉楼

「フランおねえたん？」

「うんしょ、うんしょ」

「いるのー？」

妖夢の声が聞こえる……。

最近、自分が白玉楼に来てから今に至るまでの歴史に興味が湧いた

ので、是非曲直庁へ提出している業務報告書を不健康にも読み漁っていた。

それもこれも、私の『運動場』だった裏庭が工事中なのがいけないのだ。

せっかくだから、探検して遊ぼうと思ったのだが、お母さまからきつく立ち入り禁止を言いつけられていて、近づくことさえできない。仕方なく内向きの趣味に走った。

私は今、蔵の中をあさっている真つ最中だった。

「ここにいるよー」

「なにをしているの?」

「探し物」

「なにをさがしているの?」

「写本」

そう、今探しているものは写本である。

実のところ、業務報告書は2通存在する。

是非曲直庁へ提出する『原本』の1通と、白玉楼の蔵の中へ納める『写本』の1通だ。

お母さまは意外と筆まめで、仕事はきっちりしている人だ。

写本の管理もしっかりしていて、通し番号が振られている。

お母さまがこの冥界、白玉楼に着任したのは1000年も前の事だ。

その頃から今に至るまで延々と写本が蔵の中に納められ続けている事はすごい事だと思う。

だが、ごくまれに通し番号が歯抜けになる事がある。

それならば、そんな時もあるのだろうと思えるのだが、今回発見した『抜け』はごっそり1年分程度であった。

今から約500年前。予想するに、是非曲直庁を立ち上げる前後の記録だと思うのだが、まるで事実を隠蔽したかの如く消失していたのである。

お母さまに問い合わせたところ、少し困った顔をして、そんな昔の事は忘れたと仰られていた。

私は写本を納めている蔵とは違う蔵にあるのではないかと思い、現在別の蔵を探している。

「みつかった？」

「見つからない」

「どうやらこの蔵も違う様だ。」

「一体どこに隠してあるのだろうか？」

お母さまはどこかに隠して、置いた場所を忘れてしまったのだろうか？

考えても仕方がなく、せつかく妹分の妖夢が来てくれたので、二人で遊ぶことにした。

「探しても見つからないし、ここで宝物探しでもしようか」

「たからもの？　するする！」

「どっちが綺麗なものを探し出せるか競争だ！」

「わーい！」

妖夢と宝物さがしをしてから3日後、私はある書類を書き上げていた。た。

「できた」

私は3週間をかけ、幽霊移民計画の草稿を書きあげていたのである。

床面積などはまだ概算だが、何とか形にする事が出来た。

これだけあれば、移民計画実行後、多分10年は冥界に空きが出るだろう。

しかし肝心の実行者がお母さまと紫さまなのだ。

紫さまには顕界と冥界をスキマでつなげて頂き、お母さまには幽霊を操ってもらい、円滑な移動をお願いする。

お二方の理解を得られなければ計画は頓挫してしまう。

お母さまの方はきつと大丈夫だろう。

だが、紫さまが首を縦に振るかどうかが問題になる。

「紫さま、何て仰るだろう」

「私がどうかしたのかしら?」

「うひゃあー!」

びっくりして、変な声が出てしまった。

私は自分の独り言に対して、返ってきた声の方向を見た。

するとニコニコ顔の紫さまが、スキマから覗いていた。

「紫さま、冥界に入る際は玄関からお入りください」

「あら、あんまり驚いてくれないのね」

「十分驚きましたよ、妖怪を驚かせても、しょうがないでしょう?」

「フランドールのびっくりした顔、とても可愛かったわよ」

この通り、話を有耶無耶にしてしまう、紫さまはいまだに苦手だ。

「紫さま、何か御用ですか?」

「あら、用がなければ来ちやいけないのかしら?」

「そういうわけではないのですが。お母さまなら、顕界に用事があるとの事で、出かけております」

そう、本日はお母さまが留守なのだ。

用事といっても、どうせ顕界にある茶菓子屋の特売日だから自ら出向いたのだろう。

留守じゃなかったら、紫さまをお母さまに引きついで終わりだったのだが、そうもいかない。

「そうなの、幽々子は居ないのね。さつき私に関係ありそうな事を、独り言でいっていたけど、あれは何だったのかしら?」

紫さまはそう言いながら、スキマから出てきて、私の対面に座った。

私は紫さまに幽霊移民計画の相談をする事にした。

「そろそろ冥界の面積が足りなくて、転生待ちの幽霊で一杯になりそうなのです」

「確かに入ってくる幽霊の数が、出ていく幽霊の数よりも多ければ、いざれパンクしてしまいますわ」

「四季映姫様に冥界の拡張をお願いしているのですが、なかなか実行して貰えなくて」

私は肩をすくめ、実情を紫さまに報告した。

「その事でお母さまに相談したのですが、冥界拡張の話ではなく、幽霊

移民計画を立てると仰りまして」

「幽霊移民計画？」

「ええ、なんでも四季映姫様が冥界を拡張しなければならぬ状況に仕向けるとか。顕界の廃校や、廃病院、廃ビルといった、誰も寄り付けないような場所に、一旦幽霊を送る事になりました」

「ああ、なるほど。幽々子がやりたい事がわかりましたわ」

お母さまと紫さまが、つうかあの仲というのは本当らしい。

私は羨ましく思う。

「紫さまはもうお母さまのやりたい事が理解できたのですか？」

「ええ、理解しましたわ」

それならば、この計画の草稿も読んでもらおう。

私は書き上げた草稿の巻物を紫さまに手渡した。

「紫さま、これが幽霊移民計画の草稿なのですが。読んでみてどう思われますか？」

「そんなもの……、私が読んでも大丈夫なのでしょうね？」

紫さまは計画の草稿を読み始めてから数分もたたないうちに、懐から扇子を取り出した。

扇子を振り上げると、そのまま私の頭を叩いた。

「あいたー！」

「後で幽々子からも怒ってもらおう事にして。フランドール、あなたに警告があります」

頭の痛みで涙目になりながら、尋常でない雰囲気紫さまを見つけた。

何故、叩かれたのだろうか？

「あなたは私に根回しするつもりで、この草稿を見せたのでしようが、見せる順序が違います」

「順序？」

「そうです、これは先にあなたの上司であり、母親である幽々子に見せるべきです。根回しするにも、まずは幽々子が判断するべきです」

それでも、紫さまはお母さまのお友達だから、大丈夫なのでは？

「これがもし、白玉楼をどうにかしてやろうと考えている者、仮に敵と

仮定するとして、そんな者が見てしまったら、計画を潰されるどころか、計画を利用されかねません」

「でも紫さまは私達にとって、敵ではないですよね？」

「いいえ、違います」

紫さまはズイツと顔を私に近づけてきた。

息遣いも聞こえそうな距離だ。

「確かに私と幽々子の間には友情というものがあります。ですが、白玉楼と幻想郷の間で利害が常に一致するとは限りません」

紫さまは姿勢を戻すと、持っていた扇子を広げ、口元を隠す。

表情が読み取れない。

「その計画の草稿に幻想郷にとって、害となるような『情報』が書かれていたら、私は全力で妨害に出るでしょう。それこそ、あなた達の敵になるのです」

紫さまが、敵？

私はハツと息をのんだ。

そんなことは一度も思わなかった。

「今回の様に幽霊移民計画の『情報』を、例え幽々子の友達である私に漏らした事で、白玉楼全体が不利な状況になるのです」

私は今回の幽霊移民計画の草稿作成を、お母さまからの『お使い』程度にしか考えていなかった。

不用意に情報を漏らした事で、こんな大事になるとは思ってもみなかった。

「職務上、知った『情報』の秘密を守る事を、守秘義務と言います。幽々子は教えてなかったのかしら？」

「ええ、知りませんでした。今回の私の場合、どのように挽回すれば宜しいのでしょうか？」

紫さまは口元で開いていた扇子を閉じて、少し考える仕草をした。

「そうね……。時間をさかのぼって、秘密保持契約^Aを結ぶという手が使えますが、妖怪同士の契約の場合、力で上に立つ者が優先されるので、今回は打つ手なしです。幽々子に怒られてきなさい」

「そうします」

紫さまでも打つ手なしという事で、私は観念した。

「……私って頼りないのかな」

「なぜ、そう思うの？」

「お母さまは、私に色々と隠し事をしているみたいなんです。裏庭でやっている工事もその一つです。音から推測するに、地下で何かの施設を作っているみたいなんです」

「あなたは どう思うの？」

私は左右を確認してから、紫さまにそつと耳打ちをする姿勢をとった。

紫さまは身を乗り出して、耳を私の口に近づけた。

「核兵器^{ヌーク}の貯蔵施設とか」

「幽々子が？ 核兵器？ あははは！」

紫さまは元の姿勢に戻り、びつくりしたのか目を丸くした後、笑い始めた。

何もそこまで笑わなくてもいいのに……。

「フランドール、あなたって結構ロマンチストなのね。あー、可笑しい」

核分裂連鎖反応の前にはロマンも何も無いと思うのだが。

確かに核兵器はロマン兵器ともいうが、何か違う気がする。

「実のところ、私もあの建設には関わっていますが、そんな危ない物ではありません」

「紫さまは何を建設しているのか、知っていらっしやるのですか？」

「知っているけれど、教えられないわ。幽々子本人から聞きなさい」

むう、結局隠している本人のお母さまにたどり着いてしまう。

「知られたくないものには蓋をする。床下だけじゃ、きつと足りなくなつたのよ」

「知られたくないもの？」

「知ってしまったら、それこそいろんな輩から命を狙われる様な、危険な情報よ」

「そんな危ない物、白玉楼にあるのでしょうか？」

「すごく身近にあるじゃない。あなた自身の秘密よ」

「あつ」

最近すつかり頭から抜け落ちていたが、私の真の能力は他言無用だった。

「忘れていたわね、フランドール。さつき守秘義務を教えたばかりじゃない」

「ごめんなさい」

「本当に危なっかしいのだから。多分なのだけどね、幽々子の隠している事は、あなたを守る為に隠している事だと思うの」

紫さまは私に微笑みかけた。

私を守る為、というのはなんとなくわかる。

先ほど紫さまが言っていた、私が危なっかしいからである。

お母さまが隠し事をするのは仕方がないのかもしれない。

もしかすると、もう一つの確認されている隠し事である、業務報告書の写本が欠けているというのも危ない情報なのかもしれない。

「私を守る為、というのは理解できました」

「そう」

「という事は、もう一つ確認されている、隠し事も危ない情報なのでしょうか」

「どんな隠し事なのかしら？」

「業務報告書の写本があつて、通し番号で管理しているのですが、いくつか抜けているのがあつて」

「へえ、欠番があるのね。いつ頃の業務報告書かしら？」

「確認されたもので、約500年前ぐらいですね。私が白玉楼に来る数年前ぐらいの業務報告書の写本がごっそり無いのです」

「500年前ねえ。ちょうど幻想郷に結界を張った頃かしら……」

紫さまは手に持っていた扇子をパチパチと鳴らして思考のリズムを取り始めた。

しばらくして思い当たったのか、ハツとした顔になり、真剣な眼差しで私を見た。

「その話、幽々子にはしたの？」

「ええ、しましたよ。ちよつと困った顔をした後に、もう忘れたと仰つ

ていました」

「私も同じ反応になってしまいわね」

「思い当たる節があるのですか？」

「ええ、『500年前の真実』よ。これ以上は言えないし、あまり幽々子を困らせないでちょうだい」

この秘密は、飲み込んでおくべき秘密という事か。

私は紫さまに対して、相槌を打った。

「真実を明らかにする事は、すべての人が幸福になる訳ではないの」

紫さまは私に物語を言い聞かせるかの如く、語り始めた。

「真実とは常に残酷よ」

「なんだか、辛気臭くなってしまったわね。そうだ、フランドール。少し難題に挑戦してみないかしら？」

「難題ですか？」

「ええ、先ほど秘密保持契約^Aを結ぶという手が使えるといいましたが、確かに力の強い妖怪が相手だと契約は結べません。ですが、私の心を動かすような、話術で私に語り掛けたらどうかしら？」

「話術ですか……」

「あなたも吸血鬼の端くれ。カリスマは持っている筈よ」

話術といっても何だろうか。スピーチでもすればいいのだろうか？

スピーチは苦手なんだよな。

とりあえず、外に出る必要があるので、紫様に促した。

「スピーチをするので、表に出て下さい」

「あら、表に出るなら、体術で勝負をしてもいいのよ？」

「勘弁して下さい」

体術でも紫さまを退ける事は不可能だろう。

妖怪の優劣の決定なんて、半殺しにして言う事を聞かせる事なので、どだい無理な話なのである。

挑んだところで私が半殺しにされるだけなので、まだスピーチの方

がハードルは低いだろう。

私は障子戸を開け、紫様と一緒に庭に出ると、大きな声でスピーチを開始した。

「この冥界、白玉楼は密閉型とオープン型をつなぎ合わせて建造された、極めて不安定なものである」

「しかも是非曲直庁が転生待ちの幽霊に対して行った施策はここままで、入れ物さえ造ればよしとして彼らは地獄に引きこもり、さらなる冥界の拡張はしなかったのである!!」

「ここに至って私は冥界が今後、絶対に転生待ちの幽霊で一杯になる事を繰り返さないようにすべきだと確信したのである!!」

「それが、幽霊移民計画の真の目的である!!」

「これによつて是非曲直庁の石頭共に現実を突きつける!!」

最初はまばらであった幽霊が、スピーチが終わりに近づいた頃には庭一杯に幽霊が集まっていた。

全員歓喜の声を上げていたのだが、私は幽霊の聴衆が静かになるのを待って、切り札を使う事にした。

「諸君！ 自らの道を拓くため、転生待ちの幽霊のための政治を手に入れるために！」

「あと一息！」

「諸君らの力を私に貸していただきたい!!」

「そして私は……母、幽々子の元に召されるであろう!!」

幽霊の聴衆のテンションは最高潮に達していた。

万雷の拍手と、私の愛称である「フラン」という声が地響きの様な音になっていた。

マントを着けていたのなら様になっただろうが、無い袖は振れないので、サイドテールを翻して紫さまと一緒に書斎へ戻った。

紫さまは始終無言であったのだが、何か不都合でもあったのだろうか？

私は恐る恐る紫さまに尋ねてみた。

「紫さま、いかがでした？」

「すごかったわね。吸血鬼という存在はカリスマが備わっていると聞いてはいたけれど、実感してみるとやっぱり違うわ」

紫さまは少し興奮気味で話された。

「あなたのスピーチに心を動かされたので、根回しの意味で見せてもらった幽霊移民計画ですが、それを手伝ってあげます。本当は幽々子経由の頼みじゃないと聞かない予定だったのだけどね」

「ええ!? それじゃあ!」

「それでも、あなたと秘密保持契約^Aを結ぶ事はしません。今のところ私になんのメリットも無いので」

「むう」

「そんなに落ち込まないの。いずれあなたが別の冥界の主になったら、結んであげるから。それまでおあずけね」

「ありがとうございます。その時は宜しくお願いします」

「その時はちゃんと書面を用意してあげるから、楽しみに待っていてね」

少し紫さまと談笑した後、お母さまが顕界より帰ってきた。

案の定、茶菓子屋の袋を何個も持っていた。

「お帰りなさいませ、お母さま。またすごい荷物ですね」

「ただいま、フランドール。美味しそうなお茶菓子がいっぱいあったのよ〜」

「お邪魔しているわ、幽々子」

「あら、紫。あなたが先に来ているなんて珍しい」

「フランドールが私の噂をしていたのよ。それがちよつと気になってね」

お母さまは茶菓子の箱を一旦近くに置くと、私の隣に座った。

「へえ、フランドールが紫の噂を?」

「ええ、なんでも幽霊移民計画で私に手伝って欲しかったらしくてね」

「まだ計画書もできてないでしょ」

「草稿はできたみたいよ」

「お母さま、こちらが草稿になります」

私はお母さまに草稿が書かれた巻物を手渡した。

読み始めたお母さまは、いつになく真剣な表情になった。

「これを読んだのは紫だけよね？」

「はい、紫さまだけです」

「見せた相手が紫だけでよかったわ。紫、この草稿の内容は他言無用でお願いするわ」

「わかっているわ」

やはり、お母さまと紫さまはつうかあの仲だった。

紫さまは既にこうなる事を予想していたのだろう。

「フランドール、これを紫に見せた時、紫が怒らなかつたかしら？」

「怒られました。本日、守秘義務という言葉を覚えまして」

「流石は紫。すっかり教育してくれてありがとうございます」

「礼には及ばないわ。でも守秘義務の考え方は難しいから、何度か痛い目に遭わないと覚えられないわよ」

「それは仕方ないわ。尻拭いをするのも年長者の務めです」

お母さまは草稿を読み終えると、私の頭に手を伸ばして、なで始めた。

「それにしてもよくできているわ、この草稿。よくやってくれたわね、フランドール」

「ありがとうございます」

「添削すべき場所もありますが、初版としては十分だと思えます。このまま計画書とし、計画書通し番号を与えて下さい」

「承知しました」

私はお母さまから草稿の巻物を受け取り、計画書通し番号を付ける作業に移った。

「それじゃあ紫、手伝って欲しいのだけど」

「それはもう承知しているわ」

「あら、フランドールがあなたをどうにかして下したのかしら？」

お母さまは少しびびくりしたのか、目を丸くしていた。

「それに近いかしらね。話術で私の心を動かしたら秘密保持契約^Nを結^D束^Aしたかしらね。話術で私の心を動かしたら秘密保持契約^Nを結^D束^Aしたかしらね。

んであげるって、ほとんど戯れで言ったのよ」

紫さまは肩をすくめて事の顛末を語り始めた。

「そうしたら、庭にでてスピーチというか演説を始めてね。最初はこの冥界の作りから説明して、冥界を転生待ちの幽霊で一杯にしないという決意表明が中間にあつて、最終的には『是非曲直庁の石頭共に現実を突きつける』ですもの」

「あら、的確な表現。てつきりフランドールは幽霊移民計画の本質はわかってないのかと思っていたわ」

何やら私への評価が過大だったので、慌てて筆を置いて釈明した。「実のところ、まだ良くわかっていないのですよね。スピーチに関しては是非曲直庁へのヘイト半分、口から出まかせ半分ってところでした」

「それでもよくそこまで考えていたわね。模範解答は計画実行後に出てくると思うから、もう少し考えてみたら?」

「そうします」

私は再び筆をとつて、計画書通し番号を付ける作業に戻った。

「演説の最後には『諸君らの力を私に貸していただきたい』ですもの。もう心を動かされちゃって」

「庭で演説をしたのよね? どおりで幽霊たちが騒がしいわけね。心を動かされたって事は秘密保持契約^Aをフランドールと結んだの?」

「いえ、結ばなかったわ。将来結ぶという約束はしましたけれど。契約を結ぶ時間まで指定してなかったし、抜け道を使わせて頂きましたわ」

オホオホと、とぼけた様子で話す紫さま。やはり苦手だ。

「それでも力を貸していただきたくって部分に共感が持てましたので、草稿にあった私の力が必要な部分に関しては手伝う事を了承しましたの」

「手間が省けて良かったわ。今回の幽霊移民計画は紫が嫌いな手間がかかる仕事だったから、紫を脅す以外に手が無いかと思っていた所だったの」

「脅すなんて怖い怖い」

紫さまは『怖い』と仰っている割にはニコニコ顔だ。

お二方は扇子を広げて口元にあて、表情が読み取れない様にした。「転生待ちの幽霊が冥界からあふれて、幽明結界すら破られ、幻想郷に流れ出して大異変になるのは目に見えていましたから」

紫さまは目を細めてお母さまを見た。

対するお母さまは無言で無表情だ。

「是非曲直の尻拭いを協力させられるという後ろ向きな理由ではなく、フランドールに説得されて協力したという前向きな理由になりましたわ」

「それは何より」

その後、数分間二人は無言が続ぎ、私は生きた心地がしなかった。紫さまが言っていた、利害が常に一致するとは限らない、とはこのことを言っていたのかもしれない。

私は一旦作業を中断し、強引に話題を変える事にした。

「そうだ、お母さま。顕界で買ってきたお茶菓子をを見せて欲しいのですが」

「そうそう、試食で美味しかった大福があったのよ。紫もいかがかしら？」

「頂こうかしら」

私達はお母さまが買ってきた大福を頬張った。

何とか膠着状態は脱し、和やかな雰囲気になった。

「それで紫さま、草案に書かれていた役割ですが……」

「わかっているわ。記載された床面積だけの廃校・廃病院・廃ビルを適当に見つけてくれば良いのよね？ 大丈夫よ。約束したからにはしっかりとやるわ」

「宜しくお願います。いつ頃までにできそうですか？」

「そうね、2週間は欲しいかしら」

「承知しました」

紫さまが見つけてきた物件の検証作業を……3週間ぐらい見ておくか。

「お母さま、紫さまが見つけてきた物件に、幽霊の移動作業はどの程度かかるでしょうか？」

「そんなの、やってみないとわからないわ」

「そうですか。一応、5週間後には移動作業に入れるはずなので、その際は宜しく願います」

「そんなに慌てなくても良いんじゃないかしら？」

「いえ、ダメです。もたもたしていたら、紫さまの冬眠期間に食い込む可能性があります。紫さまが冬眠してしまったら、それこそ冥界がパニックします」

お母さまと紫さまは顔を見合わせた。

なんだろう？

「ねえ、幽々子。フランドールの教育の仕方、間違えたんじゃないかしら」

「私は是非曲直の妖怪として恥ずかしくない様にと教えてきたつもりなんだけど……」

「もつと、こう、なんというのかしら。もつと自己中心でないといけないと思うのよ。妖怪として。それが私の冬眠期間の心配をしているのどうかと思うのよ」

「私が元人間だったのが災いしたのかしら」

お母さまはうーんと唸っている。

失礼な話だ。私は幻想郷の妖怪として、その要たる紫さまの体調を気にしているのだ。

冬眠不足で幻想郷が崩壊しました、なんて洒落にならない。

「それじゃあ、自己中心的に考えさせて頂きますよ。さあ、概算日程は引けたので、あとはお母さまが頑張るだけです」

「わかりました……」

お母さまはがつくり来ているが、もたもたしていられない。

「さあお母さま、幽霊移民計画の開始キックオフの宣言を」

お母さまは真顔に戻り、姿勢を整え、私と紫さまを正視した。

「各自日程キープが最優先事項です。紫の冬眠期間にぶつからない様、日程守り切りが幻想郷の未来を左右します」

「それでは幽霊移民計画の開始キックオフを宣言します」

これで幽霊移民計画は始動した。

もう誰にも止められない。

そう、例え閻魔様かみであつても。

1 | 8 | 誕生日

誕生日

「あたいは反対です」

「なんですって?」

私、四季映姫はまた声を荒げてしまった。

——1980年代 地獄

本日も自分の勤務時間を終え、帰り支度をしている所に、同じ勤務時間だった部下の小野塚小町が質問をしてきた。

「フレンドールの件はどうなっていますか、と。」

あれから8ヶ月過ぎ、業務報告書受領業務を別の閻魔の死神にやらせている関係で、小町は白玉楼の状況を把握できなくなっていた。

今まで1ヶ月に一度のペースで業務報告書を取りに行っていたので、西行寺親子とも親密になつていたはずだ。

白玉楼のある冥界が転生待ちの幽霊で一杯になる期限である6ヶ月を過ぎ、小町は心配になったのだろう。

業務報告書を読む限り、顕界の人が寄り付かなそうな場所を選んで幽霊を送り、空きスペースを作っている様だった。

顕界で特に目立つような様子もなく、幽々子はよくやっていると思っていた。

今のところ進展がない旨を回答すると、小町はほっとした表情をしていた。

だが小町には悪いと思つたが、幽々子がフレンドールの能力を隠していた場合の処遇も話した。

親子の関係を引き裂き、フレンドールを鬼神長たちに引き渡すと。

その話を聞いた途端に愕然とし、その後、歯を食いしばって私を睨みつけてきた。

私と小町の関係は500年程度だが、初めて私に歯向かう言葉を使ってきた。

反対です、と。

今まで少々砕けた口調で話す事や自由を求め^ほる性格以外、特に問題がなかった小町ではあるが、齒向かわれたのは初めてだったので、私は少なからずショックを受けていた。

「わかつて下さい、小町。我々は秩序を保つ必要があるのです」

「それでも、です」

「一時の情に流されてはいけません」

「わかつています」

小町は後ろに向くと肩を震わせていた。

「小町、泣いているのですか?」

涙を流しているのか、足元に水滴が垂れていた。

小町はぼつりぼつりとフランドールとの思い出を語り始めた。

「母親の後ろに隠れて、こちらを覗き込んでいた時代のフランドールちゃん。そしていつの間にか成長して業務報告書を自分で提出する様になった時代のフランドールちゃん。この約500年の歳月の間に色んな事がありました。あたいにとって、フランドールちゃんは妹みたいなものでした」
「そんな今生の別れではありません。地獄にいる鬼神長たちに引き渡すだけなので、今よりも会える機会は多くなると思います」

「そんなわけないじゃないですか!」

小町は大声で叫んでいた。

「フランドールちゃんが噂通りの『性能』だったら、あまりに危険な為、封印されてしまうでしょう」

確かに封印される可能性も高いだろう。

だがこのまま幽々子達を野放しにしておく訳にはいかない。

小町はその後何も言わず、出口へ向かった。

「小町、出て行くのは構いませんが、私に浄玻璃の鏡を使わせる様な真似だけはしないで下さいね」

「大丈夫です。あたいの武器はガッツと信用! それを汚す事はしません」

「それならば問題ありません」

小町は出ていったが、考えてみると確かにフランドールの罪と言え

ば、能力の虚偽報告だけである。

それだけで封印処分とは処遇があまりにも苛烈すぎる気がします。可愛い部下の為に、鬼神長宛ての嘆願書でも書きますかね。

拝啓お母さま。

計画は九分通りうまくいきましたが、肝心の計画の本質をまだ理解できていません。

私、フランドールにはまだまだ足りないことばかりです。

——1980年代 白玉楼

幽霊移民計画の開始から予定の1週間遅れの6週間後、ついに移民作業が始まった。

紫さまと事前打ち合わせを綿密に行ったので、移民作業はスムーズに行えた。

普段自由に動き回っている幽霊たちが、素直に動いてくれたのも要因の一つといえる。

私の演説が効いたのだろうか？

いや、お母さまの幽霊を操る能力のおかげだろう。

まさか、たった数時間で終わってしまうとは思いませんでした。

私としては数ヶ月単位で時間がかかると思っていたのだが、そうでもなかった。

紫さまのスキマに凄まじい勢いで幽霊が吸われていく様は私を圧倒させた。

お母さまはあまり急いでなかったのも、こうなる結果が見えていたからかもしれない。

早く終わった事は喜ぶべき事だ。

あまり紫さまに負担をかけては幻想郷の危機を招きかねない。

とりあえず、これで冥界に10年分の空きスペースはできた。

この後、何が起こるかは私には予想もつかないが、何とかなるだろうと思っていた。

幽霊移民計画を行ったのが4月・5月で、今は私の誕生日である12月になろうとしていた。

それまでは特に問題なく過ごしていた。

変わった事といえば、業務報告書を取りに来る死神が、いつもの小町さんではなく、別の閻魔様の死神になった事だろう。

しかも毎月違う死神が来ているので、私は少し不審に思っていたが、特に何もしないでいた。

あの死神の青年が来るまでは。

「ごめんください」

「はい」

私は12畳ある居間でお母さまから頂いたクリスマスツリーに飾り付けをしていた。

今日開かれるクリスマスパーティーと私の誕生日パーティーの為だ。

なぜかお母さまは私の誕生日を12月25日と定められていた。

私を拾った時期が春で、生後4・5ヶ月ぐらいだったから、適当に聖人の誕生日と合わせたとか。

意趣返しがどののと言っていた気もするけど忘れた。

7色の羽根から私の事を万年クリスマスツリーというのはやめい。

……話がそれた。

そろそろ豪華で楽しみな夕食なのだが、こんな時間に誰だろうか。最初に思いついたのは小町さんだった。

去年まで12月25日になると決まって現れ、ただ飯・ただ酒を呑んで帰るのが例年の彼女だった。

でもさっきの声は男性の声だった。

お師匠様の妖忌が居ないので、外に出て客人の素性確認と武装解除をしてきていると思うので、安全だとは思うのだが。

私は玄関に出る事にした。

「どうも、こんばんは。金髪に虹色の羽根、あなたがフランドール様ですか?」

「そうですが、どのようなご用件で?」

「12月分の業務報告書受領の為、是非曲直庁から来ました死神です。

小野塚さんの代理で来ました」

死神は若い男性であった。

歳は人間の見た目で18・19歳程度だろう。

身長は高く180cmはあるだろうか。

短めの金髪で夜なのにサングラスをかけていて、ズボンはジーンズ、革のジャケットを着ていた。

革のジャケットには鳥か竜を模ったと思われるワッペンと、『ARMY』と書かれたワッペンを付けていた。

12月の寒い時期なのにちよつとそこまでという感じの服装に、この人も距離を扱う能力を持っているのかと思った。

「わかりました。少々お待ちください」

「あら、フランドール。どちら様？」

ちようどお母さまが通りがかり、死神の青年を凝視した。

死神の青年はお母さまを見ると、すかさず会釈をした。

「小町さんの代理だそうです」

「あらそうなの。せっかくだし、一緒に夕食でもどうかしら？」

「いえ、俺は……失礼、自分は任務中なので」

「お酒を飲まなければいいでしょ、1時間だけよ1時間。どうかしら？」

「しかし……」

「今日はパーティなの。一人でも多い方が良いのよ」

「わかりました。それでは1時間だけ失礼させて頂きます」

お母さまは半ば強引に死神の青年を招き入れた。

招き入れるのには、私は反対だった。

初対面の、しかも是非曲直の使いである死神を家の中に入れる事は危険な事かもしれない。

私はそう考えていた。

パーティはお母さま、私、妖夢、お師匠様の妖忌、さきほどの死神の青年を含めた5名で開始した。

2つのテーブルには豪華な食事が並んだ。

マグロなどの刺身に伊勢海老、ローストチキンなど和洋折衷の料理だった。

海産物は冷凍で、冬眠前に紫さまから頂いたものだ。

私は早速ローストチキンを切り分け、まずは妖夢に食べさせた。

「妖夢、美味しい?」

「おいしいですー」

「死神の方もどうですか?」

「頂きます」

私は本日のお客様である死神の青年に、一番大きい骨付きのもも肉の部分を切り分けてあげた。

彼は手で骨の部分を持つと、もも肉にかぶりついた。

豪快だが、一番美味しい食べ方だ。

せっかくなので美味しいうちに刺身も取り皿に取ってあげた。

お箸の文化圏の方ではないようで、フォークで刺身を食べている姿は新鮮だった。

「私もいただくわね」

そういうと、お母さまが伊勢海老を両手でつかんで頭からバリバリと食べていた。

毎年の事なので、私にショックはないが、初参加の妖夢と死神の青年はびっくりしたのか目を丸くしていた。

「お母さま、お客様がいる前ではしたない」

「伊勢海老で一番美味しい場所は殻なんだから、食べないともったいないわ」

お母さまのよくわからない理論が飛び出して場は和んだが、無作法をたしなめた私の話は有耶無耶にされてしまった。

伊勢海老の腕部分は残るが、それも後で酒のツマミにされてしまうので、毎年お母さま以外の者が伊勢海老にありつける事は無い。

西行寺家の家長権限である。仕方ない事だ。

食事も一段落して、男同士で話しやすいのか、死神の青年はお師匠様の妖忌と会話を始めた。

聞き耳を立てると、武士を初めてみただの、自分の武器の場所を瞬時に言い当てられていた事が驚いたなどであった。

是非曲直の使いである彼がいつ不審な行動に出るのか気になっていたのだが、取り越し苦労だった様だ。

「さあ、『メインディッシュ』のケーキよ」

お母さまは台所から、イチゴショートケーキを1ホール持つてきた。

家長自ら直々に台所に出向いたのではなく、ただ単に自分が食べたいただけだと思う。

お母さま自らロウソクを差し込み、マッチで火をつけ始めた。

「誕生日おめでとう、フランドール。今年で何歳になったの？」

「ありがとうございます。今年で479歳になりました」

「この瞬間^{とき}をあなたと迎えられた事を嬉しく思います」

「育てて頂き、ありがとうございます」

その後、皆から「おめでとう」という声と拍手が続いた。

皆から祝福されると、ちよつとくすぐったい。

毎年のやり取りだが、嬉しく思う。

私は一気にロウソクの炎を吹き消した。

「妖忌、この包丁できれいに6等分にして、切り分けなさい」

「かしこまりました」

手慣れた手つきで難しい6等分にチャレンジする妖忌。

去年は私達3名と小町さんの4等分で簡単だったのだが、今年は小町さんが居ない代わりに妖忌とお客様がいるから6等分……。

私はハツとした。

6個のケーキを5人で分けるとあまりが1個になる。

その最後の1個はもちろん家長であるお母さまが食べる事になるので、結局お母さまはケーキの2/6改め『1/3』を食べる事になる。

去年は『1/4』だった。

お母さまはきつと去年よりも多く食べようと、死神の青年を無理やり誘ったに違いない！

是非曲直片の内情を腹の探り合いで確認するとかではなく、多分そういう事なのだろう。

私は確信した。

『メインディッシュ』のケーキを食べ終わり、皆飲み物を飲みながらくつろいでいた。

妖夢は寝てしまったので、私の寝室に移しておいた。

私はというと、自分の許容量を超えてお酒を呑んだので、よくわからない感じになっていた。

……無性にお母さまに甘えたくなった。

今年は幽霊移民計画とかで頑張ったし、いいよね？

そんな事を考えていたら、お母さまが死神の青年に声をかけた。

「ねえ、死神さん」

「はい」

「あなた、訛りがありますけど、どちらのご出身かしら？」

「オーストラリアの地獄です」

「オーストラリアなのね。どの辺りをご担当されていたのかしら？」

「シドニーです」

外国生まれの死神かと思っていたが、どうやらその様だ。

オーストラリアのシドニーとは一体どこなのだろうか。

私の知識では残念ながらまったくピンとこない。

初対面のお客様に向かってちよつと失礼な話を始めたお母さまだったが、ついに腹の探り合いを始めたかとおもって私はわくわくした。

「シドニーね、いいところなのかしら？」

「最高だね！ 今頃街は雪で真っ白だろうな」

「雪……ねえ」

会話が途切れてしまった。

一体どの辺が腹の探り合いなのかさっぱりわからなかった。

とりあえず、お母さまが空いた様だし、私は抱き着く事にした。

「お母さま〜」

「あらあら、フランドールは甘えん坊さんね」

「抱っこして」

「フランドール、あなた酔っているわね」

「酔ってないよ」

「もう、しょうがないわね。よいしょつと」

お母さまは私を抱っこしてくれた。

「相変らず羽根の様に軽いわね。ちゃんと食べているの?」

「食べているよ」

「本当かしら?」

「そんな事より、今年は幽霊移民計画で頑張ったんだから、もつと褒めてよ」

「しょうがないわね。いいいいいこ」

お母さまは優しく撫でてくれた。

「うふふ」

私はそのままお母さまに抱き着いた。

眠いし、このまま寝てしまおうかな……。

「ほら、眠るなら自分の寝室に行きなさい」

「はい」

私は返事をする、お母さまから離れ、自分の寝室に向かう為、障子戸を開けた。

そこで私は死神の青年に呼び止められた。

「フランドール様、『気の抜けたビールは置いていませんか?』」

その瞬間、私は眠気も酔いも吹き飛んでしまった。

小町にしか教えていない秘密の合言葉……。

何か問題が起きた時に誰にも知られず私の書斎に行くための合図だ。

皆が居るここではバレバレだがしょうがない。

顔の向きが廊下側でよかった。

きつと今なら愕然とした顔になっていただろう。

私は秘密の合言葉のハンドシエイクを続ける事にした。

『大した注文ね』

『お茶の出がらしよりマシなら文句はありません』

『私の書斎にならあるかもね』

『そいつはありがたい』

死神の青年は私の後をついてきた。

書斎は防犯上、一度私の寝室に入らないと、入れない様になっている。

今、寝室では妖夢が寝ている。

あまり大きな声では話せないだろうが仕方がない。

書斎では私が上座に座り、死神の青年は下座に座った。

「小野塚さんからの伝言があります」

その時、初めて死神の青年はサングラスを外した。

童顔で瞳の色が綺麗な緑色なのが印象的だった。

「まっつて、小町さんはどうしているの？」

「訳あって、業務報告書受領業務から外されています」

「小町さんが外されている？」

「ええ、ですから小野塚さんから習ってきた秘密の合言葉を使わせてもらいました」

なぜ小町さんにしか教えた秘密の合言葉を知っているのかは分かった。

しかし、秘密の合言葉を使うほどの重要な話があるのだろうか？

「フランドール様、今あなたの本当の能力が四季映姫様の知るところとなつています」

「情報が漏れた……？」

「ええ、しかももう処分まで考えているとの事です」

「どんな処分なの？」

「フランドール様を西行寺様との親子関係を引き裂き、地獄の鬼神長たちに引き渡すそうです」

「そんな……」

「引き渡されたら最後……きつと封印処分となるでしょう」

「……」

「どうか、対策をお考え下さい」

「……わかったわ。検討します」

「自分からは以上です」

「あなたは、私にこんな情報を流して自分の立場が危うくならないの？」

「俺だつて悩んださー！」

死神の青年は叫んでいた。

これが彼の素のままの感情なのかもしれない。

「すみません、でも仲睦まじい親子の様子を見ていたら……言わなくっちゃって思つて。言わなかったら、自分が自分でなくなるような……そんな気がして」

「危険を顧みず、情報を提供してくれた事を感謝します」

「そう言つてもらえると助かります」

私は戸棚の中をあさり、あるものを探していた。

あつたあつた。

「はい、『気の抜けてないビール』よ。入荷したばかりだから、まだ美味しいはずよ」

「あ、ありがとうございます」

「ごめんなさい、今はこれが精一杯の感謝なの」

「大丈夫です。危険な事したのは自分の判断です。自分で自分の責任を取ります」

この死神の青年もそうだが、小町さんもそうだ。

情報漏洩が閻魔様にバレたらどうなるか、考えていないじゃないか？

彼らは浄玻璃の鏡を持っている。

「後、業務報告書。これを取りに来たんでしよう？」

「そうですね、すっかり忘れていました」

「玄関まで送りますね」

「ありがとうございます」

彼はそういうと、懐にしまっていたサングラスをかけた。

玄関まで行くと、お母さまとお師匠様の妖忌が待っていた。

お母さまは少し大きめの包みを持っていた。

「白玉楼の主、西行寺幽々子の名において、情報の提供を感謝致します」

お母さまは死神の青年に深々と頭を下げた。

「どうか、しつかり聞かれていたのね。」

「そんな、畏れ多いです」

「それとこんなものしか用意できなかったけど……。今日の残り物を詰め合わせておいたわ」

「ありがとうございます」

お母さまが他の人に食事を分けてあげるなんて……。

私は少し驚いた。

「武器をお返しします」

お師匠様の妖忌は取り上げていた武器を返却した。

見た事も無いオートマチックの拳銃だった。

それを懐にしまうと、靴を履いて立ち上がった。

「それでは、失礼します」

そういうと、死神の青年は私達に敬礼をした。

私も見よう見まねで返礼した。

その後、彼はゆっくりと歩いて屋敷を出ていった。

「ねえー！ 名前ぐらい教えてよー！」

私は彼に向かって叫んでいた。

でもビール瓶を持った手を高く掲げ、サムズアップサインをする

と、姿が掻き消えた。

距離を操った様だった。

結局、彼の事はオーストラリアのシドニー担当という事しかわからなかった。

「結局何者か全く教えてくれなかったわね」

お母さまが困った表情で一言喋ったが、私は反論した。

「いえ、素顔は見ました。あとはオーストラリアのシドニー担当という情報から調べがつくと思います」

「それがダメなのよ」

「なぜ？」

「オーストラリアのシドニーは南半球にあるのよ」
「？」

「南半球は夏と冬が逆転するのよ。シドニーって今は夏なのよ。雪なんて降ってないわ」

「じゃあ全部嘘だったと!?!」

「それは無いと思うわ。小町からの伝言は本当じゃないかしら」

「なぜ、そう思われるんですか？」

「さっきの嘘は彼なりの保身じゃないかしら？ 誰が情報漏洩したか、わからなくするための」

「なるほど」

「だから、私は問い詰める事もしなかった。私達は知らない『誰か』から情報をもらった」

私はうんうんと頷いたが、忘れた事を思い出していた。

「そういえばお母さま。私達の話立ち聞きしたんですね？」

「未婚の娘が寝室に男を連れ込んだって思ったから、心配で心配で」

お母さまは『よよよ』とウソ泣きをした。

ふざけていてもしょうがないので、本題に移る事にした。

「それよりも小町さんからの情報、どうしましょう」

「来るべき時が来たって感じね。隠し通せるとは私も思わなかったけど」

お母さまはいつになく真剣な表情で私を見た。

「フランドール、もしも私と是非曲直庁が対立したら、どちら側につきかしら？」

いきなり最終決断を求めてきた。

「私は……是非曲直庁配下の妖怪です。ですが、お母さまとの関係が引き裂かれ、封印されるとわかっていたら……。私はお母さまの側につきます」

「それを聞いて安心したわ。私は、西行寺幽々子は母親として、フランドールを手放す気はありません。たとえば、是非曲直庁が敵になろうとも、あなたを守って見せます」

「お願いします。お母さま」

「覚悟は良いわね？」

私が相槌を打つと、お母さまはいきなり準備運動を始めた。

「さーて、正月返上で私も計画書を書きますか？」

「私は何か手伝う事はありますか？」

「うーん、特にないわね。能力の練習を忘れず行って欲しいぐらいかしら」

「わかりました」

「他に質問は？」

「計画名称はどのようになっていますか？」

「そうね……ユリウス・カエサルのお話から取りますか？」

「ユリウス・カエサルの？」

「ええ、古代ローマ時代、軍隊をつれてルビコン川を渡ってはいけないというルールがあったんだけど、ユリウス・カエサルは大軍を率いてこの川を渡ったの。その時カエサルは『賽は投げられた』と叫んだそうよ」

「『賽は投げられた』……。もう後戻りできないという事ですか」

「だから今回の計画名称は『ルビコン計画』とします。あなたのいう通り、もう後戻り出来ないしね。さあ、私達も賽を投げるわよ」

私達の運命は、神が遊ぶ双六だとしても、上がりまでは一天地六の

賽の目次第。

鬼映姫と出るか、蛇幽々子と出るか。

西行寺幽々子、戦慄の『ルビコン計画』発案！

あたいは面倒ごとが嫌いである。

だが今回の事は見過ごせないものだった。

妹の様に可愛がっていた、フランちゃんが封印処分される可能性があるのだ。

あたい、小野塚小町は知り合いの死神連中から嘆願書の署名を貰って回っていた。

今日1日で10年分の能力を使ったんじゃないかと思うぐらい能力を使った。

100ちよつとの嘆願書だが、これを見て四季映姫様の気持ちが少しでも変わればと思っていた。

そんなことを考えながら是非曲直庁の廊下を歩いていたら、今日代理で白玉楼まで行っていた青年が歩いていった。

「おーい、青年！」

「ああ、小野塚さん。これからどちらに？」

「あたいは四季映姫様の私室に行くところだよ」

「俺もちょうど帰ってきた所で、業務報告書を提出しに行くところさ」
青年を見ると、片手にはビール瓶、もう片手には何やら料理のいい匂いがする大きな包みを持っていた。

食事もせずに駆けずり回っていたので、お腹がすいてくる。

「いい匂いだね。白玉楼でもらってきたのかい？」

「ええ、西行寺様から頂きました」

「え、フランちゃんではなく、あの西行寺様から？」

「ええ」

あの食い意地が張っている西行寺様が？ 何故？

青年は理由をこっそり耳打ちしてきた。

「例の情報、流しておきました」

え……、相談した時、そんなことを言われてもみたいな反応を最初はしていたじゃないか。

何が彼の心を変えたのか……。

「小野塚さん、俺はあの二人を引き離す事に反対です。あんなに仲がいいのに、秩序の為、と言って引き離す事にどんな正義があるのでしょう？」

「あんたもそう思うかい？ そうかそうか」

こんな遅くなったという事は、きつとパーティーに参加してあの親子の事を観察したのだろう。

「子供の誕生日の為に、西行寺様自らケーキを持ってきて、ロウソクまで立てたんですよ。あの仲を引き裂く事なんてできません」

いや、それはきつと西行寺様の食い意地が張っていただけだと思うぞ。

気を変えられても困るので、この言葉は飲み込んでおこう。

「西行寺様にフランドール様が酒に酔って甘える所はぐつときましましたね。だから心変わりをした次第です」

「ありがとう……。後は西行寺様次第つてところか。何とか穏便に済ませとくれよ」

話しながら歩いていたら、四季映姫様の私室の前に到着した。

まだ『在室』の札になっているのは幸運だった。

あたいはノックをした。

「誰ですか？」

「小野塚小町です。四季映姫様に少しお話があつてまいりました」

「もう帰る所です。手短にお願ひしたいのですが」

「それでも構いません」

「では、入室を許可します」

鍵が開く重々しい音が聞こえた。

「失礼します」

あたいは重厚なドアを開けた。

四季映姫様の私室は12畳ぐらいのスペースで、上半分の6畳ぐらいのスペースには大きくて装飾の施された閻魔様用の机に、これまた装飾の施された閻魔様用の椅子にちよこんと四季映姫様が座っていた。

そしてその机の前には来客用スペースとして、ガラス製のテーブル1卓に、ソファがテーブルの両脇に2脚ずつ計4脚配置されている。あとは小さな台所が設置されていて、その上に小さな食器棚がついている。

さらに個人用ロッカーや飲み物を入れておく冷凍庫付きの冷蔵庫なども設置されている。

青年は持っていた大きな包みとビール瓶をガラス製のテーブルに置き、四季映姫様に業務報告書を差し出した。

「四季映姫様、まずは白玉楼の業務報告書をお受け取り下さい。12月分です」

「えーと、名前は……ベルンハルト。受領業務、お疲れ様でした。それで、フランドールの隠された能力について、何か尻尾をつかみましたか?」

この青年の名前はベルンハルトというのか。

今までのらりくらりと名前を教えてくれなかったし、この死神何か裏があるな……。

「いえ、パーティにまで潜入したのですが、それがさっぱりで」

「まあ、そうそう尻尾は出さないという所ですか。仕方がありませんね」

話が終わったのか、四季映姫様があたいの方を向いた。

「それで、小町は何の用ですか?」

「フランちゃんの封印処分に対する減刑の嘆願書です。100通以上あります」

「あなたはこれで私が心変わりすると思ったのですか?」

「いえ。あたいは四季映姫様に要求しに来たんです」

「ほう……死神が、閻魔に物申すと」

四季映姫様は悔悟棒を口元に持っていていき、表情を読み取れない様子でした。

「物申す、という割にはあまり勤勉ではない様ですね?」

「……」

「あなたは少し仕事をおろそかにしすぎる」

正論すぎて、あたいは何も言えなかった。

「ひとまず、嘆願書を下さい」

「はい、こちらになります」

あたいは持っていた嘆願書を四季映姫様に渡した。

「確かにフランドールの罪と言えば、能力の虚偽報告だけ。それだけで封印処分とは処遇があまりにも苛烈すぎる気がします」

え？

「私も鬼神長宛ての嘆願書を書きました。それに小町が持ってきた死神の嘆願書。これで鬼神長たちを説得してみようと思います」

えええ！

「本日帰るのが遅くなったのは、嘆願書のフォーマットなんて知らなかったの、納得できるものができるまで書き直していたからです」

「あたいは……あたいはッ！　なんて良い上司を持ったんだ……」

あたいは大粒の涙を流していた。

「私は元から良い上司のつもりでした」

あたいは四季映姫様やベルンハルトが居る前でむせび泣いた。

今年最後に泣いたのが、うれし涙でよかった。

「白玉楼から貰ってきた料理です。お二方とも食事はまだですよね？」

「ほう、酒まで持参して、閻魔の私室で宴会を開こうという事ですか？」

「そのつもりですが、ダメですか？」

「あなたという人は……もう良いわ。あなたはグラスを3つと箸を2膳とフォーク1本、食器棚から出してください。私は冷凍庫から氷を持ってきます。そのビール、冷えていないんでしょう？」

「ええ、常温ですね」

「氷を入れるのは、手取り早く常温のビールを美味しく飲む方法です」

てきぱきと宴会の準備をする四季映姫様とベルンハルト。

「小町、泣き終わったのなら、包みを開いて料理をテーブルの上に広げなさい」

「は、はい」

あたしも宴会の準備に参加し、数分もたたないうちに宴会の準備が完了した。

各自氷を入れたグラスにビールを注いでいく。

「宴会、というか忘年会ですよ、これ」

「そうですね。では氷が解け始めるとあまり美味しくなくなってしま
うので、一言だけ」

四季映姫様が乾杯の音頭をとり始めた。

「短いですが、今年も最後まで頑張りましょう。皆さん、来年もよろし
くお願いします」

「それでは、乾杯！」「乾杯！」「乾杯！」^{Prosit}

1 | 9 | ルビコン計画

ルビコン計画

まもなく時間だ。

私、四季映姫は少し緊張している。

——1980年代 地獄

フランドールの処遇を検討する為、私は鬼神長の一人、水鬼鬼神長の私室の前で腕時計を見ながら面会の時間になるのを待っていた。

水鬼鬼神長に面と向かってお会いするのは、これが初めてだ。

行事などで見かける事もあったが、話したことはなかった。

文通ならやり取りをした事がある。

前回、白玉楼を探らせる為、鬼神長直属の特務部隊の出動依頼を出したのと、今回の面会設定の件である。

……ほぼ事務手続きじゃないか。

だからなのか、少し緊張している。

14時ジャスト、時間だ。

私はノックをすることにした。

「四季映姫・ヤマザナドゥです。面会の時間になりましたので、参上しました」

「どうぞ入ってちょうだい。鍵は開いているわ」

「失礼します」

重厚なドアを開け、部屋に入った。

部屋を見渡すと、私の私室と同じ間取りの12畳となっていた。

鬼神長といえど、与えられる部屋は閻魔と同じらしい。

上半分の6畳のスペースには大きくて装飾の施された机に、これまた装飾の施された椅子に妙齢の女性が座っていた。

水鬼鬼神長の容姿は、瞳の色が落ち着く緑色で、髪の色は赤色で腰ぐらいまであり、髪型はセンター分けだった。

そして一番目立つであろう『鬼の角』が見当たらない。

私がボーッと凝視していると、それに気付いたのか、水鬼鬼神長は説明を始めた。

『鬼の角』があると、威圧しちゃうんで、普段は消しているの」

「そうでしたか。凝視してしまい、申し訳ありませんでした」

「こちらこそごめんなさいね、ちよつと書類作業が終わらなくて……。」

あ、来客用の椅子にお座りください」

「はい、ありがとうございます」

机の前には来客用スペースとして、ガラス製のテーブル1卓に、ソファがテーブルの両脇に2脚ずつ計4脚配置されている。

この配置も私の私室と同じ配置である。

私はソファの下座に座らせて頂いた。

「仕事が片付かなくてね。本日のアジェンダはどんなものかしら？」

「今噂になっている白玉楼に住む吸血鬼、フランドールの処遇についてです。能力の虚偽報告により、西行寺幽々子から親権を奪い、水鬼鬼神長殿に引き渡そうと考えております」

水鬼鬼神長は書類作業の手を止められて、私を見つめた。

私は構わず話を続けた。

「その際、能力の強さ故に封印処分になるのではないかと思われるので、それでは処分があまりにも苛烈であると考え、減刑の嘆願書を持参した次第です」

水鬼鬼神長は席を立つと、ソファの上座に座った。

「穏やかな話じゃないわね。親権を奪うとか封印処分とか」

「当然の措置だと思います」

「そう。それじゃあ、まずはあなたの意見を聞いわ。嘆願書はどんなものなのかしら？」

「こちらになります」

私は自分の嘆願書と小町が集めてきた死神の嘆願書両方を提出した。

「けっこうあるのね。あなたの嘆願書の他に、死神の嘆願書？ 白玉楼の吸血鬼は随分と好かれているのね」

「はい、冥界の業務報告書も問題なく提出し、真面目な性格であるので、私としても嘆願書を書いた次第です」

「どれどれ。寿命を超えて死から逃げ延びている仙人や天人の討伐に『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』を使用することで、精神的な揺さぶりによる遠回りな方法とは、別方向での討伐手段として利用可能、と」

水鬼鬼神長は私の嘆願書を読むと、少し考える仕草をした。

「そうです。鬼神長直属の特務部隊の隊員としていかがでしょうか」

「確かに『即応任務』などの時でも、私たち鬼神長の中で処理ができるのは魅力的ね」

「前回の白玉楼調査依頼の時なんて、死神の、それも年若い190歳ぐらいの子がきてびびくりしました」

私が前回の調査依頼の話を出した途端、水鬼鬼神長の目が吊り上がった。

「うちの隊員を馬鹿にしないで。皆命を張っているの」

「し、失礼しました」

水鬼鬼神長から絶対零度の様な視線を向けられ、平謝りをした。

「ああ、ごめんなさい。つい、カツとなっちゃって」

「いえ、私の失言です」

「年若い死神を送り込んだのには訳があるのよ。家族パーティーに潜入して情報を収集する任務だったからなの。バリバリの軍人を送ったらパーティーで浮いてしまうでしょ。だから、まだ年若い隊員が適任だと思ったの」

水鬼鬼神長はソファに座ったまま、自分の机の上の資料をあさり始めた。

「あったあった。特務部隊所属『死神ベルンハルト捜査官』の報告書」

「これは一体……」

「これは私に対する報告書よ。豆カメラで盗撮に成功したのか、パーティーの様子が克明に記録されているわよ」

水鬼鬼神長は報告書のファイルを開くと、数枚の写真を見せてきた。

幽々子自ら誕生日ケーキを運ぶ写真、酔ったフランドールが母親に甘える写真などだ。

「報告書の備考欄にはこんなことが書かれているわ。こんなに仲睦まじい親子に限って、そんな恐ろしい能力を持っているとは考えにくい、とね」

……魂魄妖忌め、わざと写真を撮らせたな。

あの番犬が豆カメラごときに気付かない筈が無い。

「今度は私から意見を言わせて貰うわね」

水鬼鬼神長は私を正視した。

「私はいち吸血鬼が持つ能力として、『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』は大きすぎると考えるわ。もし、そんな存在が生まれたとしたら、それはもう『破壊神』ね」

確かに子供の噂話を真実だと思ったのは私の直感だった。

裏付けは今のところ取れていない。

「浄玻璃の鏡か、私の『白黒はつきりつける程度の能力』で噂話に白黒つけます」

「それじゃあ、仮にその能力を持っていたとしましょう。なんで親子の仲を引き裂くような真似をするのかしら？ あんなに仲が良いのに」

「それは戦力バランスの問題です。是非曲直庁の置かれる地獄の戦力と白玉楼の置かれる冥界の戦力は均衡を保つべき事だと考えます」

「あなたの考えは理解できたわ。現実問題として、幽々子様からどうやって親権を奪うのかしら？」

「上司の私が命令します」

「命令に背いたら？」

「もし抵抗する様な事があるのなら、捕縛すれば宜しいかと」

「それは無理な話だと思っわ」

「なぜですか？」

「幽々子様という戦力を天秤にかけて、釣り合うだけの分銅が今の是非曲直庁には存在しないのよ。閻魔王様のいう事も聞くかどうか」

「……」

「幽々子様はそつとしておくべきお方なの」

わかつてはいたが、見ないようにしていた部分がある。

幽々子は本当に私の部下なのかと。

私は上司である閻魔王様から幽々子の持つ白玉楼という冥界を引継いだ。

引継ぎの際、幽々子には十分注意する様、指示があつた。

水鬼鬼神長ですら、『様』付けである。

……それでも、私は自分の意志を通したい。

「それでも、私は自分の正義を優先させます」

「そう、それじゃあ私から言う事は無いわ。総括に入らせてもらつてもいいかしら？」

「ええ、お願いします」

「フランドールがもしも私に引き渡されたとしても、封印処分などしません。そんな便利な能力があるのなら、鬼神長直属の特務部隊の隊員として歓迎します」

「貴慮して頂き、有難う御座います」

嘆願書が無駄にならずに済んでよかった。

意見の相違があるものの、封印処分は避けられた。

得るものも得たので、私は面会を切り上げ、帰る事にした。

「本日は貴重なお時間を頂きまして有難う御座いました」

「いえいえ、あなたも忙しいでしょうに」

私はソファから立ち上がり、ドアに向かったところで水鬼鬼神長に呼び止められた。

「あなたは、是非曲直庁が設立されたときに中途採用された、閻魔なのよね」

「……はい」

「それじゃあ、自分の思う限りのことをしなさい、四季映姫・ヤマザナドゥ殿。汚い仕事は私達に任せて、あなたは真っ白のままです」

「はい」

最後にかけられた言葉は何だったのだろうか？

少し思うところがあつたが、私は水鬼鬼神長の私室を後にした。

拝啓お母さま。

私、フランドールに隠している事をそろそろ教えてくれませんか？

——1980年代 白玉楼

お母さまは本当に正月返上で計画書の完成を急がれた。

有言実行というか、母は強しというか……。

いつも楽しみにしていた正月料理もそっちのけで計画書を作成していった。

食事の時間になると、お雑煮を搔つ込むと筆を走らせていった。

昼夜問わず、不眠不休で計画書を書くのであった。

そのおかげか、クリスマスから3週間前後で計画書は完成した。

計画名称『ルビコン計画』。

すぐに開始宣言があるかと思ったら、まだ秘密キックオフとの事だった。

遅くなったが、我が家にも正月が来た。

日程が鏡開き当日になってしまったが、皆で鏡餅をチーズの入った磯部巻きにして頬張った。

そのまま何事もなく4月になり、裏庭の工事がやっと終わった。

1年近く工事をされて運動不足気味だったのだが、これで解消される事となった。

昔みたいに裏山に登ってもよかったのだが、お母さまから離れるのが嫌だったので、一緒に登る時以外は登らなかつた。

結局、お母さまはこの工事の事も秘密のまま終わらせた。

紫さまが言っていた『500年前の真実』も秘密、『ルビコン計画』も秘密、『裏庭の工事』も秘密で私はフラストレーションを溜めていった。

それでも真実を知る瞬間ときが近い事はなんとなくわかつていた。

私の能力が四季映姫様の知るところとなり、『ルビコン計画』が立て

られ、計算されたかの様に『裏庭の工事』も完了した。きつと『500年前の真実』もどこかに関係しているに違いない。全ての秘密が1点に収束する気がする。紫さまは真実とは常に残酷だと仰られていた。私に全ての真実を受け止める事は出来るのだろうか？いや、西行寺家の娘として、受け止めなければならないのだろう。私は静かに確信していた。

そんな事を考えながらさらに4ヶ月が過ぎ、冥界は夏になってた。

夏といっても、冥界は幽霊が居るので涼しくて快適である。

居間でお母さまと一緒に3時のおやつである葛餅を食べていた所に、紫さまがスキマから現れた。

紫さまはいつになく上機嫌な表情をしていた。

「あら紫、あなたの分の葛餅は無いわよ」

「葛餅よりもこれを見なさい」

紫さまはテーブルの上に新聞を置いた。

「どうやら、『外』の新聞らしい。」

お母さまは新聞を広げ、1面記事を読み始めた。

「フムフム、どうやら始まったみたいね」

「そうなのよ」

お母さまと紫さまはつうかあの仲なので、紫さまが何を言いたいかすぐにわかるらしい。

羨ましい限りである。

「フランドールも読んでみなさい」

お母さまが私にも読むように勧めてきた。

1面記事で良いのかな？

とりあえず、読んでみる事にする。

なにに。『心霊現象続々!!』心霊スポット一覧を掲載!!』と見出しには書いてある。

心霊スポット一覧を見る限り、『幽霊移住計画』で使った物件と合致

しているものがいくつかあった。

心当たりが無いものも、計画書の資料と見比べればきつと合致するだろう。

紫さまはこれを見せたかったのだろう。

この新聞が言っている事。それは……。

「幽霊が……、見世物になっっている？」

お母さまと紫さまは顔を見合わせた。

「どうやらフランドールも回答に行き当たったみたいね」

「その様ね」

まだよくわかっていないが、お二方は満足された様だ。

「それじゃあ紫、この新聞をちよつと届けてくれないかしら」

「どちらまで？」

急に紫さまはよそよそしくなられた。

面倒な事に巻き込まれた、と言わんばかりの顔となった。

「もうわかっていているでしょ。是非曲直庁よ」

「嫌よ」

「四季映姫・ヤマザナドウの私室」

「絶対に嫌」

「目立つように机の上に置いてくれたら最高ね」

「簡単に言ってくれますわ」

「さらに注文を付けるとすると、あなたの仕業とわかる様にしてほしいの」

「正気なの？ 見つかる危険だつてあるのよ？」

紫さまは目をつむり、頭が痛いという、額に手を当てる仕草をしながら言った。

「小町が業務報告書を取りに来るのをまっつて、渡す様に言えば良いじゃない」

「それがダメなのよ。業務報告書を取りに来る死神が最近小町じゃないのよ」

「私が四季映姫を苦手とする事は知っていますでしょう？」

「知ってるから頼んでるんじゃない」

「さらに夕チが悪いじゃない！　もしもやるにしても、其れ相応の報酬が無ければやりませんわ」

「この葛餅じゃダメかしら」

お母さまは食べかけの葛餅を紫さまに渡そうとした。

「食べかけじゃない！　頂きますけども！　あら、意外と美味しい」

ぷりぷりと怒っていた紫さまだったが、甘味で機嫌を直された様だった。

「それで紫は葛餅でどこまで働いてくれるのかしら？」

「三途の河の小町まで届けてあげます。そこから先は知りません」

「それで十分よ。ありがとう、紫。やっぱりあなたは頼れるわく」

「フン」

お母さまが紫さまをあそこまで煽るなんて初めてだ。

何かストレスでも溜まっていたのだろうか？

「葛餅のお礼に良い事を教えてあげます。今、地獄でフランドールの真の能力がホットな噂話となっています」

「変ねえ、冥界や幻想郷ではなく、地獄で？」

「ええ、どうも火を煽っている輩がいるみたいで」

「四季様にも困ったものだわ」

紫さまは葛餅を食べ終わると、スキマで帰っていかれた。

きつと小町に新聞を渡しに行ったのだろう。

「さあフランドール、私の書齋に行きましょう」

「ここでは話せない事ですね、わかりました」

お母さまと私はそろってお母さまの書齋へ移動した。

書齋では私が下座に座り、お母さまは上座に座られた。

「フランドール、それでは『幽霊移民計画』の本質を述べよ」

「わかりました」

『幽霊移民計画』の本質。

それは今までたくさんあったヒントをつなぎ合わせる事で答えは導かれると思われる。

お母さまが最初に言っていた言葉、『四季様が冥界拡張計画を、実行に移さざる負えない状況に仕組むのよ』。

私が演説で使った適当な言葉、『これによって是非曲直の石頭共に現実を突きつける!!』。

そして今回の新聞、『幽霊が見世物にされている』という現実。

これらを組み合わせ、最適な解を導き出す。

「冥界の面積が足りないのです、幽霊を顕界の廃墟に移民させることによって、空きスペースを作ります。しかしそれによって、幽霊が見世物にされているという現実を四季映姫様に突きつけるのです。四季映姫様は冥界を拡張し、幽霊を顕界から戻す以外、打つ手が無くなります」

「その通り。四季映姫の石頭でも幽霊が見世物にされているとなると、黙っては居ないでしょう。よくできたわね、フランドール。100点満点よ。いいこいいこ」
「ウフフ」

お母さまは私を優しく撫でてくれた。

私は解を導き出せた嬉しさと、やっと冥界の一員として認められたのではないかという嬉しさと一杯になった。

『幽霊が見世物にされている』という現実が出来たので、『幽霊移民計画』はこれにて完了となります」

「という事は、いよいよ」

「ええ、四季様が冥界に乗り込んで来るので、『ルビコン計画』の開始キックオフとなります」

「では計画の詳細を教えてください」

「でもその前に」

「？」

「フランドール、あなたの能力はどの程度まで出来るようになったのかしら」

「えーと、300mなら動いているものでも破壊できます」

「マルチトラッキング複数追跡は？」

「10個までならやったことがあります」

「上出来ね。それじゃ地下室に行きますか」

お母さまはいきなり書斎の畳を一枚剥がし始めた。

畳を剥がすと床板の場所に観音開きになる扉が取り付けられていた。

こんな設備があるなんて、初めて知った。

扉を開けると、6畳ぐらいの小さな地下室が現れた。

これを作る為に1年も工事に費やしたのか？

「ささ、入って」

「わかりました」

お母さまは先に飛び込んでいった。

私も続いて地下室に入ると、壁はコンクリート打ち放しで、なんの装飾も施されていなかった。

部屋の両脇にはステンレス製の棚が設けられていて、巻物が多数保管されていた。

「お母さま、この巻物は一体……」

「この屋敷の設計図とか、重要書類とかを保管しているの」

重要書類！

私が探していた、500年前の業務報告書の写本がここに眠っているのかと思ったのだが、どうやら違う様だった。

私が書類を確認していたら、お母さまは奥側の棚を動かし始めていた。

「よいしょっと」

棚を動かすと、さらに地下に通じる扉が出てきた。

扉は大人が一人入れるかどうかというぐらいの小さなものだった。

そこを開けると、漆黒の闇が支配していた。

まったく底が見えない。

「えーと、この辺りにあったかと思っただけ……。あつたあつた」

お母さまは小さい扉に手を突っ込んで何かを探していた。

バチンという電気の回路遮断器ブレーカーを上げる音が聞こえると、闇が消え、蛍光灯に照らされた垂直の通路が現れた。

光を入れたのにも関わらず、垂直の通路の底は見えなかった。

「一応、はしごは付いているけど、ホバリングしながら降りていくと、らくちんよ」

「お母さま、中に入ったら、抱っこして」

「もう、しょうがないわね〜」

通路の中に入り、私を片手で抱っこしたお母さまは、はしごから手を離した。

ゆつくりと降りていく私達。

何m降りただろうか？ 地下200mぐらいは来ただろうか。

垂直の通路の終わりには、24畳ぐらいの大きな空間になっていて、直径2mはある金属製の円柱がはめ込まれていた。

上に赤色回転灯と、右端にはブラウン管ディスプレイとキーボード、磁気式カードキーを入れるであろう穴が3カ所あった。

「大金庫室？」

「そうよ。1年かけてこれを作っていたの。私の大事な大事なものを保管するための場所」

お母さまはカードキーを懐から出すと、3枚別々の場所に入れた。すると、ディスプレイにパスワードを入れる様に要求する画面が出てきた。

キーボードからパスワードを見ちゃいませうかね〜。

吸血鬼の動体視力の出番である。

何々。『F・5・R・6・I・5・D・1・A・3・X・Y』……？

ええ……。なんで架空の殺し屋の口座番号をパスワードにしているの？

お母さまのセンスに少し引いた。

パスワードの入力が終わると、赤色回転灯が回り出し、はめ込まれていた円柱の扉がせり出してきた。

「足元の警戒色の場所には入らないようにね。危ないから」

「わかりました」

円柱の扉は厚さ1mぐらいあるだろうか？

4重のロック機構がある大きな扉だった。

扉の奥には鉄格子の扉がまたあったのだが、その奥に見えるものは目を疑った。

「金塊!？」

それも1つや2つではない。

大金庫室の中は24畳ぐらいのスペースで、そこにうず高く積みられた金塊が奥まで続いていた。

「そんなに興奮しないの。この金塊は怨霊の欲望から生まれた金を溶かして集めたものなの。怨霊は全部始末したから、安全よ」

お母さまは中の鉄格子の扉を開けられた。

中に入ると金塊の多さに圧倒された。

「閉めるわね」

そういうと、お母さまは大金庫室の内部にある『開』『閉』スイッチの『閉』スイッチを押した。

すると円柱の扉は大きな音とともに閉まった。

「この大金庫室には装甲を施しているの。側面と底面はエイブラムス戦車にも使われている厚さ60cmの劣化ウラン複合装甲をさらに厚さ60cmの鉄筋コンクリートでサンドイッチにしているのよ。計1.8mの装甲なの」

お母さまはコンクリート壁をコンコン叩きながら説明した。

「上部装甲にはそのサンドイッチをさらに空気の層を含めて3層に重ねているの。これで核ミサイルが飛んで来ようとも、核バンカーバスターが飛んで来ようとも内部の大事なものは守られるわ」

私は不思議に思った。

お母さまはそんなに守銭奴だったのかと。

「そんなに金塊が大事なんですか？」

「いいえ、この金塊は侵入者を惑わす為のデコイなの。本当に大事なものはこの奥にしまっているのよ」

私達は金塊奥のロッカーが並んでいる場所に到着した。

所謂、貸金庫という奴だ。

しかも使用済みのものを調達してきたらしく、見たところ傷だらけだ。

この中に大事なものが入っているのだろうか？

「この中に入っているのですか？」

「いいえ、これもデコイよ」

お母さまは袖の下から円筒形の何かを取り出した。

「フランドール、よく聞きなさい。これから話すことは自分の将来を決める選択です」

いきなり重い話になってきた。

自分の将来？

「ルビコン計画はこの選択から始まります。私の娘として、のほほんと暮らしたいのであれば、横にある金塊を取りなさい。それとも私の後継者として全てを知りたいのであれば、この円筒形の『鍵』を取りなさい」

私は……どうしたいのだろうか。

のほほんと暮らすのも良いだろう。

だがやはり全てを知りたい。

お母さまの全てを……。

私は円筒形の『鍵』を取る事にした。

「そう、ありがとう。後継者になる選択をしてくれて。私は嬉しいわ」
お母さまはまた袖の下から今度は鍵の束を出してきた。

「13番貸金庫から中身を取り出しなさい」

私は13番貸金庫の鍵を開け、中のトレーを取り出した。

トレー一杯に詰まっているこれは……お札？

しかも幻想郷で流通している1円紙幣とは異なるデザインをしていた。

「それは地獄で流通しているお札、地獄ドルよ。是非曲直庁の造幣局が発行しているものなの。今は関係ないから下に置いて良いわ」
トレーを床に置き、貸金庫内をもう一度覗くと、円形の穴があった。
見たところ、この『鍵』が入りそうである。

『鍵』を差し込んで、はまったと思ったら、右に1回転させなさい。鍵が開く音が聞こえたら、すぐに手を放すんですよ」

私は短い腕を伸ばして、13番貸金庫の中へ『鍵』を突っ込んだ。
はまる感触がしてから、言われた通り、右に1回転させたら鍵の開く大きな音が聞こえた。

「すぐに手を放して！」

私は言われた通りすぐに手を離した。

そうしたら貸金庫全体が弧を描く様に動き出した。

「貸金庫の奥に……隠し部屋？」

「ええ、金庫室の奥にまた金庫室があるなんて誰も思わないわよね」

隠し部屋の奥にまたさつき見たような光景が広がっていた。

直径2mの円柱の扉と、上に赤色回転灯^{パトランプ}、右端にはブラウン管ディスプレイとキーボード、磁気式カードキーを入れるであろう穴が3カ所。

お母さまは別のカードキー3枚を差し込むと、同じパスワードを入力していた。

危なっかしいと思いつつも黙っておいた。

先ほどと同じように、パスワードの入力が終わると、赤色回転灯^{パトランプ}が回り出し、はめ込まれていた円柱の扉がせり出してきた。

円柱の扉が開くと6畳ぐらいの部屋が出てきた。

今度は鉄格子の扉は無い。

「閉めるわね」

お母さまはまた金庫室の内部にある『開』『閉』スイッチの『閉』スイッチを押した。

先ほどと同じように円柱の扉は大きな音とともに閉まった。

音から察するに、先ほどの貸金庫の扉も閉まった様だった。

これで完全な密室となった。

「もうこれで誰も入ってこれないわね。紫を除いて」

6畳の部屋の両脇には最初に見た地下室にあった様なステンレス製の棚が設けられていて、ここにも巻物が多数保管されていた。

「……あったー！」

500年前の業務報告書の写本がここにはあった！

これで『500年前の真実』を知る事が出来る。

「読まなくても良いわよ。私が概要を話してあげるから。さあこっちに座って頂戴」

促されるままに座布団が敷かれている場所に座った。

その場所には小さな机があり、くたびれた段ボール箱が鎮座してい

た。

その段ボール箱にはマジックで『宝物』と書かれていた。気になって中身を確認すると……。

……随分昔、それこそ読み書き練習時代の落書きが出てきた。多分、お母さまをモデルに落書きをしたのだらうと思う。

当時紙は貴重だったので、紙を無駄にするなど怒られた記憶がかすかにある。

大事にとつておいてくれたんだ。

そのほかにも私が書いたであろう落書きなどが出てきた。

これらはお母さまにとって、かけがえのない本当の宝物なのだろう。

それこそ核ミサイルや核バンカーバスターが降ろうとも守りたいものなのだ。

少し涙が出てきた。

「あら、黒歴史だつて言つて、全部燃やすんじゃないのかしら？」

私はお母さまに抱き着くと、若干鼻声で回答した。

「そんなこと……できません」

「そう、なら良かったわ。本当にフランドールは甘えん坊さんねえ。

いいこいいこ」

お母さまはそつと私の頭を撫でてくれた。

「どこから話そうかしらね。まずは私が何者かを伝えなければいけないでしょう」

「お母さまが何者か？」

「ええ、今でこそ四季映姫・ヤマザナドゥ様の元で白玉楼という冥界を管理していますが、本当の地位はもつと上にあるのです」

「本当の地位、ですか？」

「ええ、私は十王様たち直属の殺し屋HITMANよ。『お迎え』を統括している鬼神長ですら、私の露払いにすぎません」

なんとなく予想は付いていた。

お母さまの能力的に殺し屋と言われても、私はそれほどショックではなかった。

こんな便利な能力を放置している是非曲直の正気を疑いたかった。

「私は輪廻転生というシステム自体を弄ろうとする不届き者を即座に抹殺する役目を負っています。システムを弄られたら、どんな影響が出るかわかったものではないので。是非曲直内では『即応任務』と呼ばれています」

『即応任務』……。それでは色々理由をつけて顕界に降りていたのもそうなのですか?」

「ええ、顕界の茶菓子屋で特売があるとか、適当な嘘をついてね。これからはもうあなたに嘘をつく必要は無いわね」

薄々は気付いていた。

買ってくる茶菓子の製造元が幻想郷外の住所が書かれていたりしていた。

いくら紫さまの親友とはいえ、ちよつとした理由で幻想郷の外に行く事は許されない。

何か尋常でない理由があるのだろうと思っていた。

「もう一つの仕事として、組織の『掃除』などがあります。『500年前の真実』とはこれに当たります」

ついに来た。

『500年前の真実』を知る時が来た！

「正式には旧地獄で罪人と癒着していた死神や鬼たちを追い出して、是非曲直庁を設立した事になっていますが、追い出された輩は一体どこに行ったのか記載されていません。それもそのはず、私がまとめて始末したからです」

「お母さまが始末した、という事は輪廻から外されてしまったのですか?」

「ええ、外してやったわ。罪人と癒着して甘い汁を吸っていた輩にはそれ相応の罰を与えました」

「外された魂はどこに行ったのですか?」

「慈悲深い十王様たちからは処分する様に指示がありましたか……」
お母さまは壁に立てかけてあった5×8の仕切り木箱を取り出した。

仕切り木箱には御札が大量に貼られ、結界が何重にも施されていた。

まさか……。

「私のコレクションとして、今まで苦しませてきました」

私はお母さまも十分慈悲深いと思っていた。

だが違っていた。

お母さまはとても怖いお方だ。

「なぜ、苦しませているのですか？」

「良からぬ企みをしたからよ。十王様たちは私にとって、親の様な存在なの。その十王様たちを追い出して輪廻転生のシステムを乗っ取り、さらに甘い汁を吸おうとしたのよ。そんな輩は十王様たちが許しても私は許しません」

静かなる怒りがお母さまにはある様だった。

「でも、それも今日までね」

「今日まで？」

「ええ、そうよ。フランドール、あなたは自分の意志で生物を壊したり、殺したりした事はあるかしら？」

「いいえ、能力が暴走した時以外はそんな事はしていません」

「じゃあ今日はその練習ね」

「……できません」

私は拒絶した。

お母さまは持っていた仕切り木箱を、一旦元の位置に戻した。

「まあいいわ。それじゃあ『ルビコン計画』の話をするけど覚悟は良いかしら？」

私はごくりとつばを飲み込み、相槌をうった。

これまでお母さまの恐ろしい経歴を聞かされてきたので、どんな内容なのか想像もつかなかった。

『ルビコン計画』は前段計画と後段計画の2つがあります。プランA

とプランBという感じね」

お母さまは2つを意味するVサインをした。

「前段計画の予定では、近日中に四季様は冥界拡張の為にこの白玉楼を訪れると考えています。多分部下の小町も連れてくると思います。小町を別室で待たせ、我々は離れの客間を使います。ここで重要な事は四季様を一人にするという点です」

「一人にする事が重要なのですか？ なぜですか？」

「それは後で説明します。四季様は我々だけになった時を見計らって、浄玻璃の鏡を使うでしょう。その瞬間があなたの仕事です」

「私の仕事……」

「ええ。浄玻璃の鏡を出したら、すぐさま鏡を『破壊』しなさい」

「浄玻璃の鏡は地獄の至宝です。そんなもの壊してしまつて良いんですか？」

「良いんです。浄玻璃の鏡を破壊することが前段計画最大のポイントです。破壊するという行為を見せてやるのです。これ以上、私達に関わるとお前もこうなるぞ、という最大限の警告というわけです」

「警告を無視したら？」

「もしも警告を無視して『白黒はつきりつける程度の能力』で噂話に白黒つけようとしたら……」

「その時は私の能力とあなたの能力、どちらが早く四季様を殺れるか競争よ」

お母さまは閻魔様殺しを提案してきた……。

監査

拝啓お母さま。

小子鳴鼓而攻之可也

ついに暴力の出番ですか？

私、フランドールは覚悟を決めるか迷っています。

——1980年代 白玉楼 地下大金庫室

私はあまりの緊張で筋肉が震え、口の中がカラカラに乾いた。

今、お母さまは何と言った？

どちらが早く四季映姫様を殺れるか競争だった？

お母さまは閻魔様殺しを提案されている。

「最初にあつた質問の回答だけど、四季様一人にする理由は暗殺するときの目撃者をなくすためよ。白玉楼で蒸発した、とする為ね。長くなれば、小町は居眠りをするはずだから、先に帰ったと起きた時に言えるわけ」

「そこまでお考えだったのですか……」

「四季様が脅しに屈しようが屈しまいが、我々の目的は達成されるのです」

「……脅迫や暗殺ではなく、なんとか穏便に……平和的解決で済ませられないのですかね？」

「無理ね。穏便に済ませたら、あなたの封印処分は間違いないでしょう」

「バッサリと切り捨てられてしまった。

平和的解決は無理なのか。

穏便に済ませたら、封印処分は確実か……。

小町さんの情報から封印処分の話を聞いたが、いまいちピンとこない。

四季映姫様は一体何を考えられて私達の仲を引き裂きたいのか。

「そもそも私達親子の仲を引き裂こうとする、四季映姫様の理由って何なのでしょいか？」

「どうせ大した理由ではない筈よ。地獄と冥界の戦力バランスが、とかでしょ。中途採用組の生真面目な閻魔様だし」

「私は……お母さまと離れ離れになるのは嫌です」

「私も同じ気持ちよ」

お母さまは私の対面に置いてある、座布団に正座で座られた。

そして私の瞳を見つめた。

「フランドール、私の思いを……決意をあなたに伝えます」

お母さまは落ち着いた、若干低い調子の声になった。

「あなたを拾う前……遠い昔だけど、私の心は満たされていなかったの。まるで完成目前のパズルのピースが見つからないような、出来上がるはずのものが、自分のせいで出来上がらない歯がゆさのような、そんな虚しさを私は抱えていたの」

「虚しさですか？」

「そうなの。最初は自分の能力で何とかなるんじゃないかと思って、『500年前の真実』にあった大掃除に参加して殺しまくったんだけど、結局虚しさは残り、私の心は満たされなかった」

「その後、どうされたんですか？」

「それから数年後ぐらいだったと思う。あなたが私の前にあらわれたのは。手のかかる赤子だったわ。それでもすぐに愛着が湧いたの。その頃からだったかしら。私の心が満たされる様になったのは」

お母さまはその場で天を見上げられた。

今見上げてもコンクリートの天井しか見えないだろう。

「だから、私はあなたを手放さない。もう昔の様な満たされない日々なんて考えたくない。それが閻魔様の命令であっても、私はフランドールを差し出す様な真似はしない」

『たとえ神にだって、私は従わない』

お母さまは閻魔様に従わないという、壮絶な決意をしている。

私も……覚悟を決める時が来たのかもしれない。

「フランドールは無理に閻魔様殺しに参加しなくても良いわよ。浄玻璃の鏡を『壊す』ところまでやってくれれば、あとは私がやるわ」

「いいえ、参加します」

「あら、どうしたの？」

「お母さまの決意に負けました。これでは自分の手を汚さず、汚い物には目をつぶり、そして『平和的解決』を叫んでいる事はまったく滑稽じゃないですか」

私は胸を突き出し、深く深呼吸をした。

「私は覚悟を決めました」

「決心してくれてありがとう。手を汚すという事が私の後継者としての第一歩です」

「お母さまのコレクションをもう一度、見せて頂いても？ 生物では

ありませんが、幽霊で練習しようと思います」

「わかったわ」

お母さまは再度、5×8の仕切り木箱を取り出した。

私は試しに1個目の幽霊を選定し、破壊の『目』を手のひらに持ってきた。

「？」

「どうしたの？」

「『壊す』相手の歴史が見える……」

「それは大発見ね。もしかすると、あなたは『壊す』対象の構造や歴史を理解できるのかもね。モノを『壊す』には構造が無意識に理解できないと壊せないからわかるけど、歴史が見られるのは何なのでしょね。無防備な状態の幽霊という状態だから見られるだけなのかもしれないわ」

お母さまのいう事は最もだが、疑問が残る。

「それでも、白玉楼にいる幽霊の歴史は見えませんか？」

「それは転生待ちの幽霊だからじゃないかしら。歴史というか、記憶をリセットされた状態というのかしら」

「なるほど、理解できました。近日中に肉体を持った閻魔様を標的に

するので、その時に試せばいいかもしれませんね」

「そうね。あなたの能力で簡易的な浄玻璃の鏡みたいな使い方が出来れば面白いかもしれないわ。私なんて、一度能力で殺して幽霊の状態で操らないと記憶とか引き出せないから、使い勝手が悪いのよね」

私はとりあえず、選定した幽霊の歴史を読み取っていった。

「昔は鬼神長クラスの鬼が結構居たんですね」

「ええ、この仕切り木箱の数と、今の真面目な鬼神長と合わせて結構な数が居たのよ」

「各鬼神長には配下として複数の鬼と死神がついていたんですね。計100名近く居たのか……。なになに毎日罪人と飲めや歌えのどんちゃん騒ぎしていたと。腐敗していますね〜」

「罪人と癒着していた40名の鬼神長は、それを見かねた十王様たちにお叱りを受けたの」

「その結果、面白くない彼らは十王様たちを追い出すクーデターを画策した、と」

「ええ、数では勝っていましたからね。真面目な鬼神長は少数派だったのよ」

「でも十王様たちは切り札を持っていた。お母さまという死神より恐ろしいワイルドカードを」

『即応任務』の指令自体は簡単なものだったわ。クーデターに加担したものは全て抹殺せよ、ですもの。真面目な鬼神長が露払いをしてくれたから、結構簡単に終わったけど」

「この幽霊の最後の記録は恐怖一色で塗りつぶされています」

「そいつが逃げ惑う姿は滑稽だったわ。身から出た錆だというのに」

そういうと、お母さまは笑われた。

その笑みを見て、私は背筋が凍った。

私は少し震えながら、お母さまに聞いた。

「一体、何名始末されたんですか？」

「100名から先はおぼえていないわ」

「……」

「私が始末した結果、十王様配下の者の総数は1/10近くまで減っ

た」

つまりお母さまは9／10始末した、と。

さらっと恐ろしい事を仰る。

「その後は歴史通り、このままじゃダメだという事で、真面目な鬼神長たちは『是非曲直庁』を作って統制を図った。是非曲直庁は鬼が作った組織と言われる由縁はこれね。また過労気味だった十王様たちに代わって、各地から地蔵を募集して閻魔様の代行としたの」

「その時採用されたのが、幻想郷担当閻魔の四季映姫・ヤマザナドゥ様という事ですね」

「ええ。中途採用とか色々やったけど、それでも地獄はスカスカになってしまったの。だから表向きは経費削減の為、地獄のスリム化と称して旧地獄を切り離した」

「それで旧地獄は地上のルールに従わない荒くれ者達に移り住んだ、と紫さまが仰っていました」

「その通り。そして今に至る、と」

まさか幽霊の歴史を読む事で『500年前の真実』の詳細がわかるとは。

さてよ。少しおかしい所がある。

なぜクーデターは失敗したのか。

クーデターが始まったら、お母さまを呼ぶ事も出来なかつただろう。

ギリギリ事前に知る事が出来たからこそ、お母さまという切り札を十王様たちが使えたのだ。

「そういえば、なぜクーデターは事前にバレたんでしょうか」

「罪人と癒着していた鬼神長の下にいた死神が垂れ込んだのよ」

「一体誰なんでしょう?」

「あなたも知っている、小野塚小町よ」

「え」

以外と身近な人物。

「この『500年前の真実』はシークレットA級の情報です。誰にも知

られてはいけません。私の後継者なら、これぐらいの事は出来るわよね？ 紫から教わった守秘義務、忘れてはいないわよね？」

「はい、忘れていません」

「宜しい」

「でも気がかりな事があります。閻魔様の持っている浄玻璃の鏡はどうなるのです？」

「十王様たち以外の閻魔様が持つ、浄玻璃の鏡ではシークレットA級の情報は全て黒塗りとなります」

「それを聞いて安心しました」

「それじゃあ、そろそろ始める？」

「はい。それでは、能力の練習を行います」

私は5×8の仕切り木箱を凝視した。

40個全ての『目』を手のひらに移動させた。

やった事が無い多さだ。

「40個全て破壊します」

「十王様たちからも処分命令は来ています。なんの気兼ねもなく破壊しなさい。いえ……白玉楼の主、西行寺幽々子が命令します。今すぐ40名分の幽霊を破壊しなさい」

私は40個全ての『目』を握った。

その瞬間、仕切り木箱は軽い音を立てて破裂し、バラバラになった。

「お母さま、私の意志で40名分の幽霊の処分、完了しました」

「それでこそ私の後継者ね。どうだった？ 自分の意志で幽霊を破壊した感想は」

「いとも簡単に『引き金』^{トリックガー}は引けました。ですが、背負ったものは……重いです。殺した相手の人生をしよい込むのは」

「大丈夫。その重さも、いずれ慣れるわ。いい子いい子」

お母さまは優しく撫でてくれた。

今はその優しさすら怖い。

お母さまはバラバラになった仕切り木箱を見てうーん、と唸っている

る。

「なんだろう？」

「この金庫室の不具合を1つ見つけたわ」

「何ですか？」

「消火設備とかは忘れず入れたというのに、掃除用具を忘れていたわ」

「今日は拾えるだけ拾って帰りましょう……」

「そうしましょうね」

黙々と拾うのもよかったのだが、お母さまにいくつか質問があったので、話しかける事にした。

「お母さま、2点質問がございます」

「何かしら？」

「1点は『ルビコン計画』の後段計画と、もう1点はお母さまが出撃される『即応任務』と通常の『お迎え』の違いについてです」

「わかったわ。それじゃあまず『即応任務』と通常の『お迎え』の違いについて説明するわね」

お母さまは木くずがついた座布団を叩きながら説明を開始した。

「さつき『即応任務』は輪廻転生のシステムを弄った不屈き者を即座に抹殺すると言ったわよね」

「ええ、仰ってました」

「具体的にどう弄るかなんだけど、大体は自分の自我や記憶を残したまま、転生しようとするのよ。つまり自分のコピー製造を輪廻転生のシステムでやろうとする事なの」

「それはいけないことなんですか？」

「ええ、生命体として不自然なのよ。子孫を残して死を得るという、生命としての基本プロセスから外れてしまっているの。コピーは所詮コピーだし、個性や多様性が生じないのよ」

お母さまは叩き終わった座布団を敷くと、正座して座られた。

「一番の問題が輪廻転生のシステムに割り込みをかける事なの。割り込みをかける権限を持っているのは十王様たちだけで、割り込みをかける例外としては歴史の編纂をしている御阿礼の子ぐらいよ」

「御阿礼の子？ 幻想郷の妖怪についてまとめた『幻想郷縁起』を編纂

している?」

「ええ、そうよ。御阿礼の子だって、継承されるのは能力だけで、それによって一部の記憶は残るけど、多様性が生じる様、自我や他の記憶は破棄されてしまう」

いくら閻魔様に転生が認められていても、生命体としてはあくまでも自然に、という事か。

「割り込みをかけるタイミングを誤ると、輪廻転生のシステム自体が止まりかねないのよ。そうなたらもう大変。死んだ人の魂は三途の河に到着できなくなるし、転生待ちの幽霊が転生できなくなってしまう」

「それは不味い事態ですね」

「そうなのよ。でも不正な割り込みは検出できるようになっているから、発見次第『即応任務』となって私が出向くわけ」

「『即応任務』の概要は理解できました。でもなぜお母さまは『お迎え』の任務も行わないのですか?」

「それは天人や仙人がそれほど悪い事をしていないからよ。悪い事といても寿命を延ばす事ぐらいだし」

「寿命を延ばす事はそれほど悪い事ではない、と」

「ええ、生命体として永く生きたいと願うのは自然です。それに重罪である輪廻転生のシステムを弄る訳でもないのよ」

「なるほど」

「あと、是非曲直庁内のナワバリというものがあるのよ。『お迎え』の任務全般は鬼神長の管轄だから、私がおいそれとしゃり出る訳にはいかないのよ」

「なんというか、しょうもない理由を聞いてしまった気がする……」

「組織が出来ればナワバリも出来るものなのよ。気をつけなさい、フレンドール。変な所を突いて藪蛇になる事は多い事なのよ。今回の『ルビコン計画』だって、私達のナワバリに四季様が土足で入ってきそうだから立てた計画なのだから」

「わかりました。肝に銘じます」

お母さまは私の回答に満足したのか、笑顔になった。

「あと『お迎え』の任務があまり積極的でないのは人手不足という問題もあるからです。以前白玉楼に来た死神の青年の様に、やっと新世代の死神が育ちつつありますが、まだ『500年前の真実』の傷跡が是非曲直庁内には残ってしまっています」

「これ以上、死神を消耗させる訳にはいけないので、本気で戦うわけにはいかない?」

「ええ、そうね。天人や仙人は強い奴ばかりだから、本気でやったらただの捨て駒になってしまうわけ」

「そうすると、『お迎え』の任務自体、形骸化してしまうのでは?」
「最近ではとりあえず挨拶して、狙わている旨を伝えるだけっぽいわけ」

「それでは、今は天人や仙人にとって良い時代なんですね」

「もしも増長したりしたら、意外と『即応任務』になってしまいかもね」

お母さまはニヤリと笑われた。

こゝ、怖い。

「それじゃあ、次に『ルビコン計画』の後段計画を説明するわね」

私もゴミ拾いが終わったので、座布団に座る事にした。

これは良く聞いておかねばならない。

「私が予想するに、前段計画で四季様は我々の脅しに屈すると思っております。特に閻魔様である四季様は円滑に裁判を行う義務があります。ここで欠員を出してはダメだという感じに『白黒はつきりつける程度の能力』は使わないで帰ると思います」

「そうすると、後日の逆襲が怖いですね」

「その後日の逆襲に備えるのが、後段計画となるわけです」

「どんな計画なんでしょう?」

「四季様は暗殺されない様、用意周到に公聴会の様な多人数がいる場所に我々を引きずり出すでしょう。それこそ、我々を捕縛して」

「公聴会、ですか?」

「そうです、公聴会を開けるだけのネタを四季様が手にした時、後段計画のスタートとなります。多分ですが、新聞の号外などで大々的にフ

ランドールの能力が暴かれるなどです」

「新聞には要注意と」

「ええ。公聴会で最初に尋問を受けるのは私だと思います。私の記憶にはシークレットA級の情報が沢山あります。だから四季様の浄玻璃の鏡では黒塗りの部分が目立つはずですよ。なんだこれはとよなって、上司の十王様が持っている最上位の浄玻璃の鏡を借りに行くはずですよ」

「そうなるの良い事があるのでしょいか？」

「ええ、あるわ。十王様たちに私達が尋問されている事に気付くはずですよ。そこで十王様たちは公聴会を辞めさせるはずなので、一旦控室に連れていかれるはずですよ。その時、プランBを発動させます」

「なんだか『多分』とか、『思います』とか、『はずですよ』とか今回の後段計画には不明瞭な部分が多いですね」

お母さまは痛い所を突かれたと言わんばかりに肩をすくめられた。

「しようがないじゃない、プランBなんてこんなものよ。プランBは……白玉楼まで無事に逃げる事よ！」

「捕縛されているのにどうやって!？」

「拘束を破壊して白玉楼まで一直線です。ポイントはどれだけ早く是非曲直庁の庁舎から逃げられるかです。庁舎の凶面を頭に叩き込む必要があるわね」

「でも逃げれば、さらに立場が悪くなるのでは？」

「十王様たちに私達の事が知ればそれでOKなのよ。後は白玉楼まで閻魔王様辺りが来てくれれば万事解決。それまで襲い掛かってくる死神や鬼たちを殺してやります。襲い掛かってくれば、の話ですよ」

「解決してるようには思えませんが」

「いえ、私は閻魔王様に要求が出来ます。『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』を持ったランドールの養育する権利を要求します」

「素直に要求に応じてくれるでしょうか？」

「是非曲直庁の機能を麻痺させるぐらい大々的に逃げる事が要求され

ます。白玉楼に逃げ込むのはこの為です。是非曲直の機能が麻痺しているなら、騒動をさっさと収束させたいという気持ちにさせるのです」

「事前に閻魔王様と相談するとかはできないのでしょうか？」

私は気になっていた。

ここまでする必要があるのかと。

「いえ、ダメね。閻魔王様はその管轄の閻魔王様の意見を重視されるお方だから。そうなると相談した時点でフランドールの能力がバレて一巻のお終い」

事前に相談案は既に考えられていた様だ。

「良いですかフランドール。『ルビコン計画』の真の目的はあなたの養育する権利を勝ち取る事。私の野望達成の礎とする事なのです」

「お母さまの野望とは一体何なのですか？」

「私の野望は……大きくなったフランドールが別の冥界の主になってもらう事」

私はてつきりお母さまの領地を割譲してもらうのかと思っていたのだが、どうやら違う様だ。

もしも私のささやかな願いが叶うのなら、お母さまの領地の近くにしたいな。

——1980年代 白玉楼

お母さまから色々聞かされた地下金庫室での出来事から、まる2週間が経過した。

あれから変わった事といえば、『ルビコン計画』の前段計画に向け、深夜に行う能力の練習内容を少し変更した。

それは至近距離での早撃ちファストドロの練習であった。

四季映姫様が浄玻璃の鏡を出した瞬間を狙う為である。

たった2週間の練習であったが、少しは早くなったと思う。

これでいつ四季映姫様がいらっしやっても大丈夫……だと思おう。

正直、まだ自信はない。だが、やらねばならない。

「ごめん下さる」

この声は……。ついに『ルビコン計画』の決行日が来た様だ。

アポイントメント無しで四季映姫様がいらっしやった。

「はい」

返事はお母さまがされた様だ。

玄関に向かうと、お母さまの読み通り、四季映姫様と部下の小町さんの2名でいらっしやった。

「お久しぶりです、四季様。ようこそいらっしやいました、それに小町も。今日は急にいらっしやいましたが、何かあったのですか？」

「お久しぶりです、幽々子。あなたとフランドールに話がありますので、少し時間を頂ければと」

「全く構いませんよ。それでは、客間にご案内させて頂きますね、小町は別室にてお待ちください」

「それでは上がらせて頂きますね」

「お邪魔します、西行寺様」

二人は靴を脱ぎ始めた。

挨拶が無いのは不敬なので、靴を脱いでいる途中だが私も挨拶をする事にした。

「お久しぶりです、四季様。入庁承諾書を提出した時以来でしょうか」

「お久しぶりです、フランドール。そうですね、約200年ぶりという所でしょうか」

私は小町さんにも挨拶することにした。

「お久しぶりです、小町さん。1年ぶりぐらいですか」

「お久しぶり、フランドールちゃん。もうそんなに経つのかね。早いもんだ」

小町さんは靴を脱ぎ終わると、私の頭を少しの間、撫でてくれた。子ども扱いされるのは嫌なのだが、小町さんは昔から私と出会うと頭を撫でてくるのであった。

久しぶりなのでちよつと嬉しい。

「さ、お二人ともこちらへどうぞ」

お母さまは私達に手招きした。

この後、小町さんは別室の客間で待つてもらい、四季様には一緒に離れの客間へいらっしやって頂いた。

離れの客間は6畳2間あり、3人で使うには十分な広さがあった。真ん中に大きめのテーブルがあり、座布団が6枚並べられていた。

四季様には客間の上座に座って頂き、私達はその対面に座った。

お互い正視したところで、お母さまは挨拶を切り出した。

「本日は遠いところ、ご足労頂き、ありがとうございます。それで私達にお話とはなんでしょうか？」

「つまらない芝居はやめなさい。今日はフランドールの能力について聞きに来たのです。フランドール、あなたは入庁承諾書記入時に『剣術を扱う程度の能力』と書きました。それは本当ですか？」

私は四季映姫様に聞かれたので、答える事にした。

もちろん嘘をつくのだが。

「ええ、本当です。嘘偽りはありません」

「本当ですね？」

「はい」

四季映姫様は懐から手鏡のようなものを取り出した。

今だ!!

私は5msで手鏡の『目』を掴んだ。

ガラスの割れる音が聞こえた。

浄玻璃の鏡を出した瞬間だった。

私、四季映姫は西行寺幽々子という女をなめていた事を実感した。

——1980年代 白玉楼 離れの客間

「えっ？」

私は素っ頓狂な声を上げてしまった。

今、目の前で起きた事に全く頭がついていかなかった。

浄玻璃の鏡が破壊されたのだ。

これではフランドールや幽々子から情報を得る事が出来ない……。私はプランBである、自分の『白黒はつきりつける程度の能力』でフランドールの噂話に白黒つけようとし、悔悟棒を振り上げた。

「どうされたのですか？」

幽々子が机に両手をつき、こちらを覗き込んできた。

私は幽々子の目を見て震えあがった。

完全に狩人の目で私を見つめていた。

フランドールも目を見開き、私を見つめていた。

私は二人の殺気がこの部屋中に充満するのを感じていた。

「本当にどうされたのですか？ いっぱい汗をかかれて」

「ヒッ」

あまりの緊張で冷や汗が止まらない。

二人とも私を暗殺するつもりなのだ……。

小町を別室に押し込んだのは目撃者を消すためだったのか。

私は完全にこの二人の事をなめていた。

まさか閻魔殺しまで決心していたとは思いもしなかった。

そこまでこの二人を追い詰めたのは……私か？

ここで悔悟棒を振り下ろしてもいいのだが、その瞬間に私は暗殺されてしまうだろう。

それに生命の危機を感じているのか、体が強張って振り下ろせない。

閻魔に欠員を出すわけにはいかないので、ここは……もうこちらが身を引くしかない。

私の切り札が2枚とも使えなくなってしまった。

私はゆつくりと悔悟棒を私の口元の定位置に戻した。

「なんでも……ありません……。先ほどの話も忘れて下さい」

こうなってはとうしようもない。

私は別件の冥界拡張の話始めた。

「幽々子、あなたは『幽霊移民計画』で顕界の廃墟などに転生待ちの幽

霊を送りましたね?」

「ええ、手狭になったので、そうさせて頂きました」

「今、顕界では幽霊が見世物になっています。これは由々しき事態です。すぐに『幽霊移民計画』を停止し、顕界から幽霊を引き上げなさい。」

「それは無理ですわ。既に飽和状態の冥界に空きスペースなんてありません」

「それでは不本意ながら、冥界の拡張を行いたいと思います。外に出て下さい」

私達は靴を履き、白玉楼の中心に立った。

悔悟棒を高く掲げ、私は叫んだ。

「ハアツ!」

悔悟棒を持っている手から、空間が引き延ばされていく感覚が伝わってくる。

これでだいぶ伸びただろう。

幽々子が話しかけてきた。

「一体どれぐらい大きくなったのでしょうか?」

「約1400km200由旬程度まで大きくしました。これで手狭になる事はありません」

「今までの4倍以上は大きくなったみたいですね」

「そうです。今の冥界は地獄より大きくなりました」

「ありがとうございます、四季様。これで顕界に送った転生待ちの幽霊を戻せます」

「必ず戻すですよ」

「近日中に必ず戻します」

幽々子の近日中に戻すという言葉質を取ったので、私達は帰る事にした。

「宜しい。それでは私達はこれにて失礼します」

「お疲れ様でした。道中お気をつけてお帰り下さい」

私達は始終無言で帰路に就いていた。

小町はこの状況にいたたまれなくなったのか、話しかけてきた。

「四季様、始終無言ですが、何かあったんですか？」

「ありました。私は脅しに屈してしまった。閻魔失格です……」

「え、あの二人に脅されたんですか？ 結構、温厚な方たちですよ？」

「二人の記憶を探ろうと浄玻璃の鏡を出した瞬間でした。多分、フランドールの『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』だと思っ
ますが、浄玻璃の鏡を破壊されました」

「地獄の至宝を破壊する決心までしていたとは……。四季様の『白黒はつきりつける程度の能力』は試されなかったんですか？」

「それが出来なかったのです！ あの毒蛇の幽々子とその娘フランドールは私に殺気をぶつけてきたのです」

小町はなんとも言えない表情をし、顔をポリポリとかきながら発言の許可を取ってきた。

「四季様、一言いってもいいですか？」

「……なんですか？」

「そういうの、藪蛇っていうんですよ」

「……」

「西行寺様は痛くもない腹を探られて怒ったんだと思います」

「いいえ、私の浄玻璃の鏡を壊したという事実は残りました。フランドールの真の能力は『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』という事で決まりだと思います」

「また決めつけるんですか？」

「あまり使いたくない手段なのですが……。小町、またこの情報をある機関に流してほしいのです」

「えー、もうやめましょうよ。西行寺様に関わったら、命がいくつあっても足りませんよ」

私は小町の忠告を無視した。

「天狗にジャーナリストが居たと思うので、そのジャーナリストに白玉楼に住んでいるフランドールの情報を流してきて欲しいのです」

「まあ、ボスのご命令とあらば、流してきますけども……。知りませんよ？ 次西行寺様が怒ったら、どんな事になるか想像もつきません

よ」

「大丈夫です。次回は西行寺親子を捕縛します。手も足も出させないつもりです」

「もう、知りませんからね。それではボス、ご自分の思う限りのことをしてください」

水鬼鬼神長も最後に仰っていた事を小町にも言われるとは……。

一体なんの事だろうか。

まあいい、次こそは幽々子の野心を確認してみせる。

野心とは、才能の別名と冷たく嘯く。そうかもしれない。

だが、野心には挫折がひっそりと寄り添う事を知るがいい。

成程、忠告のつもりか？ それとも――

「フン」

騙されはしない。

毒蛇は毒蛇を知る。

出せ、出してみせろ!! 毒の全てを!!

1 | 1 | 取引

取引

あたいは面倒ごとが嫌いである。

この前もフランちゃんへの減刑嘆願書を貰う為、地獄中を駆けずり回ったり、上司からは天狗のジャーナリストに情報を流せと言われたり面倒な事が起きすぎている。

あたいは、小野塚小町は面倒な事が起こらず、適当に三途の河の船頭ができれば十分である。

どうやら今年は厄年らしい。

——1980年代 地獄

500年前、地獄で十王様たちを追い出すクーデター計画があった。

あたいはクーデターを画策した、罪人と癒着している鬼神長の下で船頭の仕事をしていた。

仕事といっても、当時死神の船頭も多かったので、ちよつと仕事をするだけで後は飲めや歌えの楽しい職場だった。

それが十王様たちの目に留まったのか、ある時お叱りを受けた。

だが、あたいの上司である鬼神長は反省するどころか、お叱りを受けた事に腹を立て、ついには十王様たちを追い出そうと言い出したのである。

十王様たちを追い出す事に、あたいは反対だった。

死者の裁判を十王様たち以外の誰が出来るというのか？

そんなことをのたまったら、捕縛され、牢屋にぶち込まれてしまった。

あたいをボコボコにして捕縛してきたのは、かつての飲み仲間たちだった……。

しかし、あたいはある人のおかげで、クーデター計画を十王様たちに垂れ込む事ができた。

結果、肅清対象から外れる事はできたものの、大勢の仲間たちが西

行寺様に殺された。

今でも西行寺様にお会いすると、複雑な気分になる。

粛清が終わり、是非曲直庁設立後は新しい閻魔様である四季映姫様の下で船頭の仕事を与えられた。

それとは別に年長者の死神に課せられているシークレットA級の任務がある。

それは新しい閻魔様を育て、導くこと。

前回、自由にやらせた結果、罪人と癒着した鬼神長を生み出してしまった。

だから、今回はそうならない様に新しい閻魔様を道から外れない様にサポートするのが我々の仕事となった。

しかしキャリア組である、書記官の死神は自分のキャリアに傷がつくのではないかと恐れて閻魔様の行動にあまり口を出さない。

船頭である自分はキャリアなど気にしないので、ズバズバ発言してしまっている。

最近は何故か白玉楼の西行寺親子にご執心であった。

四季映姫様の考えでは地獄と冥界の戦力バランスを均等にすることを目指されている。

だが残念ながら西行寺様という戦力と釣り合うだけの戦力が現状是非曲直庁には存在しない。

四季映姫様はフランちゃんを西行寺様から取り上げ、鬼神長の下に付かせたがっていた。

確かにそれで戦力バランスは均等になるだろう。しかし時期が悪い。

フランちゃんはまだ子供だし、西行寺様は親としての義務を果たされている最中である。

反対を表明したが、意見を聞いてくれなかった。

子供を親から取りあげる事がどれほど恐ろしい事か理解していない様だった。

しかも相手はあの殺戮マシーンの西行寺様である。

温厚ではあるが、殺る時は殺る女である。

暗殺の危険もあったが、西行寺親子に情報を流した責任をとって、いざとなれば身代わりになるつもりだった。

あたいの四季映姫様の教育方針としては、最初は自由にやらせ、何度か痛い目に遭ってもらい、学習してもらおう形式をとっている。

暗殺未遂という、肝の冷えた思いをされて少しは懲りたのかと思ったら、また別の計画を立てられた様だった。

どうやらもう一度ぐらい、痛い目に遭わないと治らない様である。

相手との距離感というか、相手の立場に立って物事を考える事などが欠落している様に思われる。

四季映姫様にも困ったものだ。

それにしてもただの殺戮マシーンだと思っていた西行寺様も随分と丸くなったものだ。

以前の彼女だったら、禍根を残す様な真似はせず、すぐに暗殺していただろう。

もしかすると、フランちゃんに『殺す』ところは見られたくないのか、あるいはやらせたくないのか。

子供の親になって牙が抜けたか……？

その甘さが命取りにならないければ良いが。

あたいは西行寺様には複雑な感情を抱いているが、西行寺親子は気に入っている。

とりあえず、紆余曲折あったが、今日も一日船頭の仕事だ。

船頭の仕事は力仕事できついところもあるが、あたいは死者と話す事が好きなので、自分の性分にあっているといえる。

こんな仕事をしていて、一番の楽しみは何か？ 食事か？ 昼寝か？ いや、給料日だろう。

今月は四季映姫様を白玉楼まで送る護衛役をやったおかげで、危険手当もついた。

「おお、今月の給料は2,500地獄ドルじゃないか。いきつけのバーに行つてウイスキーでも呑むかな」

そう、給与で支払われる通貨、『地獄ドル』である。

是非曲直の財務部は地獄で信用ある通貨を発行した。

理由として、是非曲直の財源は、三途の河の渡し賃や、中有の道の屋台の売り上げで賄われているのだが、死者が落としていく通貨がまちまちだったり、貨幣価値が違ったりと、統一する必要が出てきたからである。

あたいら三途の河の船頭は、三途の河の渡し賃をいったん是非曲直の財務部へ納める必要がある。

船頭の給料は基本給プラス出来高制なので、実際給与として支払われるまで、どれぐらいの額を稼いだのか、よくわからなかったりする。それでも徳の高い死者ほど、多くの渡し賃を持っているので、優先的に運べば給与はよくなるのである。

他の死神の船頭は皆そうしているが、あたいは分け隔てなく運んでいる。

徳の低い、悪いやつと話すのも面白いからである。

職務中の行動ぐらい、地獄の民らしく、自由に行動したい。

自由に行動して、適当に仕事して、たくさん稼げれば悪くないのだが、実際そうはいかない。

今日は同僚を誘ってみたのだが、来られないとの事だった。男でもできたのか？

仕方がないので、1人で目的の店がある、地下への階段に足を踏み入れる。

ギシギシと鳴る階段は今にも壊れそうで、創業何年なのかが気になるところだ。

階段を降り切ると、古めかしいが重厚な扉がある。

この扉こそ、地獄の19丁目18番地にある、バー『1918』の扉だ。

酒とたばこ、質を問わなきやなんでもある。

扉を開けると呑み屋特有のアルコールとヤニの匂いが漂ってくる。店内に入ると、あたいは知り合いの白髪で丸眼鏡をかけているマス

ターに声をかけた。

「久しぶりだね、マスター」

「いらつしやい、小町さん。景気はどうだい？」

「何とか生き延びてるよ」

「そいつは良かった」

「マスター、ウイスキーと水たばこを吸わせておくれよ」

「両方合わせて15ドルだよ」

「はいよ」

あたいは懐から10ドル紙幣と5ドル紙幣を取り出した。

「今なら6番テーブルが空いているよ。水たばこは用意するから待ってな」

むむ、混んでいる様でいつもの3番テーブルには先客がいた。

テーブルの配置はカウンターを囲う様にコの字型に6卓配置されている。

マスターに話しかけやすい3番テーブルがあたいのお気に入りのお席だった。

仕方がないので、出されたウイスキー片手に端っこの6番テーブルに座った。

ほどなくして、うつすらと紅く燃える炭が載せられた、水たばこをマスターが持ってきてくれた。

こぼこぼと水たばこを吸いながら考える。確かに今日は給料日。

酒とたばこをやりながら、日ごろのうつ憤を晴らそうと考える奴も多いのだろう。

あたいもそんな一人だ。

ウイスキーも3杯目に突入した頃、やっとマスターに近い3番テーブルが空いた。

移動しようか考えている所に、この辺では見かけない顔の女性が入店してきた。

髪はあたいと同じ赤色で、服装は黒のきわどい服に白衣を纏い、頭に赤いボール状のものを載せていた。

一見すると奇妙なファッションの人物だった。

その女性は店内を通覧してからマスターに声をかけた。

「人を探しているのだけれど」

「その前に何か頼みなよ」

「ワインをお願いするわ」

「グラスで7ドルだよ。ボトルだったらピンキリだね」

「100ドル出すわ。残りはチップにして構わないからボトルでお願い」

「こりやどうも」

コルク栓の抜かれたワインボトルとグラスを出されると、その女性はいったんマスターに一番近い3番テーブルに座り、ワインをあおり出した。

上物のワインボトルがすぐに空になった。

マスターは目を丸くしてその人物に話しかけた。

「強いなだね、あんだ」

「昔から飲んでいたからね。なかなか美味しかったわ。それはそうと、そろそろ最初の話題に戻りたいんだけど」

女性は席から立ちあがり、マスターのいるカウンターに近づいた。

「いいぜ、聞いてくれ」

「この辺で『距離を操る程度の能力』を持っている地獄の民が出入りしているって聞いたんだけど、誰だかわかるかしら？」

あたいの事である。

吸っていた水たばこで、むせそうになる。

マスターはチラツとこちらを見てから答えた。

「知らねえな」

女性は100ドル紙幣をマスターに無言で渡す。

「……知らねえ」

さらに100ドル紙幣をマスターに渡す。

「……ああ、知っている。6番テーブルの赤髪の女だ」

……どうやらあたいはマスターに売られた様だ。

その女性はワイングラス片手にあたいの座っている6番テーブルの向かい側で立ち止まった。

寒気がするほどのいい笑顔だった。

緊張が体を駆け巡り、持っていた水たばこのパイプを落としそうになる。

「こんばんは、死神さん。相席してもよろしいかしら」

「こ、こんばんは、どうぞ」

「ありがとう」

緊張して口ごもってしまった。

女性はお礼を返すと、向かいの席に座った。

「私はドクター・カーター、精神科医よん」

あからさまに偽名だ。

男性名を女性が使うわけがない。

さて、どうする？ こちらも偽名を使うべきか。

「あたいは小野塚小町」

この女性は格上の相手だつてのは気配でわかる。

ここは素直に答えた。

機嫌を損ねたら大変そうだ。

もう起こってしまったているが、これ以上の面倒ごとは御免である。

「それで、そのカーター先生は、あたいに何の用だい？」

カーターと名乗る女性は目をつむり、わざとらしく手をかざしてきた。

「私にはわかる、あなたはフラストレーションがたまっている。いい傾向ではないわね」

「……」

女性は手をかざし終わると、ニヤツと笑った。

欲求不満か、と問われれば確かにそうだ。

あたいは自由に行動して、たくさん給与が欲しい。

だが、雇われの身であるのなら、その願いは叶わない。

「原因は自由に行動したいけれど、給与に直接響くところかしら」

「どこまで調べているんだい？」

さとり妖怪でない限り、わかる筈がない。

相当前からあたいの事を観察していた事になる。

あたいが是非曲直庁所属の死神というところまでは既に調査済みという感じか。

しかし何故？

「私はその悩みを解決できるかもしれない、と言ったら興味が出る？」

「……」

あたいは即答を控えた。

興味がない、と言ったら嘘になる。

「もしも、興味がある、と言ったら？」

「興味があるなら、すぐに私の事務所に行きましょう！」

その女性はあたいの手を握ってきた。

「ちよつとちよつと！ 待っておくれよ！ まだ水たばこを吸い終

わって……」

あたいが言い終わる前に、体に浮遊感があつた。

あたかも自分の能力、『距離を操る程度の能力』を使った様な感覚だった。

あたい達が到着した場所は緑豊かな場所で、ぽっかりと穴があけられたかの様にギリシア風建築の宮殿が立っていた。

入り口には装飾が施された巨大な柱が6本並び、その奥にはガラス窓と木製のドアが並べて配置されていた。

「さあ、私の事務所はこっちよ」

案内されるがままに、ドアから宮殿の内部に足を踏み入れたのだが、内装が血の色の様に朱く、趣味が悪い。

次に目に入ったのは宮殿中央にある池で、そこに立っているものは、3つの体を持つ女神、ヘカテの像であった。

不思議な事にその像の頭上には大きな玉があり、アルファベットで『THE WORLD IS YOURS』と刻まれていた。

『世界は君のもの』とは大きく出たものである。

こんな贅沢な宮殿を立てるぐらいだ、ここの住人は相当うぬぼれているのか、それとも本気なのか。

前者であれば、適当にあしらえばいいだろう。

ただ後者だった場合、厄介ごとが大きくなりそうだ。

「ほらほら、こっちよん」

足を止めて、少し考え込んでいた様だ。

カーター先生は2階中央のテラスから、あたいを呼んでいる。

先ほどのヘカテの像を囲う様に左右両側から大理石の階段が上へと伸び、2階中央のテラスに繋がっていた。

テラスには小ぢんまりとしたドアがあり、どうやらそこが事務所の入り口らしい。

カーター先生は先に入ってしまったので、あたいは階段を上り、ドアの前でノックをすることにした。

「どうぞ入って頂戴。歓迎するわ」

「失礼します」

事務所の内装も豪華の一言で、テーブルは鏡の様に磨かれた、巨大な黒色の御影石が使われていたし、燭台は装飾を施された物が壁伝いに並び、ガラス窓には高級そうなカーテンが巻かれていた。

御影石のテーブルにはペンスタンドと電話機が置かれていた。

カーター先生はというと、革張りで背もたれの上部に髑髏を象った装飾が付いた、ひじ掛け付きの椅子でふんぞり返っていた。

あたいは来客用の椅子に座らず、御影石のテーブルに両手を載せて前かがみになり、目線をこの女性に合わせてから、疑問をぶつけてみる事にした。

但し、ドえらい人だったら困るので、一応、敬語で。

「カーター先生、そろそろ本当の名前を教えてくださいてもよろしいですか？」

「え？ ドクター・カーターじゃ不満？」

「不満も何も偽名じゃないですか、どう考えたって」

「あらん、よく気付いたわね」

馬鹿にされているのか、試されているのか。

「私の名前はヘカーティア。ヘカーティア・ラピスラズリ」

「……」

あたいは息をのんだ。

ギリシア神話の冥府神の一柱であり、その地位はハーデス、ペルセポネに次ぐ第3席である。

格上の相手だとは思っていたが、まさかこれほどは。

先ほど宮殿中央にあった、3つの体を持つ神、ヘカテの像その人であった。

彼女は、地球・月・異界の3つの世界で同時に身体を持っており、それぞれ自由に行き来が出来る、まさに『世界は君のもの』を体現している様な女神様である。

「黙るって事は、私の事を知っていたのかしら？」

「ええ、まあ」

「なんで？」

「いやあ、同僚にギリシア神話が好きなのやつがいました……」

頭をかいて、適当な嘘を付いておく。

ここで話題を変えて有耶無耶にしてしまおう。

「地獄の女神様直々のご指名とは、光栄の極みです。なぜ死神の中でも落ちこぼれのあたいなんですか？」

わざとらしく、深くお辞儀をしてから、前々からの疑問をぶつけてみた。

なぜあたいなのか、その真意を聞き出したい。

「そうねえ、死神の中で一番自由を求めているって事と、あなたの能力が便利そうだったから」

「能力はわかりますが、自由を求める事が大事なのですか？」

「この地獄じゃ、一番大切な事は自由を求める事だと思っているわ」

「確かにほかの死神連中は職務に忠実ですね」

「だから探したのよ。自分の足を使ってね」

やはり以前からあたいの事を監視していたのは確かな様だ。

しかし、女神様直々に調べたのか？

「ご自分で調査されたのですか？ 部下を使わず」

「部下はいることは、いるんだけどね」

「信用しているのは自分のみって事ですか」

「その通り、自分以外に誰を信用できる？ 誰もいない」

今まで微笑みを浮かべていたヘカーティアさんは、ここにきて笑みの無い顔をした。

強いがゆえに、孤高なのかもしれない。

だが『友達』が欲しいのなら、あたいを事務所に連れ込んだりはしないだろう。

わざわざこんな辺境の一室に招かれているのだ、必ず本題があるはずだ。

ここは同じ志を持っている所を攻めてみるか。

「あたいに何をさせたいんですか？ 自由を求める『同志』じゃないですか、腹を割って話ませんか？」

「それもそうね。私が気になっているのは、最近噂になっている『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』を持っているという吸血鬼の事なの」

あたいが四季映姫様に命令されて地獄中に流しまくった噂だ。

まさかこんな大御所の方の耳にも入るとは思いもしなかった。

「私としては、そんな危ない能力を持っている奴はさっさと始末するか、手元に置いておきたいのよ。だから噂が真実かどうか確認したいの」

あたいも真実は知らない。

だが今までの証拠でほぼ間違いない事実だろう。

「あたいの認識では真実かと思えますよ」

「『思います』じゃだめなのよ。私が欲しいのは真実そのもの。確定事項じゃないとダメなの」

「わかりました……」

「それとその吸血鬼が所属している是非曲直の動きが知りたいの。」

私はその吸血鬼が所属する事によって是非曲直庁が脅威となる組織なのか、それとも取るに足らない組織なのかを見極めたいの。それを内部から見る『目』が欲しかったのよ」

「あたいにスパイになれと？」

「なれ、じゃなくてなるのよ。これから」

「えーと、拒否権とかはないんですか？」

「服従か死か、どちらがいい？」

「……」

ヘカーティアさんはいい笑顔だった。

きつと、本気なのだろう。

背中に嫌な汗が流れる。

どうやら覚悟を決めるときが来た様だ。

彼女はさらに言葉を続ける。

「別にタダでやれって言うてるんじゃないわ。仕事を受けてくれるかわりに、月1,000ドルでどうかしら。これであなたは自由に行動できるようになれる筈よ」

「安すぎるねえ。その3倍の3,000ドルは貰わないと！」

あまりの安さに落胆したのと同時に、声を大にしてあたいは言った。
た。

敬語もここまでだ。

「ちよつとちよつと、信用もないのに高すぎるんじゃないかしら」

「服従か死か。あたいはその覚悟に見合った報酬が欲しいねえ」

あたいは家の棚に置いてある死神の鎌と自分の手の『距離』を0にして瞬時に鎌を取り出した。

今度は『距離』を弄って、相手の傍らへ瞬間移動する技を使い、死神の鎌を彼女の首元に突きつけた。

いつ命を取られてもおかしくない状況でもヘカーティアさんは笑顔のままだった。

試してみるかしら、と言わんばかりの雰囲気醸し出していた。

「言っておくわ。あたいは汚い奴以外には汚い手は使わない。あたいの武器はガッツと信用！ それを汚す事はしない！」

あたいは自分の決意も含めて力強く言い放った。

笑顔のヘカーティアさんと少し見つめあってから、死神の鎌を手元から消して、元居た御影石のテーブルの前に『距離』を弄って瞬間移動した。

その後、わざとらしくお手上げのジェスチャーをする。

「あたいを信用しないなら、どうとでもしてくれ」

相手は地獄の女神。

あたいの殺生与奪権は現状ニコニコ顔のヘカーティアさんが握っている。

彼女の言葉を待っている数秒を長く感じられた。

「あなたはハートでしゃべっている。度胸もあるし、能力も便利そうですね。気に入ったわ。要求通り3,000ドル支払いましょう。そのかわりキリキリ働いてもらうんだから」

「それでは、取引成立という事で」

あたいの口調も敬語に戻す。

ヘカーティアさんかというと、姿勢を正し、笑顔から真顔になっていた。

目を細めてから、あたいに対して警告をしてきた。

「ひとつ言っておくわ。二度と言わないわよん」

つぶやかれた瞬間から、周囲温度が2〜3℃低くなった気がした。そう思ったのもつかの間、ものすごいプレッシャーを与えてきた。その重圧であたいは声も出せない。

「裏切るな。裏切りは許さないわよん」

あたいは首を縦に振る事しかできなかったが、重圧が嘘の様に消えていた。

ヘカーティアさんはまた笑顔になって、気さくに話しかけてきた。

「それじゃ、あなたのコールサインから決めないと。アヌビスなんてぴったりじゃないかしら?」

「エジプト神話、冥府の神の名を頂くのは畏れ多いです」

「他は……そうね、エンジェルというのはどうかしら?」

「『死神』に『天使』ですか」

死神に天使。

実に皮肉が効いている所が気に入った。

「不満かしら?」

「いえ、特に不満はありませんよ。ただ、切り刻まれて殺されそうな名前だなーと」

「何よそれ。不満がなければ、エンジェルで決定するわね」

そういえば、ヘカーティアさんのコールサインを聞いてなかった。

あたいはヘカーティアさんに声をかける事にした。

「ヘカーティアさん」

「何かしら?」

「あなたは、どうお呼びしたら宜しいでしょうか?」

「ドクター・カーターでいいわよん」

「折角ですが、『同志』と呼ばせて下さい」

「それで構わないわ」

「では同志ヘカーティア、なんなりとご命令をどうぞ」

またわざとらしく、深くお辞儀をする。

「まず欲しいものは是非曲直庁の組織図ね。もちろん名前入りのものよ」

「承知しました。期限は? できれば、正式な手順を踏みたいのでお時間を頂ければ幸いです」

「半年の期間をあげましょう」

「ありがとうございます。半年と期間が空きますが、その間どういたしましょうか」

「ひと月ぶんの給料と経過報告のために、私の部下を例のバーに行かせるようにするわ」

例のバーというと、バー『1918』の事だろうか。

行きつけの店だし、問題はなさそうだ。

「部下の名はクラウンピース。地獄の妖精よ。コールサインは『ランパース』」

バーには見慣れない妖精の羽を辿れ、と。

「それにしても、ずいぶん慣れているみたいね、初めてとは思えない

わ。あなた、スパイの経験があるんじゃないのかしら」

痛い所についてきた。うまくごまかそう。

「実のところ、是非曲直庁の上司からスパイまがいの仕事を請け負っていきまして。自分の担当している幻想郷で要注意人物を監視しろと、無給で」

「無給で!?!」

へカーティアさんは驚いた表情をとったあと、やれやれという表情をとった。

「調査するまでもなく、是非曲直庁は財政難でブラック化が進んでいそうね」

「あたいは監視するフリして幻想郷の各地で居眠りしていますよ」

「私の仕事はきちつとしてもらうんだから。ほら、前金で3,000ドルよ」

へカーティアさんはテーブルの引き出しを開けると、封筒に入った札束を渡してきた。

札束を数えてみると、確かに3,000ドルある。

「確かに3,000ドル領収しました。領収書は出ませんよ?」

「構わないわ」

ここで少し不安になったことがある。

へカーティアさんのお金の出どころだ。

一体どんな事業をやって稼いでいるのだろうか。

「所で、へカーティアさん。お仕事は何をなさっているのでしょうか?」

「地主みたいな事をしているわ」

「地主ですか……」

「ご想像にお任せするわ、信用が上がればそのうち教えてあげる」

へカーティアさんは不敵な笑みを浮かべた。

「今度は私から質問をするわ。あなたは噂の吸血鬼の事はどこまで知っているのかしら?」

「フランちゃんの事なら大体知っていますよ」

「へー、噂の吸血鬼はフランちゃんっていうの。正式な名前は?」

「幼名フランドールです」

「フランドールねえ……。ああ、話が長くなりそうだから座って座って」

「はあ」

あたいは促されるまま、来客用の椅子に腰を掛けた。

「飲み物は何か良いかしら？ ウイスキー？ ワイン？」

「ウイスキーを」

へカーティアさんは窓際に置いてあった、グラスと酒のセットを持ってきた。

二人分のグラスを取り出すと、おもむろに手をかざした後、フィンガースナップを行った。

不思議な事に球状の氷が瞬時にグラスの中にできていた。

「凄い、流石は魔術を司る神……」

「こんなのは序の口よん」

そう言いながら、氷の入ったグラスにウイスキーを注ぎ始めた。

「どうぞ」

「ありがとうございます」

あたいはウイスキーの入ったグラスを受け取り、お礼を言った。

「それじゃあ取引成立を祝って乾杯といかない？」

へカーティアさんはあたいのグラスに自分のグラスを近づけてきた。

あたいもグラスを近づける。

「乾杯」「乾杯」

あたいは一口ウイスキーを飲んだ。

美味しい。どうやら上物の様だ。

「どこまで話したっけ。そうそう、樽の吸血鬼はフランドールというのよね。それにしても、あなたは大体知っていると聞いていたけど、どうして？」

「フランちゃんは幻想郷という地域の冥界に住んでいるのです。あたいも同じ地域の三途の河の船頭をやっている関係で、業務報告書を取りに行くなどフランちゃんとの関係が深いんです」

「そうなの。いつ頃からの関係なのかしら？」

「フランちゃんは約500年前、赤子の状態で冥界に送り込まれたんです」

「500年前……。是非曲直庁ができた後？　できる前？」

「できた後ですね」

「新世代の鬼なのね。赤子の状態だったという事は、保護者がいるって事かしら？」

「ええ、西行寺幽々子様という冥王の母親がいます。血は繋がってないですが」

「その西行寺幽々子はどんな能力を持っているのかしら？」

「『死を操る程度の能力』を持っています」

「……母親の能力も大概ね」

へカーティアさんは目を見開き、少し震え声になっていた。

「ええ。地獄の大粛清は彼女の仕事ですし」

「恐ろしいわね。その能力、神にも通るのかしら？」

「通ると思いますよ。この間、閻魔様を暗殺しようとしていましたし」

「随分と好戦的ね。まるで拔身の刃物じゃない」

「いえ、普段は温厚な方なんですよ。こちらが娘を取りあげる様な真似をしようとしたので怒ったんだと思います」

「母親から子供を取りあげる？　そんな事をしようとしたの？　母親

がそんな恐ろしい能力を持っているの？　あなたの上司は自殺志願者か何かかしら？」

へカーティアさんはあきれた表情をしていたが、あたいは肩をすくめて釈明した。

「何分、閻魔様もまだ幼いので、相手との距離感というか、相手の立場に立って物事を考えると、その辺を理解していない様なんです。仕事はご自身の能力で出来るので、変に自信を持つちゃってて」

「あなたも大変ね」

「ゆっくり育てていくつもりです」

「あなたの上司の事はもう良いわ。もしもフランドールを私の手元に持ってくるなら母親も一緒じゃないとダメっばいわね」

うーん、とヘカーティアさんは少し考える仕草をした。

あたいはウイスキーをあおり、のどを潤した。

「決めた。後々協力関係を築きたいから誘拐するときは二人いつべんに誘拐することにしませう」

「誘拐しておいて協力関係なんて築けるんでしようか？」

「大丈夫大丈夫。長期間軟禁して『ストックホルム症候群』を引き起こさせればいいのよ。でもそれにはまず誘拐する為の弱みを握らないと……」

「妖夢という庭師見習いがいるので、そいつを人質にすれば宜しいかと」

「庭師見習い程度で人質としての価値はあるのかしら？」

「フランちゃんは大層気に入っていて、とても大事にしています。十分価値はあるかと思えます」

「大体の誘拐計画はできたわね」

「いつ実行されるのですか？」

「あなたが『真実』を掴んだ後かしら。だからだいぶ後だと思うわよ。それこそ20年とか30年後ぐらいかしら」

「だいぶ先なんですね」

「あなたが『真実』を早く掴めば、もしかすると繰り上げで実行に移すかもね」

「あたいは上司次第つてところですか。西行寺親子の身辺を嗅ぎまわるには、命がいくつあっても足りないのです、上司の計画に乗っかります。それまでお待ち頂ければかと」

「わかったわ。あなたの報告を待つことにするわ」

あたいはさらにウイスキーをあおり、飲み干した。

緊張していてハイペースで吞んでしまったので、少し良くわからな
い感じになってきた。

ヘカーティアさんは空になったグラスにウイスキーを入れてくれた。

「思い出した事があるんだけど、質問いいかしら？　って酔っているわね」

「大丈夫ですよ」

「閻魔って浄玻璃の鏡を持っているんじゃない？ この密会の内容は筒抜けになるのかしら？」

「自分の部下の記憶を浄玻璃の鏡で見ると、自分自身の信用を貶める行為として忌諱されています」

「それは部下の任命責任みたいなものかしら？」

「ええ。もしも部下に浄玻璃の鏡を使ったら、自分で決めた部下を信用できないのか、という事になってしまいます」

「今までバレずに済んでいたんだ。」

「今後も大丈夫だろう。」

「あたいは、またウイスキーをあおった。」

「後、閻魔様の仕事である裁判以外で、みだりに浄玻璃の鏡を使う事も忌諱されています。プライベートで使ったら、それこそ本当に嫌われてしまうので。でも背負っている罪の重さがわかる悔悟棒を持っているので、余りにも重い場合は浄玻璃の鏡を使うみたいです」

「そして説教をする、と」

「そうですね、だから説教時は浄玻璃の鏡を常用していると錯覚させてしまい、避けられてしまっているのでしょうか。地獄に堕ちない様、閻魔様の親切心からの説教なんですけどね」

「とりあえず、気になっていた事は解決したわ」

「話も終わった様なので、グラスに入っているウイスキーを一気に飲み干した。」

「へカーティアさんは上機嫌で私を玄関まで送ってくれた。」

「たまにここで今みたいな飲み会を開かない？」

「いいですよ。こんなに美味しいウイスキーなら大歓迎ですよ」

「それじゃあ隔月の第3水曜日辺りで」

「謝礼もその時に一括でもいいですよ？」

「ダメダメ。しっかり毎月払わないと。その方がいいでしょう？」

「ええ、こちらとしてはありがたいです」

あたいはヘカーティアさんから解放されたので彼女の屋敷を後にした。

緊張したので腕を上上げて伸びをする。

「うーうーん、それにしても随分と辺鄙な場所まで来たな」

どこだここは。帰れるのか？

「面倒ごとは御免なんだけど……」

面倒ごとは御免だが、地獄の大物、ヘカーティアさんと取引ができた。

月3,000ドルという現金とヘカーティアさんの情報。

きつとあのお方もお喜びになるだろう。

「ふふっ」

あたいは今後起きそうな騒動を予感して少し笑った。

『たまには、火薬の臭いを嗅ぐのも悪くない』

1 | 12 | 日常

日常

拝啓お母さま。

『ルビコン計画』の前段計画は無事成功。

平和な日常が戻ってきました。

私、フランドールはこの幸せが長く続く事を期待します。

——1980年代 夏 白玉楼

私は『幽霊移民計画』の後片付けに追われていた。

四季映姫様に言われた通り、見世物になっっている転生待ちの幽霊を
顕界からこの冥界に戻す為の下準備が始まった。

幽霊を送った顕界の場所を再度チェックしているところだ。

抜け漏れがあったら大変だ。

しかしチェックが終わったところで、私には幽霊を顕界から冥界に
戻す能力はない。

またしても紫さまとお母さまのお力が必要なのだ。

最低限、紫さまは必要だ。

白玉楼に住む幽霊に私が命令して、転生待ちの幽霊を呼んできても
らえば、お母さまの手を煩わせる事はないだろう。

ここは独り言をつぶやいてあのお方を呼んでみるか。

「紫さま、なんて仰るだろう」

「私がかどうかしたのかしら？」

よかった今日は暇だったのだろう。

紫さまはイヤホンをつけてWalkmanで何か音楽を聴いてい
る。

「紫さま、お忙しいところすみません」

「音楽聴くので忙しいわ。って、あんまり驚かないのね」

「今回は紫さまを呼び出すつもりで独り言をつぶやきましたので」

「つまり、私はまんまとフランドールの策略に乗せられてしまった、
と」

「そんなつもりはありませんよ。ちょっと紫さまの確認を取りたくてお呼びしました」

私はこの大妖怪をはめる為、『確認』を取るという所を強調した。

「確認、ですって?」

「はい。以前、私の演説で『幽霊移民計画』を手伝ってくれると仰っていましたよね?」

「ええ、確かに言いましたわ」

「大妖怪に二言は無い?」

「ありませんわ」

私はここで手札を表にする。

「では『幽霊移民計画』の『後片付け』も、もちろん手伝ってくださいませよね?」

「な!?!」

「顕界に移民させた転生待ちの幽霊を冥界に戻す作業が残っております」

「……」

「もちろん、やって頂けるのですよね?」

「……ええ、やるわ。あなた、だんだん幽々子に似てきたわよ」

「それは嬉しい限りです」

「それと、『幽霊移民計画』ですが、冥界に戻すところまでは予想できていましたので、元からやるつもりでしたわ」

「え!?!」

私は紫さまの言葉に驚いた。

既に予想済みだったなんて。

「私から一本取ったつもりなんでしようけど、まだまだ甘いわ」

「ごめんなさい、それしか紫さまを動かす方法がわからなくて」

私は肩をすくめて説明した。

「それならば、もう一度、演説をして私をその気にさせたら良いじゃない」

「演説は疲れるからやりたくないですよ」

「今からでも遅くはないわ」

「えー」

「ほら、表に出る出る」

私は紫さまに促されるまま、私の書齋から白玉楼の庭に出た。

私達が庭に出ると、待つてましたと言わんばかりに幽霊たちが庭に集まり始めた。

とりあえず、適当に言葉をまとめてみるか……。

そんなことを考えていたら、庭は既に満員御礼状態となっていた。

紫さまは私の事をチラツと見ると、Walkmanの停止ボタンを押し、つけていたイヤホンを外された。

さて、ショータイム！

『幽霊移民計画』は私が白玉楼に来てから、初めて立てた計画であった」

「この計画では諸君らの働きを見せてもらい、感動している」

「本日はこれらの計画の締めくくりとして、移民させた転生待ちの幽霊をこの冥界に戻すことをしてもらおう」

「単純な作業ではあるが、無事任務を果たしてこの白玉楼に帰投してもらいたい。以上」

今回は演説の後に敬礼を試してみた。

敬礼を終えると、この前の演説と同じく、万雷の拍手と私の愛称である「フラン」という声が地響きの様な音になっていた。

私はサイドテールを翻し、紫さまと一緒に私の書齋へ戻った。

書齋に戻っても拍手はずっと続いていた。

「これでは道化だよ」

「紫さまは始終無言だった。」

演説としては少し短めであったのが気に入らなかったのだろうか？

そんなことを思っていたら、紫さまがいきなり抱き着いてきて、頭を撫でてきた。

「フランドール、流石ね。私の娘にしたいぐらいよ」

「うわっぷ、私は西行寺幽々子の娘です！」

「そう言わずに私の娘になりなさい」

「いやー！」

そんなじゃれ合いをやっていたら、室温が2〜3℃下がった気がした。

騒ぎに気付いたのか、お母さまが書斎にやってきた。

「紫、何をしているの……？」

お母さまの瞳にハイライトがない。

相当怒っている様だ。

「あの、幽々子……？ これは、そうね。じゃれ合いよじゃれ合い」

お母さまは無言で紫さまが持っていたWalkmanを取り上げると二つの拳でプレスした。

バキヤツという破裂音とともにWalkmanは潰されてしまった。

飛び出した磁気テープが私の足元に転がってきた。

貴重なWM-109が。

「次は紫、あなたがこうなる番よ」

「幽々子、落ち着きなさい。私はフランドールをいじめていた訳ではないわ」

「まずはフランドールを解放しなさい」

解放された私は、お母さまに抱き着いた。

お母さまは私の頭を優しく撫でてくれた。

「よしよし、怖かったのよね？」

正直この後、二人の本気の喧嘩を見たかったが、庭や屋敷に被害が出そうなので本当の事を言うことにした。

「私は紫さまとふざけていただけです」

「本当なの紫？」

「ええ、ちよつとふざけていただけですわ」

「そうなの、ごめんなさいね紫。私だったらつきり紫がフランドールをいじめているのかと思って」

「良いのよ、気にしないで」

「それで紫さま、話が途切れてしまいました。『幽霊移民計画』の『後片付け』は手伝って頂けるんですか?」

「ええ、最初からそのつもりでしたし。フランドールの演説に心を動かされたので、手伝ってあげます」

よかった。これでは私だけで何とかなる。

「ありがとうございます、紫さま」

「演説って……。さっきの騒ぎは演説のせいだったのね。またフランドールに演説をさせたの?」

「ええ、フランドールの演説は本当に凄いのので何度でも聞きたいものなのよね」

「もう、紫ったら。フランドールにあまり無理をさせてはダメよ」

お母さまは紫さまを責めたのだが、私としてはそこまでしなくても良いと感じた。

紫さまの持ち物であるWalkmanを壊した張本人なので、お母さまも反省すべきだと思った。

でも私を弄った罰として言わないでおう。

「わかっているわ。そういえば、買ってきた大福があるけど、食べる?」

「食べるわ」

紫さまはお母さまを大福で買収した様だ。

お母さまは大福を頬張った後、私の能力について紫さまに話し始めた。

「そうだ紫。フランドールの能力が少し拡張されたみたいなのよ。いつから出来る様になったのかはわからないのだけど、この前、試した時にそれがわかったの」

「破壊という恐ろしい能力以外でどんな能力が拡張されたのよ?」

紫さまは少しあきれ気味だ。

「対象物が幽霊の場合、その幽霊の歴史を読み取れるみたいなのよ」
「え……?」

「生きている者だったら、どうだったのかしら？」

「この前、四季映姫様で試した時は表層の感情しか読み取れませんでした。しかも表層の強く想っている部分以外、ぼやけてしまってよくわからない感じですよ」

「それでも凄い能力ね。さとり妖怪程ではないけど、相手の第一目標がわかるのは便利だね」

「考えてもみなかった。紫さまのいう通り、確かに相手の第一目標が見えるのは有利だ。」

「相手がどんな想いで私に会おうとするのか、すぐにわかるのは良い。」

「紫さままで試してみても良いですか？」

「え、いやよ。そんな危ない真似はしないで」

「わかりました」

むう、しょうがない。次回の来訪者被害者に期待しておこう。

それから数時間後、『幽霊移民計画』の『後片付け』が始まった。

紫さまに幽霊の送り先である顕界の廃墟と冥界の間にスキマを次々と開けてもらい、呼びに行く幽霊をスキマの中に入れていった。

数分経つと、まるで打ち上げ花火の様に、スキマから幽霊が天高く吹きだすさまは圧巻であった。

スキマを閉じる前に、一応お母さまにも入ってもらい、取りこぼしがないか確認してもらった。

『幽霊移民計画』の時の様にすぐには終わらなかったが、なんとか当日中には作業が完了した。

「特に問題もなく終わりましたね」

「ええ」

「このまま何も起きなければ良いのですが……」

「いいえ、絶対に何か起きるわ。四季様もあきらめていないだろうし」

私はこのまま何も起きない事を期待したのだが、お母さまは違う意見をお持ちの様だった。

「ねえ紫」

お母さまは紫さまに話しかけた。

「何かしら？」

「もしも私と是非曲直庁が対立したら、どちら側につくかしら？」

「そんなの、簡単な事よ。私は『勝った側』につくわ」

「模範解答をどうもありがとう」

お母さまは皮肉をいうと、肩をすくめて実情を紫さまに話し始めた。

「実のところ、私のシミュレーションでは捕縛された時に逃げさせるのはフランドールだけだと思っているの。多分、私は無理なのよ。足も遅いし」

「それで？」

「もし、あなたが助ける気になったら、合図を送ってくれないかしら」

「どんな合図をご希望なのかしら？」

「そうね……丸めた1ドル紙幣を足元に投げしてくれるかしら」

「それじゃあ、助ける気になったらそうするわ」

「ありがとう、紫」

——1980年代 秋 白玉楼

『幽霊移民計画』の『後片付け』から2ヶ月後、季節は秋になっていた。

私は自分の書斎で業務報告書を書いていた。

『後片付け』で幽霊の数も増えたが、白玉楼の面積が4倍になったので影響は軽微だった。

今は特に『ルビコン計画』の後段計画に移行したわけでもなく、平和な日常が続いていた。

それでも非日常に対応するため、居間と客間のテーブルの裏にはダクトテープで紫さまから頂いたショットガンを貼り付けておいた。

紫さまに鹿撃ちがしたいと申し出たら、案外すんなりとショットガンを2丁用意してくれた。

絶対に人里には持ち込んでダメだと念押しされたが、残念ながら使うのは白玉楼内だ。

きつと紫さまも私の嘘には気付いているのだろう。

あえて私にショットガンを与えたのは、その方が面白くなるからだと思います。

平和主義者な私としては、使わないで済めば万々歳だったのだが……。

「ごめん下さい」

どうやら厄介ごとが舞い込んだ様だ。

業務報告書を小町さんが取りに来たにしては早いし、そもそも声が違う。

誰だろう？ 新しい死神の方かな？

でも業務報告書を取りに来る死神は、また小町さん固定に戻った筈なのに。

とりあえず、玄関に向かう事にした。

「はい。どなたですか？」

玄関を開けると、天狗装束に身を包んだ一人の鴉天狗がそこにいた。

「こんにちは。わたくし、社会派ルポライターのやっぺい、射命丸文と申します」

射命丸文と名乗る鴉天狗は名刺を私に押し付けてきた。しょうがないので受け取る。

確かに『社会派ルポライターあや』と書かれていた。

「ルポライター？」

「取材記者って奴ですね」

「つまり、新聞屋さんですか？」

「大きなくくりでいえば、そうなりますね」

新聞……号外……。『ルビコン計画』の後段計画にあったキーワードだ。

もしかしてこの射命丸さんは四季映姫様の使いなのか？

「それで射命丸さんはこの白玉楼にどんなご用件で？」

「いやー、白玉楼の桜紅葉は実に綺麗だと伺いましてねー。是非とも取材したいと思ひまして」

射命丸さんは実に綺麗なニコニコ顔だ。

怪しい。

「幽冥結界はどうされたんですか？」

「飛び越えてきちゃいました」

「閻魔様の許可なしに、ですか？」

「事前に許可は頂きましたよ」

事前に許可を取った？

ますます怪しい。

私は自分の拡張された能力の出番だと思った。

射命丸さんの『目』を手のひらに持つてくる。

『ブランドールさんの能力を確かめちゃいましょう』

……。

真っ黒だ。

私に『白黒はつきりつける程度の能力』が無くてもわかる。これは黒だ。

「私の一存では決めかねるので、家長であるお母さまを呼んでいただけますね。少々お待ちください」

「はい、待ってます」

私はお母さまの書斎へ向かった。

「お母さま、お忙しい所、失礼します」

「何かしら？」

「相談したい事がございまして。中に入っても宜しいでしょうか？」

「どうぞ」

私はお母さまの書斎に足を踏み入れた。

お母さまは和歌を詠まれていたのか、短冊をいくつも書かれていた。

「何かしら」

「社会派ルポライターの射命丸文と名乗る鴉天狗が玄関に来ておりま

す」

「それで、その鴉天狗の用件は何かしら？」

「この白玉楼の桜紅葉を取材したいとの事です」

「まともな理由ね」

お母さまは席を立たれると玄関に向かおうとした。

そのすれ違いざまに、お母さまにそっと耳打ちをした。

「どうやら、四季映姫様の手の者です」

「どうやって確認したの？」

「私の能力で確認しました。どうやら私の能力を調べようと考えているみたいです」

「わかったわ。私が対応するわね」

私達はお母さまの書斎から玄関に向かった。

「私が白玉楼の主、西行寺幽々子よ」

「こんにちは、西行寺様。わたくし、社会派ルポライターをやっている、射命丸文と申します」

「それで、桜紅葉の取材だったわよね。どうぞ、写真とか撮って行って下さいな」

「実はそれ以外に取材したい事がありました」

「あら、どんな事なのかしら？」

「ここではちよつと言えない事なので。是非とも上がらせて頂けませんかでしょうか？」

「いいわよ。ちよつと居間しか空いてないけど、それでも良いなら」

「全然構いませんよ」

射命丸さんは屋敷に上がる為、靴を脱ぎ始めた。

てつきりお母さまは理由をつけて追いつ返すだろうと思っていた。

だが予想を裏切り、射命丸さんを屋敷に上げる様だ。

何か対策でもあるのだろうか？

居間は6畳の狭い部屋で、120cm×80cmのテーブルが中央にあり、座布団が4枚敷かれていた。

私達が上座に座り、射命丸さんは下座に座った。

「それで玄関では言えない事って何だったのかしら？」

まずはお母さまが射命丸さんに質問をした。

「いやー、そちらのフランドールさんの能力についてなんですけど、
単刀直入に來た。」

しかも何故か私の名前を知っている！

私は自己紹介していなかった。

もう偽る必要は無いと踏んだのか？

「私の能力ですか？」

「そうなんですよ。私は『剣術を扱う程度の能力』と聞いたのですが本当ですか？」

「ええ、本当ですよ」

「私は違うと考えています」

射命丸さんは葉団扇を口元に持っていき、表情を読めなくした。

『剣術を扱う程度の能力』とは人間が多く持つ能力です。元来、鬼と
いう種族はもつと恐ろしい能力を持ちます」

「例えば？」

「例えば、『怪力乱神を持つ程度の能力』とか、圧倒的な力を象徴する
様な能力です」

「そんな強大な能力、私は持っていませんよ」

「あなたは嘘をついている」

「嘘、ですか？ それじゃあ、どんな能力だというのですか？」

「そうですね。例えば、『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』
という極めて強力な能力を持つていらっしやるのではないですか？」

「そんな能力を持つていたら、ただの破壊神じゃないですか」

「そうです、私はあなたを破壊神ではないかと踏んでいるんです！」

「私は白玉楼の主、西行寺幽々子の娘にすぎません」

「信頼できる情報筋によれば、あなたは拾い子だという話ではないで
すかー！」

あ、それNGワード。

一気に室温が2〜3℃ぐらいいさがる。

「さつきから聞いていたら、私達親子の話題にずいぶんと土足で踏み込んでくるのねえ〜」

お母さまは射命丸さんに重い殺気をぶつけていく。

「ブン屋というのは、一度怒らせてから本音を聞き出す、というのは本当の様ね。まあ、命があればの話だけど」

「え?」

お母さまはテーブルの下に貼り付けられているショットガン、フランキ・スパス 1 2 を取り出すと、射命丸さんに向けて発砲した。

セミオート設定だったので、1 2 番ゲージの空薬莖が飛び出してきた。

射命丸さんは避けたのか、射命丸さんがいた場所の座布団と畳に、大穴が空いていた。

「あら? フランドール、どんなショットシエルを選んだのかしら?」

「確実に仕留められる様、最大威力の出るライフルスラッグを選定しました」

「次回からはダブルオーバックにしなさい。ライフルスラッグじゃショットガンの魅力が半減よ」

「この親子怖すぎるー!」

射命丸さんは私達の会話に引いていた。

まだまだ余裕がありそうだ。

きっと絶対に当たらない自信があるのだろう。

「この狭い居間にご招待したのはあなたの俊敏な動きを封じる為の予定だったんだけど、ショットシエルの選定にミスってるので仕留めるのは無理そうね。お夕飯に鳥料理を一品追加するつもりだったんだけど、諦めるしかないみたいね〜」

「私を食べても美味しくないですよ!」

お母さまはショットガンを連射していく。

動きにくそうな射命丸さんだったが、障子戸を破り庭に出る事に成功した。

「もしもこのことを上司に報告する様なら、こう伝えなさい。『この白玉楼と事を構えたいのなら、部下を送り込みなさい。全員殺してあげ

る』ってね」

「なんて恐ろしい！」

「いえ、この件のボスは四季映姫だったかしら？」

「!! どこまで知っているんですか!？」

「さあ？」

「つく！」

射命丸さんは結局桜紅葉の取材をせずに帰ってしまった。

これで本当に良かったのだろうか？

天狗と事を構えてしまったので、妖怪の山での鹿狩りは難しくなつてしまった。

「お母さま、これで良かったんですか？」

「うーん、今は少しでも仲間を増やして『ルビコン計画』の後段計画を有利に進められる様にしたんだけどね。天狗は狡猾な種族だから、どんな事を要求されるかわからなかったから屋敷に上げたのよ」

「天狗からの要求ですか？」

「ええ、四季様の情報を逆手にとって、領地の割譲を要求するとかかしら。四季様が相談した相手が、どうやら生粋のブン屋だったのが良かったわ」

「でも妖怪の山での鹿狩りが出来なくなってしまうました」

「大丈夫大丈夫。妖怪の山は皆ナワバリ争いしている場所だから、天狗と事を構えていなくても、いろんな奴が出て来るわよ。鹿狩りの時は私もついていくから安心して」

どうやら鹿狩りの心配はなくなった。

さて、この居間の惨状をどう収束させよう。

とりあえず、何も意識せずお母さまはショットガンをぶっ放したので、大工に来てもらわないと被害状況がわからないなあ。

あと業務報告書になんて記載しよう……。

季節は移り変わり、射命丸さん襲来から2ヶ月たった。

居間の修理は問題なく終わり、他に問題が発生することなく、12月初旬を迎えていた。

お母さまが言っていた、少しでも仲間を増やす事を考えていたが、思い当たる人物が誰もいなかった。

紫さまは今回の『ルビコン計画』の後段計画では幻想郷との利害関係が不一致なので消極的だし、小町さんは四季映姫様の直属の部下なので誘えないし、妖夢はまだ幼いし、私の思い当たる節の人を片っ端から考えてみたがダメだった。

うーん、私が箱入り娘状態だから交友関係が狭いなあ。

こんな事ならもつと表に出て友達を作るべきだった。

今更後悔しても遅いので、今はお母さまに頼るしかなさそうだ。

「ごめん下さい」

この声は……聞き覚えがある。

去年、私の誕生日パーティーに来た死神の青年だ。

私は玄関に出た。

「お久しぶりです、フランドール様。西行寺様はご在宅でしょうか？」
「どうもお久しぶりです。お母さまなら居ますよ。少々お待ちください
いね」

死神の青年は以前と同じ短めの金髪で、サングラスをかけていて、ズボンはジーンズ、革のジャケットを着ていた。

革のジャケットには鳥か竜を模ったと思われるワッペンと、『AR MY』と書かれたワッペンを付けていた。

今日は良い匂いのする袋を持ってきている。

お昼も近いので、きっと彼のお弁当なのだろう。

お腹がすいてくる。

死神の青年は、お母さまと軽く挨拶した後、12畳の客間へと案内された。

ここはお母さま自慢の枯山水庭園が見られる部屋である。

客間中央には90cm×160cmのテーブルがあり、座布団が6

枚敷かれていた。

死神の青年には上座に座ってもらい、私達は下座に座った。

「今日はどんなご用件でいらしたのかしら?」

「まずは自己紹介をさせて頂きます」

死神の青年はサングラスを外し、素顔を晒した。

童顔で瞳の色が綺麗な緑色なのが印象的だ。

サングラスを懐にしまった後、身分証を私達に見せてきた。

「鬼神長直属、特務部隊の徽章……?」

お母さまは身分証の徽章をみて少し驚いていた。

中身を見ると、写真と名前が書かれていた。

「特務部隊所属、死神ベルンハルト捜査官……。そう、ベルンハルトと

いうのね」

「ええ、前は名乗らずに申し訳ありませんでした。あの時は四季映

姫様の任務だったので詳しい事は言えませんでした」

「今回は違う任務でいらした、と?」

「ええ、今回は特務部隊の窓口役でもある水鬼鬼神長から任務を頂い

てきました」

「どんな任務か聞いても良いかしら?」

「ええ、構いませんよ。フランドール様を見張って『ありとあらゆるも

のを破壊する程度の能力』を本当に持っているか確認して来いという

任務です」

「それは水鬼鬼神長直々の任務なのかしら」

「ええ、他の鬼神長は介在しておりません」

「……」

お母さまは考えられる仕草をして黙ってしまった。

前回は感じたが、ベルンハルトさんは秘密である筈の任務をなぜ漏

らす。

私達親子を信頼してくれているのだと思うのだけど、ちよつと不味

いのでは?」

とりあえず、本当かどうか調べる為、私の能力を使ってベルンハル

トさんの『目』を持ってきた。

『昼飯くって帰ろう』

……。

普通の若者が人手不足の理由からいきなり特務部隊へ転属させられたパターンなのか？

きつとそうなんだな？

「それと、去年の誕生日パーティーの時に豆カメラで撮影した写真を焼き増ししてきました。どうぞお受け取り下さい」

お母さまがケーキを運ぶ写真や、私が酔ってお母さまに甘えている写真だ。

少し恥ずかしい。

「まあ写真まで。ありがとう、ベルンハルト。これはアルバムに入れて大切にするわ」

「家族写真は家族の元に、が一番ですから」

写真を一通り見終わった後、お母さまはベルンハルトさんが持っている袋に注目した。

「さつきから美味しそうな匂いがしているけど、その袋には何が入っているのかしら？」

「これは自分の昼食で、ハンバーガーが入っています」

ハンバーガーなんて食べた事がないぞ。

うちは基本和食で、時々洋食という感じだ。

これはお母さまが動きそうだ。

「うちの温かい昼食を出してあげるから、それを私に頂けないかしら？」

「べ、別に構いませんが」

「フランドール、今日の昼食の献立は？」

「今日ですか？ 確かアジの干物と白米、みそ汁だったと思いますよ」

「嫌いなものとかあるかしら？」

「いえ、自分は大丈夫です」

「人数追加の指示を幽霊にしなくて大丈夫なんですか？」

「もうしたから大丈夫よ。それじゃあベルンハルト、頂きますね」

お母さまはベルンハルトさんから取りあげたハンバーガーを包み

から取り出した。

牛肉の良い匂いがこちらにも漂ってくる。

よく見ると、レタス、トマト、玉ねぎ、牛肉のハンバーグがパンに挟まれている。

「食べる作法とかあるのかしら」

「それを作っている料理長曰く、丸かじりが一番美味しく食べる秘訣だそうです」

「そうなのね」

お母さまはハンバーガーに齧^{かぶ}り付いた。

「まあ、美味しい」

「自分が一押しของバーガーショップで買ってききましたから」

「地獄の連中がなかなか地上に出てこない理由が分かったわ。こんなに美味しいものがあるのなら、地上に出る必要がないもの」

「料理長は地上で修業したみたいですよ」

「あら、そうなの。今度『外』に行った時、探してみる事にしましょう」

お母さまは、ほんの数分でハンバーガーを完食してしまった。

私も一口欲しかったが、諦めよう。家長権限である。

「ご馳走様でした」

「お粗末様でした」

お母さまはハンバーガーを食べ終わると、真剣な眼差しでベルンハルトさんを見た。

「水鬼鬼神長の任務を打ち明けてくれた、義理堅いベルンハルト捜査官殿、私達親子を信じてくれてありがとう。これから起こる事はあなたと、あなたの上司である水鬼鬼神長しか教えてはいけません、と言ったら守れるかしら?」

「え、どんな事なんでしょうか?」

「これから教える事は私達親子の秘密です。その秘密を守れますか?」

「わかりました。秘密を守ります」

「それじゃあちよつと書斎に行つて書くものを書いてしまうので、この客間で少々お待ち頂けますか?」

「はい、お待ちしております」

「フランドール。ついてくるのよ」

「はい」

客間を出ると、私とお母さまは書齋にそろって入った。

お母さまは早速、硯で墨をすり始めた。

私は疑問があつたので、お母さまに質問をぶつけてみた。

「お母さま、ベルンハルトさんをこちら側へ引き込もうという計画ですか？」

「その通り。それと同時に、彼の上司である水鬼鬼神長もこちら側へ引き込む計画です」

「ベルンハルトさんから情報漏洩が無いでしょうか？」

「ある程度真実を知っていれば、自ずと口は堅くなります。それに期待しましょう」

硯で墨をすり終わり、お母さまは紙に筆を走らせていく。

内容は……。水鬼鬼神長殿、特務部隊所属のベルンハルト捜査官から聞いた内容は真実である事を白玉楼の主、西行寺幽々子が保証します、と。

なるほど、書物の様な残るものには肝心の情報を記載しないのか。流石お母さま。

さらにお母さまは面談の日程を書き込んでいた。

12月25日12時。私の誕生日である。

この説得が成功すれば、水鬼鬼神長が来るし、失敗すれば、私達を捕縛する為、死神がわんさと押し寄せてくるだろう。

虎穴に入らずんば虎子を得ずという故事がある。

危ない橋ではあるが、渡りきれれば、是非曲直庁の大物とパイプが出来る。

お母さまは『賽を投げる』様だ。

「さて、これでどんな反応があるのやら」

「わからないですね」

「水鬼鬼神長が私の思い描いている通りの人物だったら、こちら側に来てくれると思います」

「？」

「まあいいわ。客間に戻りましょう」

客間に戻ると、私達はベルンハルトさんを裏庭までご招待した。

その後、能力の練習をする射的台を見やすい30m付近に設置した。

ベルンハルトさんは少し戸惑い気味だ。

「射撃練習でも見せてくれるのですか？」

「いえ、フランドールが能力を見せてくれます」

「能力、ですか？」

「ええ」

お母さまは幽霊を操って射的台に5枚のお皿を配置した。

「フランドール、右端からお皿を『破壊』していきなさい」

「はい」

私は返事をする、5枚全てのお皿の『目』を手のひらに持ってきて、順番に握っていった。

すると、お皿は右端から順番に割れていった。

「なっ……。なっ……。！」

「フランドール、ベルンハルト捜査官にあなたの能力を教えてくださいなさい」

「私の能力は『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』です」

「地獄でホットな話題になっていた噂は本当だったというわけ」

「西行寺様、震えが……。止まりません」

「誰しもそうよ。私だって最初は怖かったもの」

「なんて報告をしよう……」

「最初に言っていた、私達親子の秘密というのは私の娘、フランドールの能力の事です。報告は水鬼鬼神長のみをお願いしますわね」

「わかりました。報告は水鬼鬼神長だけに行います」

「ありがとう、ベルンハルト。それと、私から水鬼鬼神長宛ての手紙を渡して頂けるかしら？」

お母さまは先ほどしたためた手紙をベルンハルトさんに手渡しした。

「わかりました。渡しておきます」

「くれぐれも、水鬼鬼神長以外は他言無用ですからね」

「わかっております。こんな秘密、喋る訳にはいきません」

「この秘密を公開したのは、部外者では初めてね」

「よく信用してくれましたね」

「あなたが義理堅いからよく。私達親子を信じて水鬼鬼神長の任務をバラしてくれたからかしら」

「今となると、少し怖いものです」

お母さまは私達親子を信じてくれたと言っていたが、きつと貰ったハンバーガーがとても美味しかったので秘密を公開する気になったんじゃないかと思った。

この後、ベルンハルトさんは、うちで温かい昼食を食べて地獄へ帰っていった。

玄関で見送った際、お母さまが一言仰った。

「これで、『賽は投げられた』」

『ルビコン計画』の後段計画が始まるのですか？」

「いえ、まだ準備段階といったところね」

「準備段階として仲間を集めている、という事ですか」

「その通り。ちゃんと準備をしないといけないの。シミュレーションだと私が逃げ切れない可能性が大きいから、是非曲直庁に属している者で、白玉楼側についてくれる人妖を探さないといけないの」

「水鬼鬼神長がこちら側についてくれれば御の字なんですけどね」

「そうね、後段計画の時に鬼神長がこちら側についてくれたら、それは大騒ぎになって是非曲直庁の機能は停止するでしょう。それを狙います」

「それでも逃げ切れるでしょうか？」

「そうね、私は機械仕掛けの神デウス・エクス・マキナに頼むしかないのかもね。大きな借りは作りたくないんだけど」

機械仕掛けの神デウス・エクス・マキナ……？

まさか、紫さまを巻き込むつもりなのだろうか？

1 | 13 | 水鬼鬼神長 #

水鬼鬼神長

拝啓お母さま。

私、フランドールは能力を公開してしまいましたが、この後どうしたら宜しいでしょうか？

——1980年代 冬 白玉楼

死神の青年である、ベルンハルトさんが地獄に帰ってから翌日、私はお母さまに呼び出しを受けていた。

お母さまの書斎まで行くと、地下室に入るよう指示された。

きつと、白玉楼の地下大金庫室に行くのだろう。

あそこであれば、入ってこられるのは紫さまぐらいなので、気兼ねなく秘密のお話ができる。

地下室から垂直の通路を通って、さらに2重の金庫扉を通って6畳の小さな部屋に出た。

ここには『500年前の真実』などが記録された業務報告書の写本など、表に出せないものが沢山ある。

写本が置いてあるステンレス製の棚の奥に、小さなテーブルに座布団が2つ。

私が下座に座り、お母さまが上座に座った。

「ここまで来れば大丈夫ね」

「はい、紫さま以外は入ってこられないでしょう」

「紫以外は無理でしょうね」

「もしも、紫さま以外の人妖が入ってきたらどうしましょうか？」

「そうね……。仲間に引き入れるか、殺してしまうかはあなたの判断に任せます」

最近知った事というか、真実を聞かされてからというか。

お母さまは以外と容赦ない。

「お母さまだったら、どうされます？」

「私？ 白玉楼の秘密を知られたら、生かして帰す訳ないじゃない」
そんな回答だと思っていましたとも。

さて今日はどんなお話があるのだろうか。

「前回、水鬼鬼神長が私の思い描いている通りの人物だったら、こちら側に来てくれると言いましたね？」

「はい」

「水鬼鬼神長が巷ではなんて呼ばれているか、フランドールは知っているのかしら？」

「えーと、最弱の鬼神長と揶揄されたりしていますね」

「そうです。そのせいか、鬼神長直属の特務部隊の窓口役を押し付けられたり、お迎えの任務を押し付けられたり、雑務全般を押し付けられたりと、虐げられている……ところまではいきませんが、現状に不満を持っているのは確かです」

「不満を持っている事が重要だと？」

「ええ、虐げられたり、現状に不満を持ったりしている事が重要です。いつかはこうしてやろう、と野心を持つものです。その野心に火をつけてあげればいいのです」

「野心に火をつけるといっても、我々は『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』を公開しただけに過ぎませんか？」

「そうだ、情報を公開しただけで、どうして野心に火がつくというのだろうか？」

「水鬼鬼神長はこう考えるはずです。『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』という強力な能力を持ったフランドールを『鬼神長』として擁立したら、自分の地位も向上するのではないのだろうか？」

「私が『鬼神長』に？」

「ええ、それだけの能力があれば、是非曲直庁の『鬼神長』として十分通用するでしょう」

「私を『鬼神長』として擁立するのは良いとして、水鬼鬼神長の地位は向上するのでしょうか？」

「きつと後輩として育ててくれるでしょう。今みたいに色々な雑務をやってもらつて。強力な能力をもつ後輩の影をちらつかせれば、他の

鬼神長も見方を変えるはずです」

お母さまは私に雑務をさせている自覚はあったのか。

業務報告書作成などは私にやらせて、ご自分は歌を詠まれている。

私としてはお師匠様との剣術の稽古に時間を割ければいいので、特に文句はないが。

「私に雑務をさせている自覚があったのですね」

「……。とりあえず、今後の水鬼鬼神長への対応策を考えます」

話をそらせた、という事はやはり自覚があったのか。

まあいい。今は水鬼鬼神長への対応策だ。

「話のわかる鬼神長だった場合、我々の要求も聞いてくれるはずです。フランドールが元服するまで『鬼神長』として迎え入れるのは待つて欲しいという要求です」

「話のわからない鬼神長だったら？」

「大量の死神や鬼を差し向けてくるでしょう。ルビコン計画の後段計画の始まりです。でもそんな事はないと思います」

「なぜそう思われるのですか？」

「私の勘と、動くなら事実を知った当日中に動く事でしょう。いまだに死神や鬼が来ていないので、話の分かる鬼神長だと私は踏んでいます」

「面談の時に要求を突っぱねる可能性は？」

「その可能性も低いわね。水鬼鬼神長は私の『怖さ』を知っているものの」

「そうか、『500年前の真実』でお母さまの露払いをした鬼神長の人なのか。」

「だったらお母さまの『怖さ』を近くで感じたはずだ。」

「だから水鬼鬼神長が私の思い描いている通りの人物だったら、こちら側に来てくれるわけです」

「でも私が『鬼神長』になるとか想像ができません」

「フランドール、この機会に今後の進路とか考えてみてはどうかしら？」

「今後の進路ですか……」

「私もまだあなたを手放す気はありませんが、あなたが元服して十分大人となった時、一つの進路として考えていても良いかもしれません。私としては別の冥界の主となって欲しいんだけどね。でも進路を決めるのはあなた自身です」

「私ですか？」

「そうです、フランドール。あなたは最良の未来を思い、進路を自由に選択するのです。ほかの誰でもない、あなた自身の選択です。あなたの選択に、誰も口を挟みません。私でさえもです」

そう言われても、今は実感がわかない。

私は席を立つとお母さまに抱き着いた。

「今は、あなたの娘でいさせて下さい」

「本当にフランドールは甘えん坊さんね。いいいいこ」

お母さまは私を優しく撫でられた。

どうか、この時間が永く続きますように。

金鬼鬼神長め、雑務ばかり私に押し付けて。

やっとの思いで仕上げた書類を持って行ったというのに、仕事を押し付けた本人が先に帰っているというこの仕打ちはなんなんだ？

私、水鬼鬼神長は不満を募らせている。

——1980年代 地獄

私は私室の席に戻ると冷めてしまったコーヒーを一口飲んだ。

金鬼鬼神長は次に寿命を迎える天人と仙人のリスト作成を私に頼まれた。

しかも今日中という日程である。

すぐにでも欲しいとの事だったのだが、本人は私の仕事を待たずに帰宅してしまった。

これではフラストレーションがたまる一方だ。

私としては金鬼鬼神長と対等の立場であると考えている。

だが、この扱いはなんだ？

これではまるで上司と部下ではないか。

そんな事を考えていたら、ノックの音が聞こえた。

こんな時間に誰だろうか？

「特務部隊のベルンハルトです。ご相談があつてまいりました」

ノックをしてきたのはベルンハルト捜査官だ。

『500年前の真実』の後に生まれた、新しい世代の死神である。

特務部隊の補充要員を欲する旨の書類を書いた所、彼が送り込まれてきた。

熟練の死神や鬼を欲していたのだが、まさか駆け出しの死神を送り込まれるとは思わなかった。

これも私に対する何かの当てつけだったのだろうか？

確かに是非曲直は慢性的な人手不足だ。

だがこの扱いはひどいと思う。

まだまだつらい任務に耐えられないと思ったので、比較的楽な任務を与えておいた。

彼には白玉楼に住む吸血鬼、フランドールの能力を確かめる任務を与えていたはずなのだが。

何か問題でもあったのだろうか？

「どうぞ入ってちょうだい。鍵は開いているわ」

「失礼します」

革のジャンパーにジーンズをはいている、いつものスタイルのベルンハルトだ。

だが、彼はひっきりなしに左右を確認したり、誰かいないか確認したり不審な行動をとっている。

本当に何かあったのだろうか？

「どうしたの？」

「いえ、水鬼鬼神長様以外、誰かいないか確認していただけです」

「こんな時間だし、私だけよ」

「それならよかった。白玉楼の主、西行寺様よりお手紙を預かっております」

「幽々子様から？」

「はい」

ベルンハルトは返事をする、懐から手紙を出してきた。

私はその手紙を受け取ると、封を切って中身を取り出した。

何々……。水鬼鬼神長殿、特務部隊所属のベルンハルト捜査官から聞いた内容は真実である事を白玉楼の主、西行寺幽々子が保証します、か。

それと、面談の日時が記載されている。

どういう事なのだろうか？

「それで、幽々子様から何を聞いてきたのかしら？」

「その前に、私から聞いた内容を他の鬼神長の方々に報告しないと約束してください」

「随分な要求ね。まだ内容も聞いてないというのに」

「それだけ秘匿して欲しい内容なのです」

「それも幽々子様からの要求なのね。わかったわ。他の鬼神長にこれから話す内容は流さないわ」

「ありがとうございます」

ベルンハルトのもったいぶった態度にもそろそろ限界だ。

一体何を聞かされた？

「白玉楼の主、西行寺幽々子様の娘であるフランドール様なのですが、持っている能力が『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』であるという事がわかりました」

私は目を見開き、驚いた。

あの適当な噂が本当だったなんて……。

正直、私はそんな能力があるなんて信じていなかった。

「それは本当なの？」

「ええ、白玉楼の裏庭でデモンストレーションをしてくれました」

「どんなデモンストレーションだったのかしら？」

「お皿を射的台に乗せて、それを破壊するという内容でした」

「……」

どうする？

ほかの鬼神長にはこの内容を流さないとしたが、閻魔に流さないと

は言っていない。

四季映姫・ヤマザナドゥにこの内容を流すか？

いや、幽々子様を敵に回したら命がないだろう。

ここは幽々子様に協力するか？

圧倒的な能力である、『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』を持つているのなら、特務部隊の隊員などではなく、新たな『鬼神長』として迎え入れる事も可能だ。

私の後輩として『鬼神長』に迎え入れたら、私の地位向上もできるかもしれない。

足繁く白玉楼に通って、『鬼神長』になるようにフランドールを説得するのも良いかもしれない。

「面談の日時が書いてあったわね……12月25日12時か」

色々会議などが入っていたと思うが、全部キャンセルしてでも行かねばならないだろう。

「ベルンハルト、この内容は他言無用です。ほかの隊員にも漏らしてはいけません。良いわね？」

「はい、わかっております」

「あと、面談の日時である12月25日12時から予定を開けておく事」

「自分も行くんですか？」

『鬼神長』が護衛なしで出向いたら、ぱりっとしなないじゃない」「わかりました」

ベルンハルトは観念した様だ。

それでは12月25日は白玉楼に乗り込みますか。

鬼と出るか、蛇と出るか。

拜啓お母さま。

本日は私の誕生日です。

水鬼鬼神長との面談日でもあります。

私、フランドールは緊張しております。

12月25日の午前中は12畳ある居間でテーブルの準備やクリスマスツリーの準備に追われていた。

12時ぴつたりには水鬼鬼神長がお見えになるので、それまでに誕生日パーティー兼クリスマスパーティーの準備を行わないといけない。地下大金庫室でお母さまとお話した後、特に大量の死神や鬼が白玉楼に押し寄せる事もなく、平和に過ごしていた。

お母さまの読み通り、水鬼鬼神長は話の分かる鬼神長だったのかもしれない。

「お母さま、クリスマスツリーの準備ができました」

「どれどれ……。ちよつと飾り付けが偏ってない？」

「そうですか？」

「赤のクーゲルと白のクーゲルがアンバランスよ」

「むう」

「ごこと、ここを交換すれば……。ほらこれでバランスが取れたわよ」

「わあ。ありがとうございます、お母さま」

「どういたしまして」

お母さまの飾り付けは完璧だった。

伊達に1000年も亡霊をやっていないという事か。

あとは電気を入れるだけでクリスマスツリーは完成となる。

電気を入れ、チカチカと色鮮やかに点灯するクリスマスツリー。

それを見ていたら、少し不安になってきた。

「お母さま」

「なーに、フランドール」

「私は心配です」

「水鬼鬼神長の事？」

「はい」

「フランドール、もう『賽は投げられた』のよ。後はなるようになるわ」

「もう後戻りできないのですね」

「そんなに心配？」

「はい。水鬼鬼神長がどのような方かも知らないので」

「大丈夫、水鬼鬼神長は慈悲深くて義理堅い方よ。悪いようにはしないと思うわ」

「そうだと良いのですが……」

お母さまは私の頭を撫でてきた。

「大丈夫よ、フランドール。もしもの時は私が守ってあげるから」

「はい」

「実のところ、私も不安で一杯なのよ」

お母さまが不安？

とてもその様には見えないのだが。

いつも通り、飄々としていて真意が掴みづらいのだが。

「ねえフランドール、あなたも上に立つ者となるはずです。上に立つ者がオロオロしていたら、部下はどう思うかしら？」

「とても不安になると思います」

「その通り。だから私はどっしりと構えています。部下の不安を取り除くのも、上に立つ者の使命だと私は思っています」

「上に立つ者の使命……」

「あなただったら、今は虚勢を張って、大法螺吹きぐらいがちょうどいいかもしれません」

「私は法螺吹きになりたくありません！」

「だったら中身を育てなさい。あなたが成長すれば、吹いている法螺貝がどんどん小さくなって、最後には真実だけが残る。どっしりと構えるぐらいの貫禄が生まれるわ」

お母さまは私にそれとなく成長する様に促している。

貫禄か……。もうちよつと大きくならないと、ただ虚勢を張っているだけになってしまいうだろう。

まだまだ先が長い。

「幽々子様」

お師匠様の妖忌が、お母さまをお呼びだ。

指定の時間の2時間前で、まだ10時だ。

水鬼鬼神長が来るにはちよつと早すぎる。

「なにかしら、妖忌」

「射命丸文と申す鴉天狗が玄関に来ております」

「なんですって?」

社会派ルポライターの射命丸文さんだ。

前回お母さまを怒らせてショットガンの的になった方だ。

今回は何か嗅ぎつけて来たのだろうか?

「わかったわ。私に対応するわね」

「私も行きます」

「あら、フランドールも? 心強いわね」

いざとなれば能力を使う事も辞さない。

私達はそろって玄関に向かった。

「どうも。清く正しい射命丸です」

「それで、その清く正しい射命丸さんはこの白玉楼に何の御用なのかしら?」 四季様に雇われた情報屋として現れたのかしら?」

「いえいえ。本日は自分の新聞を売り込みに来ただけですよ」

「本当かしら?」

お母さまは訝しんだ。

射命丸さんは持っていた新聞の束から1部を取り出し、我々に差し出してきた。

「私が執筆した『文々。新聞』です。1部差し上げます」

お母さまは受け取る兆しが無かったので、私が受け取った。

何々、洵れ井戸の中から白骨死体が見つかる? 随分と物騒な内容だ。

「どうです? 定期購読してみませんか?」

「私にそんな気はないわ」

「いえ、お母さま。これは定期購読してみてもどうでしょうか?」

「フランドール!」

「流石フランドールさん、わかっていらっしやる」

お母さまは私の発言で驚いていた。

「この新聞一つで幻想郷の情報が得られます。これは有益なのではないでしょうか?」

「でも天狗の情報って古いのよね〜」

「それでも、です」

お母さまはうーんと唸っていたが、観念したのか項垂れた。

「わかりました。フランドールがそこまで言うのなら、定期購読します」

「ありがとうございますー!」

「これだけあれば、1年分の購読料として足りるでしょ」

袖をゴソゴソとまさぐると、1円紙幣を射命丸さんに渡した。

「十分足りますよー! いやー、本当にありがとうございますー!」

射命丸さんは左右を確認すると、小声で話しかけてきた。

「そういえば、何か美味しそうな匂いがありますが、今日は何かあるのですか?」

「フランドールの誕生日パーティーが今日あるのよ」

「それはめでたい。私もご相伴にあずかっても宜しいですか?」

「ええ、どうぞどうぞ。鉛の弾で宜しかったら、たらふく食らっていつて下さいな」

「おお、怖い怖い。今回は遠慮しておきます〜」

射命丸さんはそう言い残して、玄関を出て飛び立ってしまった。

お母さまは天狗という種族が嫌いなのだろうか?

「フランドール、気をつけなさい。天狗という種族は狡猾です。心を開いて痛い目に遭うのは私達です」

「以前何かトラブルでもあったんですか?」

「ええ、昔々の話よ。でもこの話はあんまりしたくないの」

「それでは聞きません」

「ありがとうフランドール。それじゃあパーティーの準備に戻りましょうね」

「はい、お母さま」

何とか12時前には水鬼鬼神長の受け入れ準備は完了した。

12畳の客間の準備も整った。

後は水鬼鬼神長がいらっしやるだけだ。

「私は玄関でお待ちするから、フランドールは客間の下座に座って待っていて。水鬼鬼神長を客間にご案内したら、立ち上がって挨拶をするのよ」

「はい、わかりました」

「私より2階級も上の人物です。失礼の無いようにね」

「わかりました」

客間で待つこと十数分、ついに水鬼鬼神長がいらっしやったのか、玄関があわただしくなった。

お母さまが客間の障子戸を開けると、妙齡の女性が客間に入ってきた。

水鬼鬼神長の容姿は、瞳の色が落ち着く緑色で、髪の色は赤色で腰ぐらゐまであり、髪型はセンター分けだった。

そして鬼の象徴である、耳の近くから生える角によって、この方が鬼であるという事を自覚させられる。

それに少し筋肉質だ。

「金髪に虹色の羽根。あなたがフランドールなの？」

「はい。白玉楼の主、西行寺幽々子の娘でフランドールと申します」

「そう、あなたが。私は水鬼鬼神長。よろしくね、フランドール」

「よろしくおねがいます」

水鬼鬼神長は私の頭を撫でてくれた。

撫で終わったところでお母さまが話しかけてきた。

「さあ水鬼鬼神長様もベルンハルトもお座りください」

私達はお母さまに促されるまま、着席した。

水鬼鬼神長様たちが上座で、我々が下座に座った。

全員座ったところでお母さまが話を切り出した。

「お久しぶりです、水鬼鬼神長様。本日はお忙しいところ、ご足労頂き、誠にありがとうございます」

「本当にお久しぶりです、幽々子様。500年ぶりぐらいでしょうか。あの大規模作戦から随分と月日が経ちましたね」

「ええ、あの時はお世話になりました」

「いえいえ、私は露払いしたにすぎません」

水鬼鬼神長が仰っている大規模作戦とは『500年前の真実』の事だろうか？

ベルンハルトさんも居る事なので、どうも話をぼかしている。

とりあえず、水鬼鬼神長はどんな思いでこの白玉楼に来たのか、確認してみる事にした。

私は水鬼鬼神長の『目』を手のひらに持ってくる。

『フランドールの能力を今度は私が確かめてやる！』

特に捕縛などの文字が無かったのが幸이었다。

どうやら私の能力を確かめに来ただけの様である。

「それにしても、この白玉楼はなぜ臨戦態勢なんですか？」

「そんなつもりはありませんが……」

水鬼鬼神長は疑問を呈してきた。

「客間に入って少し『匂った』のよ。ガンオイルと硝煙の匂いがね。そして匂いの元を辿ると……あつたあつた」

客間のテーブルの下に手を入れると、そこに貼り付けてあつたショットガンを持ち上げてきた。

「スパス12^{tweive}。しかも初弾装填済みで引き金^{トリックガー}を引くだけで弾が発射されるわ。使用弾薬はつと」

スパス12のハンドガードをポンプアクションさせ、初弾を引き抜き、飛び出してきた弾薬を空中でキャッチする。

「12番ゲージのライフルスラッグ弾？ 熊でも殺そうとしていたの？」

「臨戦態勢ではないんだけど、最近ウチを嗅ぎまわるカラスが居ましてね。自衛の為ですよ」

「幽々子様も大変ね。娘さんの秘密を守る為とはいえ」

「誰が流したかは知らないんだけど、天狗にまで噂が広がっちゃいます」

お母さまは肩をすくめ、水鬼鬼神長に説明した。

水鬼鬼神長はスパス12をテーブルの脇に置くと、真顔でお母さま

に話しかけた。

「それで幽々子様、例の噂は本当なのでしょうか？ ベルンハルト捜査官からデモンストレーションの内容など聞いて把握はしているのですが、どうにも信じられなくて」

「フランドール、水鬼鬼神長様に報告しなさい」

「水鬼鬼神長様、噂は本当です。私の能力は『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』です」

「そう、噂は本当だったの……。スペックはどんなものかしら？」

「スペックですか？ 遠距離だと、有効射程が300mで動いているものでも破壊出来ます。近距離での早撃ちファストローだったら5msで破壊出来ます」

水鬼鬼神長様は驚かれて目を丸くされていた。

「有効射程が300mで、5msの速度で破壊が可能！ とても信じられないわね」

「フランドール、複数追跡マルチトラッキングの数も申告しておきなさい」

「対象が幽霊でしたが、40個まで複数追跡可能です」

「幽々子様、もうあなたの能力すら超えているのでは？」

「超えていると思います。私の能力では生きてさえいれば死を与える事は出来ても、無機物は無理ですもの」

「是非デモンストレーションを拝見したいんですが」

「大丈夫よね？ フランドール」

「はい」

「それでは裏庭までいらして下さい」

お母さまは立ち上がると、私達に手招きをした。

私達4名はそろって裏庭に出たところで、お母さまが説明を開始した。

「ここからでは見えませんが、300m先に射的台があり、そこにお皿5枚が置かれています。その5枚をこれから破壊します」

「確かにここからでは点にしか見えないわね。ベルンハルト、双眼鏡ビジュアルを」

「はいっ」

ベルンハルトさんは持っていたカバンから双眼鏡を取り出した。

「どうぞ、レーザー測距装置付きの双眼鏡です」

「ありがとう」

水鬼鬼神長はベルンハルトさんから双眼鏡を受け取ると早速覗き込んだ。

「確かに5枚のお皿が見えるわね。距離312m」

「それでは左からお皿を破壊していきます」

「わかったわ」

私は目を見開き、射的台のお皿に集中する。

あたかも近くにお皿がある様に見えてきたら、お皿の『目』を手のひらに移動させる。

そしてそれを握る。

「お皿が砕けたわ!」

「残り4つも続けて破壊します」

私は続けて4つの『目』を握っていく。

水鬼鬼神長は確認し終わったのか、双眼鏡をベルンハルトさんに渡すと私に笑顔を見せた。

「素晴らしいわ、フランドール。ところでお皿以外のもので試した事はあるのかしら?」

「そんなには無いです。お皿と幽霊、鏡だけです」

『岩』なんて破壊した事は無いのかしら?」

「そんな巨大なものは試した事ありませんね」

「それじゃあ『岩』を切り出して来るからちよつと待っててね。幽々子様、裏山の岩を切り出しても宜しいでしょうか?」

「ええ、問題ないですよ」

「さて、『岩』を切り出して運んできますか」

水鬼鬼神長は準備運動を始められた。

「自分もお供しましょうか?」と、ベルンハルトさん

「いえ、ここからは『鬼』の仕事よ」

準備運動が終わると、靴を履いて裏山まで飛んで行かれた。

その後、裏山で大きな水柱が噴出した。

きつと水圧で『岩』を切り出しているのだろう。

確か水鬼鬼神長の能力は『如何なる場所でも洪水を起こし、敵を溺れさせる程度の能力』だ。

『岩』を削るぐらい訳ないのだろう。

裏山に水柱が噴出してから数分後、ついに水柱の噴出が終わった。

どうやら『岩』の切り出しが完了したのだろう。

「何かしら、この音」

お母さまが眩かれた時から、ズンズンという地響きの様な音が聞こえてきた。

よく目を凝らすと裏山から水鬼鬼神長が大きな黒い『岩』を運んでいた。

射的台の近くまで来ると、『岩』を放り投げた。

まるで地震が起きたかの様に地面が揺れ、重々しい音が遠くから聞こえた。

目測で高さ10m、幅5m、奥行き5mの綺麗な直方体の『岩』だった。

『岩』を設置した後、水鬼鬼神長は飛んで裏庭の我々がいる場所まで戻られた。

「いやー、玄武岩を切り出して来たんだけど、硬くて時間がかかったちゃって。幽々子様、適当な場所に置きましたけど、良かったかしら？」

「ええ、大丈夫ですよ」

「それなら始めましょうか。ベルンハルト、双眼鏡を」

「はいっ、どうぞ」

「ありがとう。それではフランドール、玄武岩を破壊してみてください」

「はい、やってみます」

水鬼鬼神長は双眼鏡を覗き込んだ。

私は玄武岩の『目』を手のひらに移動させる。

「ん?」

何かいつもと違う手応えだ。

「それでは、玄武岩を破壊します」

私は玄武岩の『目』を握った。

次の瞬間、轟音と共に直方体の玄武岩は大爆発し、凄まじい砂煙を上げた。

300m離れていてもこちら側にまでパラパラと砂粒や小石が降ってきた。

煙が収まると、玄武岩があった場所には円形に小石の山がいくつもできていて、爆発の衝撃で近くに置いてあった射的台が大破してしまつた事がわかつた。

「あらあら、射的台が壊れてしまつたわ。また作り直さないと……」
お母さまは的外れな事を言い出した。

私の能力がここまで出来るとはシヨックだつたのだろうか？

正直、私も玄武岩がここまで破壊出来るとは思つてもみなかつた。

「これは……。す、凄い」

水鬼鬼神長は一言、仰つた。

バキつというガラスの割れる音が水鬼鬼神長の手元から聞こえた。双眼鏡を握り潰してしまつた様だつた。

「あらやだ。手が震えてる！ ハハハ……」

水鬼鬼神長は空笑いを始めた。

よほどシヨックだつたのだろう。

「……そろそろ客間の方に移動しますか？」

見ていられなくなつたのか、お母さまが部屋に移動する様に促した。

「……それもそうね。これ以上、ここに留まつてもしかたないし」
「それでは客間にご案内させて頂きますね」

私達はそろつて客間に戻り、元の通り上座に水鬼鬼神長とベルンハルトさん、下座にお母さまと私で席に着いた。

全員座つたところで水鬼鬼神長がお母さまに話を切り出した。

「今後のフランドールの進路について交渉を始めたいんだけど、良いかしら？」

「ええ、お願いします」

「フランドール、能力のデモンストレーション、どうもありがとうございます。実

のところ、こんなに強力な能力だとは信じていなかったの」

「私も玄武岩は初めてだったので、どんな結果になるかは、予想もできませんでした」

「こんなに強力な能力なら、あなたを『鬼神長』として迎え入れる事が可能だと私は考えています」

『鬼神長』に、ですか？」

「ちよつと待つて下さい」

お母さまが口を挟んだ。

「フランドールはまだ子供です。『鬼神長』として迎え入れるにも、元服してからにして頂けないでしょうか？」

「それもそうね。まだ焦る話ではないので。フランドール、あなたはまだ保護者がいる子供なので、元服してから改めて意志を確認させてもらいます」

「そう言つて頂けると助かります」

「幽々子様も宜しいですね？」

「はい。元服したら、もう私の手を離れます。後はフランドールが自由を選択するだけです」

ほつと一息。

水鬼鬼神長は私達親子の仲を引き裂こうとする事はしなかったし、お母さまの要求通りに事が運んだ。

元服、つまり私がしつかり成長して一人前になった時、改めて私の意志を確認するとの事だった。

水鬼鬼神長はさらに話を進めた。

「フランドールの進路について、これとは別件で相談したい事があります。四季映姫・ヤマザナドゥは、是非曲直の戦力バランスを均衡化させるため、フランドールを私が窓口役をやっている特務部隊の隊員にさせたい様です」

「それは初耳です。そんな提案を受けたのですか？」

「ええ、以前私とあの閻魔とで交渉を行いました。その時に閻魔から提案を受けたのです」

「封印処分の提案を受けたのではなく、ですか？」

「ええ、そうです。封印処分ではなく、特務部隊の隊員として受け入れて欲しいと提案してきました」

「そこまで話が進んでいたのですか……」

「ですが、特務部隊の隊員として受け入れた場合でも、私は親元である幽々子様の元に一旦返そうと考えています」

「そんな事をしたら、あなたの立場が悪くなるんじゃないかしら？」

「特務部隊の隊員となった場合は、閻魔より私の意志が優先されるので、問題は無いかと。それでも形だけでも隊員としての活動を行わなければならぬので、月一で演習には参加してもらおう事になると思いますが」

「フランドールが戻ってくるなら、それぐらいの条件は飲めますわ」

「ありがとうございます。是非曲直の戦力バランスという、どうでもいい理由で親子の仲を引き裂こうとする事に私は反対なので。こちらの場合も元服するまで幽々子様預かりという事で」

「どうやら水鬼鬼神長は今のところ我々の味方らしい。」

これで『ルビコン計画』の後段計画がどちらに転んでも私達親子は一緒にいられる。

「幽々子様、総括に入らせてもらっても良いかしら？」

「ええ、お願いします」

「一つ。フランドールの進路は元服後に確認する。二つ。特務部隊の隊員として受け入れた場合にも元服するまで親元に返す。これで良いわね？」

「はい、問題ありません。口約束だけでは怖いので、文章に起こしても宜しいでしょうか？」

「ええ、かまいませんよ」

水鬼鬼神長は了承し、お母さまは客間に置かれている書道セットを使い、早速硯で墨をすり始めた。

紙に筆を走らせ、文章を起こしていく。

ほどなくして出来上がり、水鬼鬼神長に出来上がった文章を確認して頂いた。

「問題ないわね」

「ご署名を頂いても宜しいでしょうか？」

「ええ、もちろんです。筆と墨を」

「どうぞ」

「ありがとうございます」

サラサラと水鬼鬼神長は筆を走らせ署名し、続いてお母さまも署名をした。

これは所謂、密約文書と呼ばれるものではないだろうか？

「水鬼鬼神長様、ここで見たり聞いたりした事は他言無用でお願いします」

「わかっているわ。この情報の取り扱いは慎重に行わないといけないわね。これは地獄の勢力図を一変させかねない情報よ」

水鬼鬼神長は一旦言葉を区切って、お母さまを正面から見据えた。

「幽々子様、聞きたい事があります」

「なにかしら？」

「あなたは『破壊神』を育てている自覚がありますか？」

水鬼鬼神長の質問は衝撃的なものだった。